

部落後編



偉大なるコンニャク

撮影 今井善一郎

# 上野村東部の民俗

近藤義雄

## 勝山・新羽

### 一、はじめに

昭和三十四年八月二日勝山・新羽地区を担当して調査に伺うことに  
なった。この両部落は、上野村の入口で、東部の中心地である。小・中  
学校も本校があり、かつての物資の集散も新羽が中心となっていたので  
商人宿も名残をとどめている。

午前中勝山公会堂で教育委員の黒沢さんに座長をつとめていたとき、  
前日の晩実況を見せていただいた火上げや山の話を聞き、午後新  
羽紙の話など中心にお伺いし、勝山の黒沢健さんの家に宿泊、画像板  
碑など拝見した。短時間で二部落も担当した関係上資料も限られた部分  
しか集められなかったこと、二部落ともはとんど共通しているので、特  
にことわらないのは両部落とも共通の事であり、部落名をその都度記す  
繁雑さをさけたためである。

### 二、苗字と家紋（勝山）

勝山では黒沢、今井、土屋、三木などの四つの姓が大部分を占めてお  
り、三木氏は黒沢氏の分家で住みつきの氏は結局黒沢、土屋、今井の三  
姓となっていて、黒沢氏は、平将門より出でるといわれ、松川菱の紋を用いているが、  
三木氏は四ツ目を用いている。  
今井氏は、木曾の今井兼平の子孫と称し、橋紋であり、落人伝説がの  
こっている。氏神の祭りも四ヶ所に分れていて、

黒沢氏は、平将門より出でるといわれ、松川菱の紋を用いているが、  
三木氏は四ツ目を用いている。  
今井氏は、木曾の今井兼平の子孫と称し、橋紋であり、落人伝説がの  
こっている。氏神の祭りも四ヶ所に分れていて、

### 三、山の神と狩猟（勝山）

山の神 山仕事をする時は山の神に禱せられないために「弘法やこの  
木をくれる山の神」と説いてから伐る。大木を伐った時は、きり株のサ  
ラになった所へ他の木の小枝を折って「山の神様にあげます」といっ  
てさしておく。また、明治のはじめ頃まではバンタイモチといつて、大き  
きな切株の上でヨキのみねでついたものをあげた。この時はウルチ米を  
つくるので、はじめは小枝をきつてヘラをつくり、それでよくねつてか  
らつく、餅はアンコロモチにして食べる。

オコゼ 鉄砲うちの護り神といわれている。ほしたものをお守りに入  
れ、弾丸も三つ入れておき、九死に一生といいうような時にこの弾丸を用  
いると助かるという。

熊とり 熊は穴熊を主にとる。穴を見つけた人は、ワクを組んで自分  
が見つけた印をする。熊が一たん穴に入るとなかなか出で来ない。主に  
大木のウロなどに入っているから、熊の胃というタンノウの大きくなっ  
てくる春先まで待つてから仕事にかかる。この時は、木のウロに上から  
棒等で突いて熊をおこらせ、熊が穴の出口へ出かかった時に鉄砲でうつ、  
熊を棒で突いた人はその間他の木へ逃るから三人がかりで獲ることが多  
い。普通タンノウは十二月には四匁位のものでも、二月になると三十  
匁位になるので春先まで待つてはとらない。

熊をとった時、腹をさき、中からキモを取り出し、山の神にお備えす  
る。腹をかけばその人がキモをもらえる。

### 四、農業（新羽）

土地 急傾斜の斜面を畠とし、田は最近まではほとんどなく、元禄十

一年の検地帳には田が全く見えていない。文久三年の勝山村年貢割付帳に「米四斗五升九合」とあるから、この頃から僅かに田が出来て来たことを想像出来る。烟は燒耕作と思われる。キリカニ烟とかモシクボという名が勝山に残っているのも、この地形や地味が燒耕に適していたのである。勝山の元禄検地帳にも「切代烟を町六反五畝廿九歩」とあり、全耕地九町七反三畝廿武歩であるから約一割八歩も占めている。これに対しても上烟僅かに四反歩しかない。そのため、上烟の土地は非常に大切にし、時々墓地が烟の一部にある。これは「墓地がついている烟は他人が嫌い、貧乏しても他人にとられることのないよう」というためだという。

作物 現在では大部分がコンニャクで、一部に桑葉がある。コンニャクの歴史はそう古くない。以前は養蚕にたよっていたので、桑園が大部分を占めていた。そのさかなことは季節労働者がほとんど養蚕関係であった。(交通交易の項参照)

自給肥料 堆肥、カリシキ、灰等で、カリシキは山から刈った草をそのまま桑葉などにひきこんだ。今ではコンニャク烟に用いている。灰はイロリの灰を使い、特に山で灰焼きした話は得られなかつた。

燒烟の方法 今でもやつていて、土用明けの日にやつた方がナツガリ、春するのがカッタダシといふ。春は枯れ草が多いので危険で多く夏する。第一年目はアラタといつて、ソバをまき、二年目は栗、大豆などをつく。場所は自分持の土地に限らず、他人の土地でも借りてする。(川和)

上野村の特産物は、最近コンニャクが主要な位置を占めているが、近年までは和紙の製造が大きな位置を占めていた。元禄十一年の勝山村検地帳には

右之寄

上烟四反三歩  
中烟四反九畝七歩

下畠九反四畝廿三歩

下々畠老町三反老畝廿七歩  
山畠老町五反四畝廿四歩

桑畠三畝廿老畝

楮畠老町七反三畝八歩

切代烟老町六反五畝廿七歩

合九町老町三反老畝廿七歩

楮畠老町十二月から三月の間に刈取る。

(1) 刈取 植を十二月から三月の間に刈取る。

皮むき 植の株を二尺五六寸にきり、たばねて五一六把ずゝ大釜に

入れてふかす。釜は下にスノコを入れてふたをかぶせ、一時間二時

間程煮ると皮が

つるつるにむけ

るようになる。

皮をむいて一た

んほし、乾いて

から川でよくひ

たし、クリッカ

又表皮)をはぎ

とり、白くなつ

たものをまた川

にひたしておく。



洗って乾かした葦座紙(川和)

撮影 近藤義雄

(3)

アヌキ  
白  
くなつた皮を大

以上

釜で煮る。このときソーダを入れてよくちぎれるようになるまで煮てから川へ再びひたしてよくアタをぬく。

(4) 紙漉舟 アクスキのすんだものをカミブチ板の上でたたいて繊維をよくくずし、木の枠で組まれた紙漉舟（横五尺、縦二尺五寸、深さ一尺五寸の厚板の四角の箱）に水と糊を入れてどろどろにしておき、カ

ミスの上に舟からくみあけて平にし、平になると板にカミスからはりかかる。板にはる時は一枚の紙の間にミゴ（縮の穂先）を入れてはきよいようにしておく。

(5) 仕上げ 板に何枚分も漉いておかれたものを一晩よく乾し、翌日十二枚分を一組としてカミイタにより干しあげる。

(6) 蓋座紙 サンザーシという養蚕用いる紙は、横三尺五寸、縦五尺五寸の大きさにするが、この紙は養蚕の度毎に川で三日程ひたして洗う。このとき糊が悪いと小さくはげてしまふので、タモの糊を用いるとはげないでよいという。

(7) 紙漉の一人前 一人一日八十枚すきあげると一人前という。手の早い人は百枚近くすきあげる。

(8) 製品の量 生木（原木）百二十貫で約二十四貫の干皮が出来る。これから六百枚のサンザーシが出来るので、多い家は十六駄も生木を刈り取るから約九千六百枚もの紙を製した家もあった。

販売 紙は十枚一括にして二つ折りにしたのを一折といふ、四つ折にして十枚五錢位であった。

紙には白、中白、カズ紙とあり、白は上等品、中白は砂糖のような色で中品、カズ紙は表皮なども一部含まれ、下等品とされ、価段も一枚五錢は白、中白は三錢、カズ紙は二錢であり、当時紙漉は一枚一錢といわれていたから、一人前一日八十枚は紙漉の日當であつた。

紙買商人 主に武州から買入にきた。多い時は埼玉の小鹿野、三田川、

両神等から五十人位も紙買商人が村を訪れ、農家をまわって買ひあるき、新羽の宿屋にとまって買集めていた。紙買商人に売らない人は、十日に回たった小鹿野の市にもっていって売りさばいていた。

なお、新羽の浅香家古文書に紙買商人の議定書があるので参考までに記すと次のとおりである。

### 定

#### 一、御公儀様御法度之儀者堅可守事

半紙 三拾武枚

口銭 口銭

厚紙 四拾八枚

口銭 三十武文

延紙 九拾六枚

口銭 三十武文

九七 四拾枚

口銭 三十武文

鹿紙 武拾枚

口銭 十六文

右之通草保年中紙數議定有之候處、近年致てみたりに相成紙數之不足荷物ハ仲間一同以来取引申間敷、議定仕尤紙數之儀ハ市場混雜之切ハ一々相改候事茂不相成事を見込右駄不持之致方有之候ハ、右荷物売主方江相返し、代銀受取売先之駄貨共ニ急度為相済可申候事一、当町市場において、辻売買之儀先年より致し申間敷議定ニ候處、近年相破れ辻ニテ表買いたし候族有之甚不取極り之事に付、以来右様之仁有之候ハバ市場ヲ除キ他所ニテ取引可致段相断り可申議定之事事 文政三年辰二月

この文書は、市商人が因縁の取引先の名主の家などに送りてきたもの

が残ったものと思われ、秩父方面の市の取引きで小正な紙、ぬけがけ商人をおさえるためにとりきめられたもので、紙の種類も明治末年のように三種でなく、半紙、厚紙、延紙、七九、粗紙と五種類あり、新羽でも昔は九七という紙をすいた。これは、九寸に七寸の大きさの紙のことである。

#### 六、交通交易（新羽）

結縁関係は村内が多く、ついで秩父が多い。今から四〇～五〇年前は「万場へ一度いって見て死にたい」といったほどである。村から外へ出なかつた人が多い。今では万場へ通ずるバス道が開け、南多野地方との交通、交易が中心となつてゐる。

○紙商人 武州からくる者が大部分であり、主に小鹿野、三田川、両神附近の商人

○商人 富山の薬売、下仁田から反物屋、越前から金物屋、信州から鋸屋、鐵屋は高崎方面よりくる。

○養蚕労務者 信州からくる人が最も多く、その人々は、信州から群馬県の東部の佐波郡方面の仕事をすませた帰りに立寄りて働いて行く人が多い。養蚕のさかんだつ頃は新羽だけでも二〇〇人～三〇〇人もいる季節労務者（かしこびよう）があり、上野村全体では一〇〇〇人位に入つたこともあつた。

○奉公人 永い期間の奉公人は、加賀、越中、越後の人が多く、一ヶ月の給料は明治の末年で一〇円～一二〇円であった。

○近江商人 村から外へ出かせぎに出る人はほとんどなく、養蚕がさかんで（年一回）、その資金は近江商人から借りた。近江商人は村に呉服類と米を入れてくれた。

○季節の貿物 村内でまきあわない季節の貿物は、下仁田（六里）から父の小鹿野（七里）へ出かけ、盆、正月などの貿物をまことにあわせた。以前は万場へ出かけるよりも下仁田、秩父等へ出かける人が多かつた。

最近バスの便がよくなり、万場、鬼石へ行く者が多い。

#### 七、産育（新羽）

誕生日アゲバーサンがいてお湯をあびせる。百たらい浴びると子供が丈夫になり、リコウになるといふ。ヘソを切る時に、男の子のは鎌で、女の子は鉗である。

エナはじめてエナを踏むものをその子供が恐れるから最初に親がふみ、昔は縁の下などに埋めた今は共同墓地に埋める。

ヘソノオ ヘソのもげたものは干しておき、その子がヒツケた時にけずつてのませると九死に一生を得るといつて今でもとておく家がある。

カナクソ はじめての便のこと、生れたてはアザがよくわからないので、数日して赤アザがわかったときにこのカナクソでなぜるとアザがとれるといふ。これは自分でなくては効果がない。なおつた人もいるといふ。

セツチンマイリ 三日目に三軒の便所をまわる。このとき子供の額に犬の字をかき、アキの方からまわりはじめ、用をまたいではいけない。食い初め 百日にお膳をすえて食べるまねをさせる。この時は本膳とし、ヒラに石を入れる。これは子供がかたい人になるようといふトリアゲバーサン 永く親子のよう交際する。

呑電坊主 七才の時に、病弱の子は頭髪をかる。これは呑電様にお願をかけるので呑電坊主といふ。このときもトトゲは残す。

#### 八、婚姻（新羽）

婚儀については、相業委員の報告のよう坂向え、のぞみ酒など話しがあるが重複するので略し、茶の民俗だけを記す。娘がいよいよ嫁家に入るとき、台所の入口（トボグチ）を一步ふみ入れたところでとまり（トボをまいただ婆）、新郎の母親の半分飲みかけた茶をもらつて飲み、親子の結びとしている。

他の調査委員の場合と同様に入棺、埋葬が行われ、門牌も家によっては出す。三十三年忌にはトメトウバといつて枝のついてる塔婆をたて、これから先は仏から神になるというので特別な供養は行わない。

#### 十、年中行事（新羽）

年中行事は、調査時間の関係上火あけを中心として聞き、他は割愛した。

火あけ以外に二三特色あるものを見ると次のとおりである。

#### 三元日（朝は大部分の家がカユと干ぐし、茶をあげる）

オシラ様 初午の晩、正月飾りの松のいぶし、立白をからつきねで三回たたくと、オシラ様は煙に乗っておりてくる。

十一、火上げ（勝山）

調査團が新羽から勝山の部落へ移る橋にかかる時珍らしい光景が調査團のバスを釣づけにした。それは、照りつける河原に数百束もの麦藁が点々とおかれ、その麦藁の束は河原から更に後の山に登る道にも見える。これが今晩行われる火上げ準備で、我々調査團が入ったので特別に行事を繰上げて今晚実施するのだと松本教育長が話してくれた。

夕食後昼間の橋の上までやってくると、もう暗い橋の上には大勢の人達が花火大会でも見るよう集まっている。

橋の中央では、子供がしきりに太鼓をたいて気分をかきたてている。間もなく林の先に石油を含ませた布をつけたものに合図の火がついた。火のついた林をもつた子供達は二組に分れ、一組は河原の麦藁に火を点じ、一組は後の山道の麦藁に火を点しながら上って行く。山道は五六メートルおきに火がついて行き、駆って行く子供達は急な坂道のためになんだんおそくなる。やがて山の七合目あたりまで行くと火が止った。間もなくその所が一段と明るくなった。見ると真暗な山の中腹に火の鳥居が見えはじめる。一方橋の上の子供達は太鼓をはげしくうちながら大声

で山の仲間に声援を送る。火の鳥居が消えはじめ頃再び坂道の麦藁に火が点じられてくる。まことに壯觀な火祭りである。

翌日勝山の公開堂で古老の方々におきよすると、火上げは子供達が行

い、部落の小中学校の男の子は全員参加し、中学生はデッカイシ、小学生はチイサイシと呼んでいて、デッカイシの親方は小学三年生（昔は十六才）、チイサイシの親方は小学六年生がつとめ、仕事の分担は、デッカイシはチイサイシが家々から集めて来た麦藁を山に運び、夜は火をつけ

る役をし、チイサイシは橋の上で太鼓一個、小太鼓三個をたたきながら河原と山に向ってワアとさけぶ。昔は麦藁もたくさん集つたので若衆が山へ草刈りに行く時運んでくれた。この人々のことをテツダイと称した。

当時は電燈もなく村中火燈を消した暗の中で、天をこがすような火祭りで、一層壯観であったといふ。また、戦争中は、鳥居のかわりに大日本などと火文字を書いたこともあったが、古くは「火」字をかいだといふ。

火上げを行う理由については、今では人達は夏の害虫を退治するためといい、太平洋戦争中に一時休んだときは大根など害虫に荒されてしまつたといふ。もつとも、このような谷間の地形で火上げをすればとにかく夏の害虫退治には効果があったことであろう。また、流行病を防ぐためともい、お盆に仏様がこの火にのってくるからともい。しかし、この火上げが昔は七月の十三日、十四日の両日に行われ（今は八月十三日、廿二字を火でえがいたこと、山の上で行われたことなどから推して祖靈迎えの火祭りであったことは明らかであり、県内各地で行われる盆の七晩焼、百八十等と同じ意味をもつたものであろう。火上げの行事が現在甘藷や冬野の奥地に多く残っていること、甲州、秋父、信州などにその名残が見られるなどその分布については注目すべきである。

（都九十九一著 消え残る山の村民俗参考）

上野村は山村のため妖怪に関する話が多く伝っている。僅か半日程の間にも新羽、勝山地区の様々な話がおきき出来た。ここでは、講も発達



八日見山のお札（乙母）

近藤義雄撮影

(1)	童頭大神野狐退散神龕
(2)	八日見山 諸難除（山犬の絵）
(3)	八日見山 御眷屬之牘
(4)	火盃除（部落名） 四足除（氏名殿）

裏 表

高さ 八寸 厚さ 一寸



勝山公開堂前の庚申塔（勝山）

近藤義雄撮影



二階の屋根の下の八日見山のお札（乙母）

近藤義雄撮影

代参講には八日見山、蛭様、櫻名様等があり、地域内のものとしては念仏講、庚申講、寅祭り、天神侍などがある。八日見山は移父の小鹿野町（旧三田川村）にあり、蚕があたるともいう。オサキなどのつきのものをはらってくれるといわれ、毎年四月八日に代参をたてる。この時、御眷属の山犬の像を借りてくる人もある。多くは次のようなお札を受けてきてくばる。

(1)(2)は講員全員に配布し、二階の表の戸の上に神座を設けてあげておく家や、はりつけある家がある。(3)は代参にいた人がうけてきたのか各戸にはなかつた。蛭様、碓水峠の能野櫻現様で、代参者が千羽鳥の刷つてあるお札を受けてくる。

櫻名様 櫻名神社へ代参者が参詣、嵐除けのお札をうけてくる。念仏講、彼岸の入り口と走り口に夜行う。

し、特に代参講はさかんであったようである。講は村構成として分類することも考えたが、八日見講、山犬、オサキ等関係の深いものが含まれているのでここにまとめてみた。

右側面 西上州甘  
楽都山中  
は次のとおりである。

庚申 勝山の公開堂前にいくつかの庚申塔がある。

中で最も古いものは、宝永七年のもので、

台石には三猿がきざまれ、塔身の上部には日月がある。銘文

は右側面 西上州甘  
楽都山中

領主山勝山村施主三十三人

正面

(日月の下に)奉立庚申供養塔

左側面

干時宝永七丁(寅)ノ歲六月吉辰

講は、一戸一名が参加、村中であつまり、夜はおそくまでおきていて、話は庚申の晩にしろなどといふ。昔はハナアワセ、ホウビキなども行われた。今では庚申講はなくなった。

トラン祭り 五月の寅の日に村中が鎮守の勝山神社にあつまつてまつる祭りで、この日は、村中御飯を炊いて神社にもちより、大きな黒瓶に盛り上げて食べる。三本五合で、一人でこの五合分を食べるといふと認められ、たくさん食べるほど作物が多くとれるといふので、寅の日は朝飯ぬきにして食べる人が多い。

### 山犬の話(勝山)

山犬の話は多い。山犬様と土地の人はいっている。八日見山の神使を考えているからであろう。山犬とはどんな犬か、狼のことだろうといわれている。

### 山犬と墓

日羽の土性の人は死んでから墓を掘られるといふ。それは山犬様が掘るのだそうで、その性の人は掘られる性だからどこへ捨ててもよいといつてある。

山犬の報恩 田村吾一さんが信州へ行く途中、十石峠で馬をかけながら落してしまった。翌日そこを通ったら、山犬様が出てきて口を開いて見せた。何回も見せるのでよくのぞいて見ると、口の中に白いものがつかえているのが見える。これをとつてくれといふ意味と思つたが、こわいので「かみつかないなら取つてやる」というと、山犬様がうなづくので手を入れて取つてやつた。見ると馬の骨で、山犬様はうれしそうに山の中へとんでいった。翌日そこを通ると鹿がおいてあった。山犬様がくれたのだろうといふ。

### オサキ(勝山)

今から約四七年前に里沢太一郎という人が子供が夜泣きをするので、

易者(神主)に見せたらオサキが子供についているといふ。折鶴をしていただいたら朝トボロのバケツの中にオサキが死んでいた。

### 化かされた話(勝山)

山村には化かされた話がたくさん残っている。勝山でもいくつか何つたが、中には勝山の電気屋が狐に化かされて、スタンドを立てたまま一晩中ベタルをもんでいたとか、魚をとられた話など最近に経験した人もいるといふ。それらの人の話を総合すると、化かされる場所はほとんどきまつているといふ。

魚をとられた話(勝山) 三年程前に継代の田村一治さんが野菜にいて帰りの途中魚屋でサンマ十六本かって帰つて来た。それは昭和三十年十月の夜のことであったが、帰つて見るとサンマは一本しか残っていない。しっかりと包んだはずのが一本きりと不思議に思つてしたら、翌日魚屋さんから「ゆうべ魚をとられたんべ」というのでそのわけを尋ねたら、夕飯をとしていた女がしゃべつたことに「イナト河原に十二三本の魚の頭があつた」という。その女が狐につかれていたのであらうとのことだった。イナト河原というのは、乙ほから乙父の中間で避病院のあとがある。

### 狐つき(勝山)

昔タカゾウリ山に高の坊といふ狐がいた。この狐が毎晩隣村の尾附へ出てはいたづらしたり、人についたりするので、尾附のシヨウライ印といふ神主が祈禱したら正体をあらわしてあやまり、五本の指を切つて血判をおして出でていった。

### 再生の話(勝山)

勝山で心中した人があつたので、その人の頭に字を書いて埋めたら、その字が書いてある人が長野縣に生れ、長野縣から心中した人のお墓の土をもらひにきた。その土でこすると字がとれるといつてある。

### カツバの話(新羽)

昔新羽に浅香庄太夫という人があつた。或る夜勝山で夜網をつかって魚をとり、漁の次の出口まで水をもしてあつたら短刀を忘れてき

てしまった。さがしに戻って見ると、一ヶ月入道が短刀をいじっている。

返さないのでどうとう組み打ちとなり、暴力の庄太夫は一ヶ月をねじふせた。怪物は遂にかぶとをぬぎ、勝山まで庄太夫を送ってきた。その時、不思議にも一ヶ月入道の日から光が出て、チヨウチンのようで明るい道を雇ることが出来た。別れの時、一ヶ月入道は小さなキンチャクをくれて「この中に金を藏い、きらめくに残しておくと、いつでも中に十分お金が残るようになっている」といって帰った。庄太夫はその通りつかって、といつでもお金がたまっていた。或る時女房が不思議に思って巾着を探し出して全部つかいてしまった。それから中にお金はたまらなくなってしまった。一ヶ月入道はカッパだという。

庄太夫は力もあったが、網をうつのも上手で、障子を五寸開いておくと外の雀を網にかけることが出来る程の名人であったといふ。

### オニンババの足跡(新羽)

蛇木(ヘビキ)という所に三・四間もある大きな足あとがある。片足の跡は中里の川の中にあるが、この足あとに水がたまり、干天の時はこの水をかいだすと雨がふるといわれ、足跡はオニンババの足跡だという。

## 奥名郷

### 一、はじめに

昭和三十四年八月三日相葉、上野内調査委員と上野村大字野栗沢字奥名郷の部落を訪れることが出来た。

この部落は、有名な「こ」に泉あり」や「谷間の学校」の映画で知られた野栗沢分校から二キロメートル程山奥の部落で、野栗沢部落のことを元村と呼んでいる。村の中心部である乙母までは山の人でも一時間半で、調査委員三名とも午前中に野栗の調査を終え、土地の方々の好意

により、オート三輪に乗って野栗沢分校のところまで送っていただき、こゝから細い山道にかかり、村委会員の黒沢開策、黒沢義憲内氏の御案内により、谷川派に登っていった。

山登りになれない調査委員は真夏の日向に出るとたちまちうだつてしまふ。途中谷川を横切り坂道へかるところで一息いれると、川の中には緑のカワノリが石に付いている。その近くにはワサビが自生している。きれいなワサビやカワノリの群落がこの川上にはたくさんあるという。きれいな谷川の流れである。

僅か二キロメートルの山道を、二時間もかかるたどりついたのが黒沢義憲氏の家で、庭先にはアケビが桃の木にからまっていた。同家で夕方までいろいろお伺し、夕方部落を一巡、分宿した。

### 二、部落の歴史

この部落は、後述のふりそで様の伝説もあるが、その伝説や土地の名が示すような中世の遺物は何等発見出来なかつた。墓地は十数ヶ所にも分れているが、何れも江戸中期以降のもので、わずかに元禄二年の宮形石塔が一基、石碑、石仏の類も少く、庚申塔三基中寛政、天保の年号があり、廿三夜塔、金塔、石地蔵等も見受けられたが何れも年号は記されていない。しかし、江戸末期のものである。

伝えるところによると、昔は十七軒もあった時代があり、現在十二軒であるから今よりは多かつた。しかし、現在の個々の家を調査すると、明治以前からの家は六軒、その他は大正から昭和になって分家した家である。もっとも、一八〇〇年前に大火事があり、密集した谷間の部落のため全焼したことがあるという。

### 三、部落の分布

この部落の姓は十二軒とも思沢性で、一マケ四軒が最高であり、かつては同一祖先であったことであろうが、今では親戚関係のない集団の部

奥名郡部落略図



#### 四、生葉

落と、縁組みなどもほとんど野栗沢、乙父など離れた部落と行われてゐる。現在十二軒の分布を見ると、三軒は離れていてが他は極めて密集して、急傾斜の土地に伊香保温泉のような集りかたで、その中央を小さな谷川が流れている。そのため写真だけ見るとそれ程奥地の村とは思えない程であるが、個々の家の名称を見ると開発と地形からなづけられた呼び名があり、分布図と比較しながら次の呼び名を見ていただきたい。

最も下の一軒家を沢口（サワグチ）とよび、その上の二軒は新星（ニイカ）、中心部へ入ると下からシタデ、インキヨ、ウワデ、タカミと呼んでいる。これは、狭い限られた耕地と二十度もあると思われる、南面斜につくられてるのでこのような配置になつたものと思われる。



タカミ ウワデ インキヨ シタデ  
撮影 近藤義雄

ニワトリ 二六羽 犬  
現在全部で

現在この部落の生活を支えているのは、十町歩の山林と平均一反五畝程の耕地からとれるコンニャク、養蚕、それに附近の山仕事の収入であり、コンニャクの値の下つた時はなかなか苦しい。蚕も春と秋の年二回ぎりで、全戸の春蚕が一五〇グラムの種だから秋蚕を合せても三〇〇グラムを十二軒で飼う。その年収は平均して年二〜三万円程度である。したがつて、大部分の家が炭焼き、薪切りの山稼ぎに出る。

山稼ぎは、一日三五〇円〜四〇〇程度で、新羽の福田屋という金持ちの山を払下げたり、他の山持ちから福田屋が買取ったのをやくので、月平均二十日位は出かける。その他はほとんど収入のない村で、家畜も

牛 繩 羊 四 猫 一  
一 八 兔 三〇  
馬 ○

というから自家用程度で家計に影響するような収入はない。  
狩猟は、冬になると鉄砲をうつ者二名、これは肉は自家用だが、毛皮  
が民間うまくいって一万円程度収入がある。ほかに最近シイタケ、ワサ  
ビなどに手をつけはじめているがまだ売出す程の収量もなく、牧草は十  
分あつても乳牛を飼って毎日乳を出すのに山奥すぎてどうにもならな  
いという。以上がこの十二軒の収入のすべてである。

## 五、食 生 活

次に食生活の面をのぞいて見ると、常食は米と麦の半々、以前は正月  
などの特別な日以外は米をたべなかつたといふ。自分の泊めていたとい  
た黒沢房次さん（六十二才）の家は、主人夫婦に若夫婦の四人暮らし、毎  
月米は二斗一升程消費する。これは、二斗は家族分で、一升が客用とい  
うから一人月五升となる。これで一里も遠くの山ではげしい労働をして  
くるのだから容易でない。この山仕事へは中学卒業した人から七十才位  
いまでの人が出かける。このような米麥の食糧を補うのがトウモロコシ  
である。肉類は冬の山の幸に川魚少々、それに自家用の兔、ニワトリの  
卵と月に一、二回おとずれる魚屋から買う程度である。

## 六、交 易

この仙境へ訪れる人は、前記魚屋の外に、富山から年一回の売薬屋、  
下仁田から月一、二回の反物屋、越前から年一回の金物屋、信州から三  
ヶ月に一回ほどくる鋸屋、それに何年かに一回越前のウルシリの職人  
がましまって訪れる。売薬屋はほとんど泊つて行く。我々が四日の朝落葉  
から下つてくると富山の薬屋が大きな皮の箱を背負い前にもかゝえて汗  
を流しながら上つてくるのに出合つた。

この日常生活に必要な米、塩などは全部新羽の福田屋から買つてゐる。そ  
の購入方法は、学校へ行く子に注文の品を書いて袋をとどけさせ、夕方  
までに福田屋が野栗沢に運んでおくので部落から取りに行く。しかし、  
その仕払いは全部通帳で、年二回の収益のとれた時、コンニャクの売れた  
時の三回払いと、米、雜貨、肥料等全部この福田屋から購入し、酒は焼  
酎を一斗入りの甕で買っておく家が多い。

## 七、産 育

出産の時は、たいてい部落内の女の人の手によつてトリアゲられるの  
で、この人のことをトリアゲバーサンとよんでゐる。トリアゲバーサン  
と子供との関係は、昔は一生親類づきあいをして盆祭には必ずおとどけ  
をしたが、今は三年位である。

出産と同時に部落内の主婦が集つて來て子供のウブユを世話してくれ  
る。このときは産婦の家の手を出さないで、集つて來た主婦が世話し、  
一週間つづけられる。この仕事は、産婦の家にとつては出費もあるが、  
部落中の女性にとっては楽しみの一つになつてゐる。  
後産についても面白い習慣がある。これは、上野村全域にわたつて行  
われていることであるがエナとよび、床下へ埋めることになつてゐる。

この部落から外へ出る人は、小学校の一、二年生が毎日急な山道を二  
秆程下つた野栗沢分校へ三年以上は七、八秆も離れている勝山の本校へ  
行い、中学生も同様で、他には山稼に行く人、秩父の金山（歩いて土  
地の人でも二時間半～三時間）へ赤岩越を越えて行く人もある。現在出  
稼にいっている人は茨城県へ女が一人、鬼石と深谷へ男が各一名、例外  
として主人がアメリカへ一人で出稼を行つてゐる人がある。郵便関係は、  
手紙も速達、書留、電報は配達されるが、その他は学校の子供が帰りに  
持帰る程度で新聞も同様である。新聞で気のついたのは、平素は五軒が  
とつてゐるが、夏休みになると子供が山を下らないので一ヶ月休む。し  
たがつて、ラジオは全戸入つてゐる。

一時野東沢の一帯の場所に埋めたこともあるが、エナはその手にとつて一番大切なものであり、山犬にはられたりしてはいけない、いでの大いには大黒柱の下に埋める。この時エナと共に墓は築、船裏などの書く道具を、女は針や糸を別に半紙に包んで水引きをかけて歩く。この時エナを埋めた上を親が軽く踏む。これは、一番さきにふんだものをそのまま子供が恐れる、いでの他人や山犬などにふせないとめだとう。

三日目はセッヂンメーリと、つてトリアゲバアサンが白い着物をつくる頭からかぶせて三軒の便所の神守をおがんで歩く。このときは、大豆と米をオニオリにして便所の神に守つてくださいとお願いし、村人には小豆飯をたいて祝う。この時必ず三軒の便所と、三つの橋を渡るこになつている。これは、下の部落では橋を渡ってはいけない、いでのが、こゝでは橋を渡らぬとほんどの他の家に行けない程の地形であるからそのため出来た習慣であろう。

七日目は、オヒチヤと称し、赤飯をふかして御馳走する。この日は近所の主婦達も手を出さないで家の人がふるまう。

ウブスナマイリは、男は三十二日、女は三十三日におまいりし、部落の外にはこの日がすむまで出さない。止むを得ず出すときはおむつをかぶせて出ていたといでの。今ではたえていいる。

一週間程たつと、ヘッのオがとれる。これは大切にしまつておき、その子の九死に一生のような場合にこれをつけつて飲ませるとなるという。

子供が生れてはじめてする便のことをカナタソと呼んでいるが、これは、子供の赤穂をなおすによい、いでのでとつておく。これは、子供は生れたてはたいてい赤い顔をしているので、病がわからないが、一週間程経過するとわかるので、もしもその時赤穂があつたのこのカナタソでなれると治るといでのでとつておいた家が多い。

危篤の病人が出た時は魂呼びをした。これは、今ではほとんど行われないが、二三十年前にはやつてた。これは、假死状態になつたとき病人の枕元で古店ではりあげてその名を呼び、庭でも天にむかってあらん限りの声で病人の名をよんだり鉄砲を空にむけて放つたりする。これは、その人の魂が三途の川を渡らぬ先によびもどすので、幸い息をふきかいした人もあるといでの。このことをタマヨビというような名は残つてない。

魂呼びと共にセンゴリといいうのがある。これは危篤の病人が出ると川へ行って水を頭からかぶり垢離をとることで、村中の人が協力する。村中の人が千回かぶる。このときは川の濁の石に大豆を一回かぶる毎に一つあげたといでの。

入棺は、床の間に台をしてその上に米俵をほぐしてすき棺をおく、入棺が終ると死人の寝ていた巻をはいで養糞用のカゴをすき、その隅を開口でおして最後に中央をおいてカゴを外へ出す。この時死人が男の時は上臼で、女のときは下臼を用いる。

野辺の送りは、以前は全部トモゾウリと称するハヌムスピのワラゾウリを用いた。このワラゾウリは後をしめてないので、いのちにはぐれてくれる。どんな立派の仕度の人でもこのワラゾウリをはき、紹介はこれを埋めてくるので、ハダンで帰つてくる。帰ると家の入口にタライと臼がおいてあるので臼に腰を掛けて足を洗い、塩で清めて入ることになつてゐる。

埋葬の方法は、死人にシラジをかぶせてやり、土を盛った上に入棺の時用いた養糞カゴを二つ折りにして置いてくる。この時死者が男であると半に折り（皮が外に出る）女の時は外に折る。この上に適当に石を置いて終る。

以上が一般の人の埋葬方法であるが、子供の時は七才以下の時は引導を渡さない。これは柳田先生のいわれて、子供を簡単につくり早く生れかわつてもらいたいといでの古い姿を伝えているものであろう。

## 九、狩 猿

上二軒のうち鉄砲のある家は二軒、何れも氣體としての専門の修業をした人でなく、農家の折に行う。山で獲れるものはリスが最も多く、黒沢房次さんの昨年一年間の収穫は

リス 三五頭  
狐 一頭  
鹿 一頭

ウサギ 一〇羽  
山鳥 一〇羽

であった。

この外熊をとつたり、古くはカモシカなどもとつた。カモシカのことをアオシと呼び、アオシは秋父の山に相当いた。これをとるにはタツをはつてとるという。タツといふのは本のないあいているところで氣師が鉄砲をもつていてまつてある。大が追い出してくるのをとる。アオシは岩山を好み、岩山の上では熊大を何頭も殺されたことがあり、今では禁止されているのでとつてしない。

熊はすつと以前に一頭とつた。それは、正月の雪の中を大山のヒトオスという場所の穴（深さ一丈五・六尺）でとつた。十二貫位のもので、この時は熊の血をあたかくうちに近所の人が集つてすつた。この生

熊は大木の穴の中に住んでいるものもある。これは、熊が大きな木へ上つていって上の穴から入りこむので、とるときは二三人で組んでとる。このとりかたは、一人は大木にのぼり、穴の上から木をもつて熊を怒らせて穴から出すようにし、熊が半身を出した時に下から鉄砲でうつ。上の人は熊の出かかった頃網で他の木に移るか熊の出入りする穴の下におりる。大木へ上る時はたいてい電気屋の昇柱機のようなものを用いている。

狐は時たまとれる程度だが、皮は一匹で一、五〇〇円位になるが肉はなれないと呉くて食べられない。

## 十、伝 説

ふりそで様 この部落は全員黒沢姓で、昔川中島の合戦の時に武田の一族の落武者がすみついたというので、甲州へ通ずる道が部落の西から山へ続いている。

この甲州道には一小屋という茶屋があった。二の小屋は乙父分にあり、三の小屋は浜平附近にあった。去年の十二月にこの山道を六部がやつて来た。部落に入つて泊ると、六部が大金をもつているのを知った村人は、豆腐をこしらえる釜の中に入れて煮てしまつた。ところが、それから後はこの村で豆腐をつくろう

ととしても釜の中で固らないので部落の上ににおまつりしてから様の義理で近くなつた。その祀り影がある。石宮のことを見ると、熊の巣寝床は柏の皮と岩苔などで夏のうちにつくられ、冬至に入り春の彼岸に出るが、この冬眠のための寝床は非常にあたかく出来ていて手を入れると火のようになり、場所はたいてい北向きの日陰で前に嘴のあるようところを選び、糞は一つだけ残して入る。十二月に入るときの体はすっかり脂肪がまわって冬眠の準備が出来るのでこの時になると、熊の胃（たんのう）はキンイとスイとあり、スイは黒いので安い。キンイは黄色で値も高い。十二月頃はまだ余り大きくならないが二月過ぎると大きくなっているからこの頃となるのがよい。



幕 帷  
熊の巣  
寝床は柏の皮と岩苔などで夏のうちにつくられ、冬至に入り春の彼岸に出るが、この冬眠のための寝床は非常にあたかく出来ていて手を入れると火のようになり、場所はたいてい北向きの日陰で前に嘴のあるようところを選び、糞は一つだけ残して入る。十二月に入るときの体はすっかり脂肪がまわって冬眠の準備が出来るのでこの時になると、熊の胃（たんのう）はキンイとスイとあり、スイは黒いので安い。キンイは黄色で値も高い。十二月頃はまだ余り大きくならないが二月過ぎると大きくなっているからこの頃となるのがよい。

右宮や傍の石燈籠に

はそれらしい銘文もなく元禄二年の次のようない銘文があり、先祖をまつたものと思われる。

為 六親眷属七世父母菩提也

元禄二年卯月朔日

長者伝説

敬白

○塙沢の今井某が伊勢参りに出かけ、甘美へぬける山道で大便をしよとして穴を掘ったら大金が埋めてあるのを見つけた、伊勢参りの途中なのでそのまま埋めて、帰つてから掘つたらそのままあり、金持ちになつたといふ。

○また、馬方をして、大入道峠のタベで馬に水をやろうと水際にそつて行くと、馬が財布を喰えてフツフツといて水をまない。その時そつとその財布をもつて帰つて金持ちになつたともいふ。

○横沢という所で、藤賣いの人か甘美からきて昼寝をしながら途中で、財布がないので気がつき帰ってきた。おばあさんに話したがどうしても返してくれないので、商人がただではおかないとしたら間もなくその家の人があざりになつた。

○昔勝山の黒沢某が、小判を庭で土用干しをしていた。すると通りがりの旅人が見て、「國の土産ばなし」といってよく見ていった。すると主人は、番頭に旅人を殺してこいといった。間もなく番頭は志賀坂峠で殺してきた。ところが、証拠がないまま帰つたので主人が「証拠をもつてこい」といひので耳を斬つてまつたたりがなくなつた。

○中里に岩崎某という財産家があった。この家はもと六部が金をもつてるので井戸へ入れて金をとり、財をなしたといふ。

以上のように長者伝説はいくつか伝えられているが、これは、部落人々の済む気持、ねたみの心などが作用して様々に考えられ、特定な家に結びつけられたものが大部分であり、奥地の村らしい伝説である。

## 十一、民間療法

ヤンメ めの字を五つから貼るとなおる。

メカゴ メカイをかぶるとメカゴが出来る。イモフリメカイを摘の上

から半分見せて水の神様へお願をかけ、なおると全治見せる（この部落には掘井戸はない）。

エボ 野菜沢の八幡様から石をかりてくるか、米を雨だれの落ちる所に埋めて「米がくさる時にはなおしください」とえぼのかすだけ埋め

る。エボになるのは、イボベットウ（ヒキガエル）をつつと白い液が出る、この白い液がたかるとエボになるという。

コーデ 両親のある子に障子ごしにぬい糸で手をしばつてもらう。

コブ コブをながら「シチンビヨイタイトコロハトナリノ山

ヘフタベ」といって三回となえてブツブツとみくとなおる。

ムシバ 歯がかけた時は「オレノハガサキハエロ、オニノハガアトハエロ」と唱えながら上歯はがしの下へ、下の歯は屋根の上に投げる。

勝山では「鬼ノ歯ヨリ丈夫ノ歯がハエロ」と唱えるという。

ヨナキ 鶴のオンドリの絵を書いてその子の部屋へさかさにはるとなおる。

シビレ 額にゴミを三つづべでつけるとなおる。

## 上野村北西部の民俗

小春、中越、稻原、砥根平、堂所、柏沢

明ヶ沢、黒川、須郷、大平、塩の沢、坂下



石置屋根（塩の沢）  
撮影 今井善一郎



竹のタルキ（柏原）  
撮影 今井善一郎

上野村は四面山又山、私述（关口、今井）の入ったのはその西北部、山中豪族が起して封建制盛んな処と想像した処、案に相違して生活は新しく自動車もラジオも螢光灯も普及していく驚くばかり、勿論風習にも考えにも古いものは遺つてゐるが、村の構成など案外に新風である。思ひに之は封建的土地位關係が、農地稀少の為め未発達に終つた結果かと思ふ。血縁的の本分家關係にも、地縁の上に於ける地主小作等の關係にも封建的風習は殆ど見られなかつた。村構成については、従つて可成深く調査したが特記するものを認めない。たゞどの様な村の風氣かを一言だけ記しておけば、村では夏、雨戸をしめて寝る家は一軒もない。自転

車なども屋外に置き放し、トラックに荷をつけたまゝ街市に置いても平常である。勿論小さな蓋みはないではないが、大凡かくの如くである。住居には石置き屋根が目立つて多い。これは普通風の強い処と云われているが、此所ではむしろ材料の關係かと思う。木材が多くササ板を得る事が容易の為めであろう。勿論蓋は多いのだろうが、山が疊しくて日照の少ない事が舊屋根を比較的少なくしているのかと思う。ジロ（イロリ）の横坐をテイザンキといふ。米買い座敷ともいふ、主人の外は坊主が坐る。ヨリフキは客、キジリは子供や番頭が坐る。ジロのカギはカギソツアマといふ。カギ竹をお竹といふ。ナゾナゾ。「お竹の腹を出たり入ったりするものなあに」「カギモツアマ」

食事は箱膳を用いる。一生使つて死ぬと葬場に供え上げ物する。今はチヤブ台がふえたのでお墓にはキッサキ膳を買って上げる。一日の食べ物は、茶がし（ツバ焼餅等）、朝飯（米三麦七位）、十時休み（まんじゅう）、昼飯（朝の残り、山へ行く時は三合入りメンハにつめ水は一升ビンでもつてゆく）、三時休み（コジハシ、セーズカリに味噌、葱などを入れてゆく）、夕飯（ウドン、オツキリコミ等が主）、夜食（カズふかしの時などにたべる、焼き餅等）。だがこれは農耕期の事、普通は三食である。ヤキ餅は小麦粉、ソバ粉をこねたものを桑の葉で包んでジロでやく。「マツコた、いて上れ」などという。凶年食には昔麦のとれる迄トウネツブジという藤の根や、ソ、メというかすらの根を掘つてしがらほい味のしたのをたべた。又アオヤといって麦の穂の青いのをつぶして食べた。稗は昔はずいぶん作った。稗のサナゴ（皮をむいて白味にしたもの、一

今  
井  
善  
一  
郎

升が三合位になる。」のお粥はうまかった。

服装は今は全然他地方と似てしまつた。昔の年寄りはカラムシの皮で衣物を作つた。シナの木の皮で馬の蚊除けを作つた。岩苔の葉でセーチ（背負籠）の攏を作り、セーメカリ（ビク、背負袋）を編む。

農業は主業である訳だが耕地が少なく実取は少ない。田は神流川の畔に少々あるだけ、畑も高低差甚しく、一枚々々が藪にも笠にも隠れるといふ程小さい。日向と日陰では作物の出来が一ヶ月も違う。一日の労力で普通オニガで五反耕すのが、ここでは三人で一反耕すのがやつとである。ナツガリ（焼き烟）が行わる、伏り倒した青葉枝を乾して燃し、ソバを蒔き、その後粟、稗、大小豆などを作る。肥料の絶える迄使つて又山にする。その中普通畑になつたものをキリカエ工煙といふ。山に入つて開拓して一軒持つ事を山上りと云う。大半の三四軒は山上りで出来たものである。昔は人小妻が主産物で玉蜀黍、甘藷、馬鈴薯も間作とした。妻は焼き穂が盛であった。その後女衆が日で一週間もかゝつてついてノゲ迄すばかりおちてしまう。精穀にはよくジガラ白が用いられたが今は

すっかりなくなつてしまつた。

田が少ないので雨乞いが盛に行われる事はそれだけ米の価値があった

のである。普通川の瀬に石を積んで築いたシロを作り、ここに氏神や時によつては浜平のハヤツムジ様の御剣を借りたり、笠丸山の岩にたまる御水を借りて來たりして旱魃の程度に応じて雨乞いをする南乞田（浜半のスワ様以下神流川の流れに沿つた神ヶをよんて折る）が唱われ、笛太鼓で歌やかに雨乞いされる。廟の沢では大法印の塙場の石窓で雨乞いする事も、烏帽子岳の天狗岩に御籠りして雨乞いする事もある。楠原では笠丸山の御水は降雨があれば御返しに又登山している。

米麦農業よりずっと収入の多いものに綿羊とコンニャクがある。前者は上野で三五〇戸位、多い家は四、五頭飼つて居り、飼料の草が多いので有利である。後者は全村殆ど作つて居り水はけのよい地勢が又適しているのである。現在の一般の収入順に云えば、林業、コンニャク、養蚕、綿羊の順となつて居る。此の外に紙書きがある。女衆は冬の副業に今も少々行つてゐる。その為め小春辺の家は広い六尺の縫側の家が多い。す



農具のいろいろ  
撮影 今井善一郎

いた紙は暮に下仁田の市にもってゆき売って正月用品を買つて来た。現在は自家用程度の家が多い。

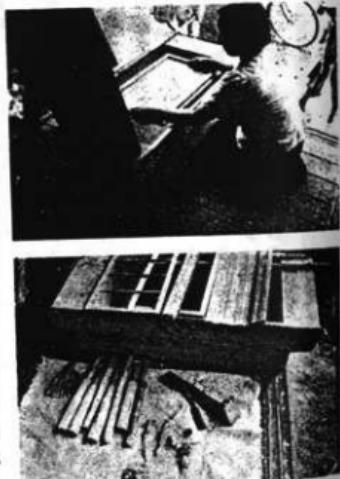
林業はこの村の主要産業であるが、山林の所有形態はやや変則である。

この山中領といふ地域は元来徳川幕府の直属の山林で柄原の黒沢治部右衛門が管轄していた。明治に至り一旦上地された後隸故払下げが行われ、多くは山付き村落の共有林となつた。今、その中、黒川及び塙の沢の例を上げれば、前者の場合帳面積四十二町二反五畝の共有林は実際三千町歩を越える大面積であり、元、七軒の株であったのが明治四十二年十五軒の家数に分割する際もめめが生じ中にその株を売却する者が生じた。その結果數人の者が共有を失る事となり、結局十五株を三千円也で村外の人にこの権利を手放してしまつた。買主は之を一円一千円にして長

野県の吉本合資会社へ売却し、ここに於て共有林は県外へ流れ去り、村民は吉本の労務者として貯銀收入を得るのみに甘んじねばならぬ状態に立至つたのである。吉本と共に共有林を買って貰つた部落は、浜平、中の沢、黒川、北沢、野栗沢等といふ。常設官林は村有に歸つて来た。塙の沢の



道具 摄影 今井善一郎



具井善一郎撮影

場合は二筆で合計三十町歩の共有林（実測四百町歩）が二十二株に分れていた。大正四、五年頃この株の売買が始まり、現在では村外三人（二十二分の三）、村内四人（二十二分の十九）で所有している。当時は山林の収入が低く、公租負担がつらかったので好人物の人などに山林を無理に押つけた傾があったといふ。かくて一方には広大な面積をもつ山林地主が、他方には質刈、炭焼き、薪作り等の山林労働者が発生した。他面又別に立木を購い、薪又は炭に加工して販売する林業資本家の発生もある。元來この辺りの雜木林の販価は非常に低かつたのであるが、最近交通の発達と燃料資源の需要とは、山林に労力投入の有効なるを明らかにし、炭焼き及び薪切りの元締が発生した。主として御道筋の雜貨商であるが、これら山林労働者に米麦から衣料迄支給して山中に住み込ませ、その生産物を引取り、年二回の精算をする事によって双方の利益を得を確保してゆく仕組であるが、大きな元締は炭四五万俵をこゝから輸送し出している。山住みの焼き子が薪切りは現金の全然不要な生活に甘んじて米味噌、シャツ、地下足袋迄仕送りを受け元締のハッピを貰つて生



の方でとびこんでくるが、ハズレ産妙の時は一つもとれない。来ても当らぬ。当っても平気で逃げてしまう。一氣期中一匹もとれぬ事もあるといふ（この項小春中武式平氏による）。塙の沢は熊野神社があり熊はない。

川にも魚が多く、深い淵はトアミ用いるが浅い凧は水面近くはヤスで岩魚、山女などをつく。イカリとしや鏡形の釣針で鮎など引つかけて岩魚、山女などをつく。イカリとしや鏡形の釣針で鮎など引つかける。ヒッカケというこれと異なる釣具もある。ソリには虫ツリ、毛針等があり、山女、岩魚、ハヤ等をとる。ブッタイは竹を編んだものでカジカ等を、下ではハヤをとる。オキバリは鰻、ギギュウ、山女、岩魚をとり、ヤナ、セバリでは川を漁つて鮎等をとる。夜ブリも行わねコセ、体の表面のノメコイ魚をとる。ソウゲンボは頭がハヨで胸が四角、オコジョに似ているが嫌われ魚である。鮎はとれる日は一日に（神流川）百匹もとれる事がある。大きいのが四十枚、小さいのが十二、三枚。百枚百五十円位する。岩魚、山女は五月が味がよい。ヒがきたといって山女が黒く、鮎が赤くなるとうまくなる。

村の交通 人の出入については、信州からスベ（篠）の笊売り、シニ



漁具 ブッタイ  
撮影 今井善一郎



墓籠を敷いた墓（中越）  
撮影 今井善一郎



ドウフ屋等が来た。信州酒は白井の馬方がつけて来た。馬方は一日五里三十町歩く。旅人は越後のゴゼ、鬼石の方から浪花節語り、餘屋等、甘樂の方から春駒、三河万才等が來た。十石峠の名は信州から毎日米が十石こちらへ来たからの名といふ。普通馬一頭二俵ずつけるが、カチ荷といつてその外に馬方が五升ずつ二袋（一斗）背負つて來たといふ。信州峠の中頃黒川の上に茶屋が三軒あってよく休んだ。

米や酒は信州からばかり來た。乙父の酒屋で酒造るのに信州迄米とりに行き大日向迄権原から一日で行き、夜出て夜帰つた。運搬は昔は馬ばかり、牛は使わなかつた。白井には馬が多かつた。祝儀、不祝儀について、結婚の式など割合簡略で青年の参加などはなく、たゞ仲人がくれ方實方双方二組ある事や、座配といふ御招伴兼司会者が式や宴会を進行させる事、三献（こん）とか五献とかして家によつて定まつた盃をまわす習慣があり、この場合盃にはお椀を用い、ノシホーケーとてその後夜迄飲食する風がある。新嫁は四月と節句（四月三日）に大パンの餅（一升桶の底の大きさの切り餅）米菓一枚ずつ四

枚と酒をもつて仲人に礼にゆく。農休み（八月一日～三日）には酒と粉（二升もつて実家に帰り仲人をよんで御馳走し、お盆（九月十四～六日）には酒と多少の他の物をもつて仲人に挨拶にゆく。之は初め一年だけする事である。

死者のある時昔は屋の棟をあけて大声で名を呼んだら息を吹き返した事があったという。（塩の沢）今は死者的湯浦がすんで納棺すると、そのねついた丸へ豆の平籠を男には下向き、女の時は上向きにおき、その四隅を南無阿弥陀仏を唱え乍ら挽き臼で男の時は上臼、女の時は下臼を平らにもつてドシドシと左まわりにして廻る。最後に籠の中央をつく。野邊送りをして埋葬した土墳頭の上へ金龍を、男の時はかぶせ、女の時は上向きに置き四方を石で押え、真中に石碑代りとお膳代りの石をのせ興を上に置く。石を六個川原で拾つて来る者は死者の身内がするが、一度拾つた石は扱ひ直しない。輿の後方に墓標、中央に六角塔婆を立てる。石塔はずつと後に改めて建てる。カゴをのせる訳は、日が沢山あるので抜け出た魂が出た目に忘れて届つて来る事が出来ないからと

れ、三岐の小学六年生昭和三四年六月自転車事故で死んだが、その叔父の屋根に大きな音響をさせたという。柄原の人、いつも頭を刈つてやつた想意の家に二月の雷雨のふる夜闇の中にボッカリ顔だけ現わして死を予報したい、又別に一年程病氣の世話になつた人にやはり闇の中に頬を見せた死人があるという（柄原）。光り物については柄原の女子死後墓から光り物が出て小春の想意の男の家の棟へとんだといふ。又三十年程前柄原の女子病重く息をひく夜に、やはり想意の中越の人の燒徳の夜業を光り物がして一晩助けてやつたという。人魂を見た人は多く、之は余り高く飛ばず、煙草盆位の大きさで死ぬ前とぶのが多いといふ。

信仰の話になつたので講や祭について記しておく。

柄原の古峯ケ原待は毎月十二日か二十二日（五月農繁期は休む）に行う。火伏せの神様で、平常火を取扱う女衆許り出て腕によりをかけて御馳走つてたべる。こんにやく、野菜、竹輪、歎位で肉や野菜は余りつかわぬ、汁がつく。柄原の元部落四十戸位に念仏講がある。年六回位十六日の晩に集り念仏をする。人の死んだ時はその家である。講では毎月十円位出し合つて座布団、膳碗、鍋釜等を求めて共有としている。念仏師匠は秩父の方から來る。念仏のすんだ後ヤドマイで小豆粥を出す。之は強烈、香りをとする。黒川に「六夜様」という石碑があるが之も十六日の念仏であったと思うが今は行わない。塩の沢と柄原に百万遍の念仏が行われるが、之は春長雨の時部落全員が集つて大きな珠数の周りに坐り南無阿弥陀仏を唱え乍ら数珠を一つずつ廻わす。音頭取りが中にいて鉦を打つ。天氣を祈る天道念仏である。百万遍の中時々体む折にコーセン、豆、り、ソバなど食べた。コーセンや豆、りに砂糖は入れなかつた。塩の沢は多く男で奉師堂をしたが、柄原では女が多かった。柄原では正月と益（九月）の十七日に酒祭、柄原其の他には養蚕期に蚕祭というのがあるが之等は子供の天神持、道祖神持と共に岡口氏の「年中行事」にゆづつこに記さない。柄原にギヨウダ様の祭りがある。旧十月十九日が縁日で柄原には木彫の御神体がある。小春も中越でも元一緒に掛軸

のギヨウダ様を祭った。須都にも掛軸があり、野栗でも縁日をする。松沢のギヨウダ様は昔質に入れたら「柄がへたりた、柄がへたりたい」とうなつたので今の宿主の先祖がうけかえした。大正の中頃迄は松澤七軒の大祭で部落中の足持（全員）が宿に集り（四十五名位）大振舞した。朝、女衆と子供がより茶ガシ（ソバ、饅頭に縮の人たるもの、前夜宿主が作る。）をたべて朝飯の仕度をし、出来ると便を廻して男衆がより十時頃朝飯（米飯、平、坪、楮口、皿等を用ひ五葉、買った食品なし。酒もない。）をたべ、女子供も朝飯がすむと夕飯のソバ作りを女衆が、肴作りを男衆がする。夕飯が出来ると子供女衆は先にすませ、男衆も明るい中に始めて酒五コソン飲んだ。吸物椀の汁をすつた後へ一升徳利からカンのしてある酒をついて五杯のむのである。肴は豆腐、こんにゃく、人参、牛蒡、芋等の煮つけで汁はもう出ない。酒は強いのみさせ、その後ソバを強いていさせる。夕食前にソバ粉で立っている犬の形を作り、イロリで焼いて学校生徒全部に配った。犬はオギヨウダ様の便といふ。以前は親類迄呼ぶ程盛大だったが費用過多のため今は一戸一人酒三献となり酒食も宿も一食だけとなつた。この祭に来る人は猪を食つて来てはならない。昔この禁を冒して大風が吹き戸障子残らず、立白迄も飛んでしまつた。今も宿では猪は煮てはならない。大振舞の費用はその年の中に宿の家をさすかり物が思われるといふ。御神体を拝見したが之は役行者の像であつ



ギヨウダ（行者）様（権原）  
撮影 今井善一郎



黒川の蛇神様  
撮影 今井善一郎

た。毎年お祭りにかぶせる錦をかぶついた。小春と猶原にはお三夜待がある。旧暦の二十三日の夜（農閏期だけ）各戸から女衆が宿に集り、月の出を待つて雜談し月が上ると並んで帰る。昔は饅頭を作つたが今はすし等を作る。小春では十円時金をして席布団、精錬鍋等を求めている。小春にはオシヨウジンといふ行事がある。之は年二回（一月二十四日と七月二十四日（今は八月一日））にする。一月には油揚そしを作り、豆間米五合と金五十円づつ持ちより油揚を買ひ、男だけでそしを作り。酒はない。愛宕様の掛軸をかける。火伏せの神様である。八月一日のは之は夏の土用にして丑の精進ともいつた。小春中一戸一人、自分の使つている膳をもつて宿に集り、朝食は宿マイ（当番宿）で出す。昔は一人米四合ずつ持より宿でたき、油汁（ケンチソウ汁、昆布、馬鈴薯、人参、牛蒡等）を作り、宿でオカズを出して十時頃たべた。オヒルはぬきにし四合皆食べた。今は餅になつたが、材料の餅米五合を一口として株を作り、二口、三口と申込により米を集め。小豆も持なり、砂糖は買う。精進は火の祭りで女を入れず男許りで餅をつき餅を作る。五合の米を五乃至七個にまるめて周囲に餅をつけお餅にのせる。二時頃作り上げたべられるだけ食べ、残るのは家に持帰り家人にたべさせる。

奇瑞のある神様には黒川の入り口に蛇神様がある。奇形の天然石の上に木造の宮がり、穴あき石、幽玉等が奉養されている。この石の割目に

御神体の蛇が現われ、村に変事とか悪病の入るのを予報したり防だりしてくれる。御神木の藤を蹴って動けなくなつた人がある。橋沢十二平の稻荷様はもと総本家の屋敷神であったが今は分家に当る家の母の大木の根元にあり、五寸程のコンコン様(氣)の焼物が村人の病む時は横向き、長病の時は転がり、死ぬような時は落ちて居り、あらたかな神様で今野栗の神主の言により箱に入れてあって見えない。倒れても落ちてもキズ一つついていない。

山には異歎がいる。山の神の使といわれるオコジョは筋が背中から尾迄に黒川の蛇の神様 摂影 今井善一郎



黒川の蛇の神様  
撮影 今井善一郎



道祖神の報賽物には異形のもの多くアリシズムの佛を充分供ばしめる。

撮影 今井善一郎

い。十月末によく出て来る。

オーサキも山に住み背に脊先から尾迄一本の黒い線が奇麗に通っている。但この色は十匹十色に異なる。長さは尾迄一尺位、頭は兎に、尾はリスに、手は猿に似ている。沢山かたまつて生息している。之を養うと他人の家から蚕や食料を運んで来たり、蟲の売買にはハカリの一方に(二に見えず)ぶら下つて飼主に不当利得をさせたりする。人について狐つきと同様の病状を呈させる。塩の沢の人白井のある家に屋根屋手伝にゆき風呂に入っていると木に小さな獸がいたので湯をかけたら、腰が立たなくなつた。家人が「俺がちの使い者かまつたな」と云つたといふ。横原ではある旧家オーサキを封し込んだ石が(橋へ下りる坂の途中の石垣に今なつてゐる)ある伏見(一説玉子)の稻荷で封じもらつたもの。中寺寺の門前にも一つ同じ様な封じ石があつた。オーサキは祠主が扶持がわるいと、その家の畠の石を別の自分の好む家へ運ぶので落合のいい事もある。オサキ持の家の子供と喧嘩したら、蟲にオサキの小便をかけられて黄色くなつた事があるという。オサキに取りつかれた病人は、布団の内から両手をかざして見たりする。死後オサキの出た穴が腹にある事もあるという。

狐も亦人につく。小春の対松じいという獣師が狐を射た処、片眼をつむって撃つたので、その狐は片眼つこの茂作じいにとついた。

死んだりをしていく。山の神のバチが当ると多くの人はどらなえた。死んだりをしていく。山の神のバチが当ると多くの人はどらな

何故ついたと聞いたら、「前足をぶたれて倒がれないとからだ、扶持をすれば許してやる。鳥をくれば離れる」と云う。「では明日橋の處へ来て待つていろ。」と云つて翌日行人が行つたら一匹の狐が橋の処で寝ていたので鉄砲で射殺したという（納原）。塩の沢の某家では他処から來いた人狐につかれた事がある。説わからぬ事を多く喋り、飯をやると「オチツキをいたさます」など云つてたべ、この人の行つた事のない土地の名（勝山など）を云つたりした。離れる時は家の入り口でバタリ転んで、暫くバカみたいにほんやりしていたが「オレはどうかしたんべか」と云つた。

狐は又人をまやかす。甘藷から塩の沢峠を越えて来た人、鍋をもつていて狐に山の中をさんざんに連れまわされて道がわからなくなり、通りかかった人に「ここはどこでがんす」と聞いたという。塩の沢の人柄原へ手伝いに行つた帰り、沢の崖を一生懸命登り立たがっている。通行の人「おっちゃんどこへ行く」と聞くと、「家へ帰るさ」「それぢや、こっちだよ」と手を引いて道へ戻した。里川の蛇神様の手前で、大岩に罪魔されて道が通れず、それを遡ろうとして沢におち、木の株につかまってやはり通行人に引上げてもらった人もある。皆狐の仕業だといふ。猪もよく人を化かす。塩の沢の時パンという大工、五十年前、夕暮明ヶ沢と塩の沢の間で猪がチヨコチヨコ出て来て頭に木の葉をのせたら美しい娘になつたので、反対に化されたふりをして手足をフラつかせて近より、ゲンコでボカリはたくと、コトシと倒れて死んだ



オーサキを封じた石  
撮影 今井善一郎

ぶりをしたのでつかまえてフンドシで縛り上げて家へもって来た。板の実のようなクリクリした眼玉で頭をニヨキニヨキさせていた。肉はかたくて食えなかつた。やはり塩の沢の話に、もと山の烟に豆小豆を作り猪子追小屋でブリキデン<sup>1</sup>を叩いて鳥獣を追払っていた。お玉婆さんが番小屋に泊つていると猪の脚を絞たのがお爺さんに化けて来た「オジイ來なくもいに」というと、「淋しから来たよ」という。イロリにあたまり乍ら金玉を両手でひろげて、「お玉これにくるまれ」とつた。お婆さんはしっかり者なので翌日家へ帰り、お爺さんは家に居た事を確めて、今は絶対に山へ来ない事を約束しておいて、イロリの火をうんとくべてオキを作つておいた。そこへ化けたおじいさんが来て火にあたり、いねむりを始めたので櫛の木の皮をもしてた上にオキを一杯のせて爺さんの金玉にハジキかけた。猪は身体を松やにて固めてあるから、それに燃えついて七転八倒して死んだ。この肉もかたくて食えなかつたといふ。

山の怪異に天狗の仕業と信ぜられているものがある。小春の中沢武平氏昭和六、七年頃の十一月に中正寺権現のオネに独りで猪をしていた時、そのソリ（オキ）に登ると上方に毘沙門様の灯が見えるので、刺みタバコに火をつけて一服した。その時真夜中の間に軽く太鼓をたたく音が聞えてきた。さては天狗のオコモリかと聞いていたら、ビイトロビイトロと横笛の音が交り、次には耳のさけるような大胴の音と笛の音が聞えて来た。確かに天狗の笛太鼓か獺か猪にだまされたのか不思議な音であった。同氏の言に奥山で猪をしていると、十一月から十二月にかけて初雪の降るような時に、ほら貝の音がボーボー聞える事がある。よく聞こうと耳をすますと聞えない。塩の沢峠にも天狗が出たといふ。姿は誰も見た人はいない。ある人が通つたら、急に大風が吹いて来て、ドランドランと木を吹き倒す音がして危なくて歩けないので道に伏して、逃げ、後から來た人が知らずにその人を踏み、「どうした」という事で二人

川天狗という怪異は、川へ網打ちに行くと火の玉が流れて来るので、それに網を打つたら魚がうんと入ってカゴにも入りきれずおして来る程だった(塩の沢)。納原の淵でも火の玉が流れて来たので網を打つたら光る物は千切れて網の口から流れれたが魚がうんと取れたという。

口碑伝説も頗る多い。以下之を記す。

高天原 浜平から上った草刈場に高天原という処がある。上野村分だが、まるで信州分のように向うにある。ここで大昔神様が戦争をした。その時血の流れたのが千曲川、骨や臓腑の流れたのが荒川、髪の毛の流れたのが神流川となつたといふ。

弘法の井戸 塩の沢にある井戸で岩間から浅い水が湧いているが、一ヶ所汲んで少なくなつても又行くと元通りに一杯になつてゐる。大水にも増えない。サカサ木 横沢の橋の木は昔弘法大師が枝について来て立てた木が根について生えたものという。直徑四、五尺、高さ十間位で六尺許り上の処で三叉になつてゐる。三叉の木はどこでも切つてならない。オボスナ様の森にも柄の木があつた。今は木のカッバだけ残つてゐる。この木が横沢の名目の起りで、琴平様など紀つてあり中島の屋敷沖様になつてゐる。

二代源 昔更科御前が身を投げた瀬で御台瀬といったが、なまつて二代瀬になつた。

大法印の塚場 塩の沢の上にある。昔閑ヶ原の戦いに村を總代して参加して閑東方に参加した人が「若し福らなかつたら埋めろ」といった太刀を埋めた処、石宮が二つと名のわからぬ木がある。

ナンジャモンジヤ 村の役場の前にある。珠数はこの木で作ったものが上等だといふ。

ノミゼー潤 塩の沢の奥にあり、今は浅いが昔は深い淵で姫宮があり

蛇体が纏つてある。三代以前にお爺様がいて、村のお膳やお椀が足りない時は、膳碗何人分貸して下されとその数を書いておくと貸してくれた。ある時一つのお椀をかいたので返さなかつたら、怒つたお爺様がつないであった白馬に乗つて信州ハコセガ淵(八ヶ岳とも云う)へ行つてしまつた。信州時で白馬に乗つたお爺様に行き合つた人が、「お爺様どこへ行く」と云つたら「信州へ行く」と答えたといふ。

義理がたい狼 塩の沢の人、朝ツバカ(早朝)にノミゼーガ淵へ行つたら狼が二匹で三十貫もある猪を追かけて來た。その人が「俺かとつてやるから待つてろ」と云うと、狼は傍にさけて見ていた。マキザフボーの猪を叩き殺して、「さあ殺したからどうにでもしろ、もうこゝへ姿を見せるな」と云つたら狼は岩の上に猪の頭を食い切つて置いていった。獲物の頭は之を仕留めた人にやるのが狩人の習慣である。その人は氣味が悪いのでそこへ置いて帰つたら、犬がそれをくわえて來た。そしたらその夜狼が来て犬を殺していったといふ。

山姥の足跡 蛇本(新羽のはすれ)の大滝にある岩に大きな凹みがあり、ヤマンバの足跡といふ、どんな日日照りにも水が絶えない。中里村魚尾にも一つあってその間を一跨ぎしたといふ。一マタギという地名もある。

山本勘助の馬の足跡 桜原の二町先の川向う、小倉の田端にある。川原石に馬の足跡がついていて、山本勘助の馬の足跡といふ、そこに山本といふ地名や「フル城」という名もあり、土手が残つて居り昔日たこもつたもののかといふ。

鍋割り山の山姥 桜原の中沢氏の四代前の人、鍋割り林の岩穴で山姥にあつたが木の葉の衣服をきていて、「何故こんな処に来た。二度来る處ではない。これをやるから人に見せるな、見せなければ一生こまらせない」とて盃を一個くれた。峰の巣の附け根の様な形だったといふ。ところが三年目に人に見せた処、大嵐が來て家は潰れ、爺は坐つたまゝ婆は台所でつぶされて死んだ。その隠居家の跡に二十三夜塔が立つてゐる。

鍋割りといふのは天狗が鍋をたたく様な音をさせたとてこの名がある。女衆が通ると山がある。『父沢の狩人父子この山の岩穴に泊り大人道にあつた事がある』といふ。

一杯水須賀から柄原に越える所にある清水は、浅いが一度一杯ずつ位いつでもめる。志賀坂峠にもこういう清水があり、共に弘法様の井戸と云われている。

昔浜水の奥から長さ三尺位の大草鞋が流れて来た。村の衆が怪んで登つていつたら、身の丈八尺もある老人夫婦がいた。「どこから来た」「出雲から来た」と答えた。神様か何かわからぬがこんな大きき者は何をするかわからぬからとて、夫婦が「是非助けてくれ、助けてくればこの川に白水（米）を流すから」と頼んだが、黒川の人がカラムシの繩を作り、浜平の人がそれで檜の木に縛りつけて火炙りにして殺してしまった。それから黒川にはカラムシが、浜平には柏が生えない。翁のもつていた太刀、櫂のもつていた鉛は浜平の諏訪様に今も伝わっている。その後熱病が流行したので拝んだら、神のタリヤだといふのでこの二人を浜平の諏訪様に祀つた。

禁忌作物 植原の黒沢本家ではモロコシとキウリは作つてはいけない事になつてゐる。これは先祖が戦争の時モロコシの株に馬がひつかつて転び、胡瓜の蔓に足をとられて逃げなかつたためといふ。

白米城 中学校の南にあるタケといふ山に黒沢本家（源）の先祖が植籠っていた。攻めて来た敵は、山頂には水がないから水攻めにしようと、山から下りて来られなし、ようやく水口を固めていた。そこで本家は山上から白米を落していかにも水があるように見せかけたので敵は諦めて引上げてしまつた。白米を流した跡は今もある。古城といふ城があり、濠をまつて通れない様にした跡がある。

山島の神様 中ノ沢の西、二代瀬の少し手前に諏訪様がある。その御神体は土焼きの着色した山鳥の形をしたので、昔中の沢から北沢（三岐の近く）に盗まれてゆき、又中越の上の平のお宮へ盗まれて來た。盗

んだ人は立派なお宮を作つて手品飾などよんて手手なお祭りをした。ところが山鳥は中の沢へ飛んだり、北沢へいったり白山にしているといふ。北沢では山鳥をとらない。

乙父の貞前神社 乙父の貞前神社は一の宮と樋含様と三人姉妹だった。樋含様はサルオカセがうんとあり、一の宮様は池があつて取り代つこしたが、乙父の貞前様は何もなくて仲間はそれにされた。この神様は竜神で乙父神社に合併されたが御祭りの時はしく粒でも雨がふるといふ。

アシゲ源 昔勝山から来たアシゲの馬が落ちて沈んだ所という。柄原の旧道で道下へ行く三町程の所に淵がある。

書話ははじめに「昔々……があつたとさあ」で始まり、終りに「……だったとさあ」という。合い桶には「ファンファン」といって聞く。その一、二。

ミズトロ（水はかり）という赤い鳥がなくと雨がふる。この鳥は自分の体の赤色が水にうつるところなので天から雨が降るのを待つて飲むのだとう。ビートロビートロビートロビートロビートロビートロビートロ（塩の沢）。

昔、燕と雀は兄弟で、親の死に日に雀はとる物もとらずに飛んでいたので、食物がたべられるが、燕は化粧してシヤレして、したので間に合わず泥を食えといわれたといふ。（塩の沢）

ある人居寝をしていて夢を見た。鼻から何か虫が出て木の枝にぶら下つたとみて夢がさめて、おぞろしい目にあつたといったといふ。（中越）。

### 俗 信

今、庚申講はないが庚申塔は各地にある。紛失物があると、庚申塔を荒縄でぐるぐる巻きにして縛つておく、盗んだ人がママ（怪我、病気等の不運）になるといふ（中越、塩の沢）。

虫歎の時はイロリの奥の柱に紙をはり三つずつ叩けばよいといふ（塩の沢）。

クシヤミが出る時、ハクショの回数により、一、ほめられ。二、にくまれ。三、はほれられ、四、は風邪ひくと判定するという。

#### 俚謡

大豆は雪シヨの出た時薄くといい。

ツクメン茨の花が咲き始めてから咲き終る迄が小豆の蒔きシンだ。(以上橋原)

柿の葉にゴボウの種三粒包める時が牛蒡の蒔シン。栗のエガが蚊の頭になつたら稗をまけ、ヒトの頭位になるまでに小豆を蒔け。

ネブタの花の咲いた時が小豆の蒔シンだ。

バラの花の盛りが小豆の蒔シン。(以上塩の沢)

胡桃の葉が鶴色になるに糸緒が上る。

トチコロガシ(キツキの種類)が高い処で木をつつくと明日は照る。低い処でつつくと雨になる。

武州側から来る雨はトケイ山まで真白に降るがこちらは降らない。

橋沢から来る雨は落ちかかつたら一町も逃げない中にビショ浸れになる。

ヤンギュウ(中学の後の山)に霧がかかって橋沢の方へゆくと必ず雨がふる。

タケ(石灰岩の山)は長時化の時は黒くなる。この山が白くなると雨が上る。(以上橋原)

イレ風(河下から来る風、河上から風はダシ風)が吹くと雨になる。

入梅の頃になると霧が入ると天気にならぬ。沢から霧が出てゆくと天気になる。(以上塩の沢)

# 上野村北西部の年中行事

関口正己

## はじめに

どこの村の生活でも、年々同じ日が来れば同じ様式でくり返される習慣的な行事が、しきたりとして伝承されている。今では、これが仕事を休んで御馳走を食べる遊び日のようなになっているが、本来は家ごとの神祭りの日であったことは、各行事の内容を少し考えてみれば了解される。

ここ、上野村でも古来の年中行事が生活のリズムとして今でもかなりはつきりした形で伝えられていて、行事本来の持つ意義を解明する手がありとなり得るものが多いのは、極めて興味深いことである。

上野村の年中行事の中で特徴のあるものを若干あげてみると、小正月のオニノハ（オニノハ）、道祖神のオキンマラ、ヒナ祭りのオヒナガ、旧四月八日の山の神様参りと藤の花飾り、旧十月十日の山の神参り等が数えられる。中でも、山中だけに山の神祭りは、行事本来の意義を示唆しているように思われる興味深い。

以下順に、一月から十二月までの行事を記載してみよう。ここに載せる調査資料は、大まかに分け、「一月は堂所、四・九月は塩の沢、十一・十二月は中越の各部落で主に採集し、隨所に聞き得たことをおりませたものであり、大字柄原の八、九区にまたがっている。その内容の大体は上野村一般に共通しているものと判断される。

草所部落では、年神棚を別には作らないが、幣束を神主さんに切ってもらつて、区長が配ってくれる。カドマツは、お松、笹、アシダギを杭にしばりつけてシメ繩をはつたり、ナラの木の長い枝を立ててシメ繩をはつたりする。門に立てるお松は外向きで、庭先きに立てるお松は内向きにする。アシダギは、木材を割り木にしたものを作つて、お松の所によわいつける。

シメ繩は、もとは部屋中ぐるりとはり回わたした家もあつたが、今は年神棚の下だけにはり回わす。シックメという短いシメナワを作つて、カマ神、白、水神、流し、便所、烟、諏訪神社、お堂、墓石全部等に上げておく。

年神棚には、年神様（年徳神）のお札や御幣束、お供え餅二組、三宝荒神等を上げる。お供え餅は白い餅を重ねたり、青と赤の色つき餅を重ねたりして、上にマツを立てる。三宝荒神は別の棚に祭る家もある。

お飾り物として、年神棚の前にシノ竹の棒を横に渡してミカン、カキ、スルメ等を吊るす。お歳暮に貰った物を竿に釘を打つて掛けたりする。供えた食べ物等は小正月まで飴つておいて段々取つて食べてしまう。

年男が元日には早く起きて、若水を汲んでお茶をわかして進める。オ茶ガシ（朝飯前の食事）には、固くこしらえたトウフを竹の串にさしてデンガクにしたものを焼いたり、お芋を三箇位ずつ串にさしてデンガクにして焼いたりしたもののフミソ（砂糖ミソ）を塗つて、家の中の年神、カマ神、水神、白等に進ぜたり食べたりする。

三元日の間は、オ茶ガシにトウフ、芋のデンガクを朝の六、七時頃食べてから、朝飯におゾーニを進せて食べる。おゾーニは餅、ニンジン、

トツフ、ネギ、カマボコ等入れて作り、お松に盛って年神様、御先祖様（仏壇）等に進ぜる。オヒルは一年中ゆるやかに存らせようにお粥、又は小豆粥を作り、カド松、年神様、その他のお松のある所に進せる。

夕飯にはうどん、そば等を作り、これもお松に進せておく。すべて新しい食物を作った時には三度ともお松に進せるか、残り物の時には進せなくてもよい。また、三元日には朝夕のお神酒を進せる。しかし三元日に決まってトロロ汁を食べるということはない。

## 二 日

山ビラキ、仕事始メ 山へ行って山の神の石宮におサゴを上げて、正月に使うオッカドの木を伐つてくる（春にお松ハヤシをする時も、山の神におサゴを上げてからお松を取つくる）。

## 四 日

オ棚探シ お供え餅を下げる十四日の朝飯に食べるよう取つておく。おノーニも食べるが家例ではない。この日にお寺から御年始がくる。

## 五 日

七草のセリつみに行く。一夜ゼリはいけないといわれているので、この日にセリをつむ。

## 六 日

六日の年取り、六日年といわれ、夕飯に御馳走を作りお神酒を進せる。大晦日にやや似た物を作る。

## 七 草

お粥にアズキを入れて作る。セリも入れるが、セリタタキはあまりしていない。セリは叩いて煮ると食べる時にめっこく食べられる。

## 十一 日

お食開きは別にしない。

## 小正月

モノヅクリ 十四日の朝早く起きて、二日の仕事始めに山から伐つて

来たオッカドで小正月の飾り物を作る。

オニノメ（オニノハともいいう。オッカドの木を一尺位に伐つて、二つに割つた面に、「十二月、鬼の日」と墨で書いたり、セイメイ食を書いたりして作る。うらう年には十三月と書く。これを家の外側の柱ごとに立て掛け置くが、悪魔除けだという。

ハナカキ オッカドを八つ割ぐらに細く割つて、ハナカキという刃物でけずつてハナをかく。何十本という沢山の数を作つて、お正月のお松やシタケの葉のあつた所や道祖神等に上げる。十六ダンのハナは一本に八段すつハナをかいて二本一組にして十六段のハナにしたり、二又の木をけずつてハナをかき、十六ダンギクを作つたりする。

ワキザシ 一番太い木を刀のよう先の皮をはいで作るが、四尺から八尺位のものある。道祖神焼きの時、火にくべてこがし、ヤキを入れたのを家のトボロに立てかけておいたり、トボロの梁の上に置いたりする。それを年々重ねておく家もある。ワキザシは男の子の数だけ作つておく。便所にも必ず置く。便所に置くワキザシは刀の代用としてこれで敵を防ぐためだという。便所の神はコウカ神様というが、あまり祭らない。

オキンマラ 木の長さは一尺八寸が規定で、皮をむいて「奉納道祖神」等と書き、各家からおサゴを持って道祖神に納めてくる。白井部落ではムラ中で一本だけ大きな木をナタでけずつて、男根そっくりに作つて道祖神に上げた。

福儀 オッカドの木を長さ五、六寸位に伐り三本、又は五本位かされてしまり、「七福神」「宝の舟」「米麦奏」等と伐り口に書いて進せる。

アワボ、ヒエボ（米ノホ、アワホともいいう。竹を割つて、先を曲げてオッカドを短く切つたものをさして飾る。オッカドの皮をむいたのがアワで、むかないのがヒエである。それにハナをかくこともある。一对づつに作り、お正月のお松のあつた所に立てたり、神社にも供える。神の作神様に十四日の朝進せる時には、アワビ、ヒエボの真中にハナをかいたものもある。

カユカキ棒 二尺程のオカドの棒の先を十文字に割り、マユ玉を一箇はさんで、十四日に大神宮様に上げておき、十五日の朝のお粥を煮る時にお粥をかき回す。十文字の割り口にお粥がうんと入ると今年は立が当るとか、作物がよく取れるとかい。カユカキ棒は次の年まで神棚に上げておくが、このマユ玉を歯の痛い時につけると治るとい。ハラミ箸 家族の数だけオカドで作り、大神宮様に上げておき、十五日のお粥を食べる時に使う。エビス講の時のエビス、大黒様の分も作っておく。エビス様にハラミ箸で進せてから、ハラミ箸は神棚に上げておいたり燃したりする。

諸道具 餅つき杵二本（一对）、臼、鉢、エダワ等の農道具の模造品をオカドで作り神棚に上げておく。テギキ（立て杵）もあり、マユ玉を作る時に、五、六回つくまねをする家もある。これらの作り物は、二十日のエビス講に集めて、イロリで燃してしまが、福袋、カユカキ棒、キネ、臼だけは残しておく。キネと臼を残しておくのは、「キネ落トシ」といって、仕事中に誤ってキネを臼の外へ落とすと七代たるといつて悪いので、その時に馬のス（尾の毛）でキネと臼を屋の棟にしょい上げてしまじないをしなければならない。その時のために取つておくのだと、う。

### 道祖神

十四日はオトナの道祖神で、十五日は子供の道祖神となつてある。朝飯に、お供え餅をおソーニに入れて食べる。屋ごろ、各家からオキンマラを持っておサゴをそえて道祖神に進ぜに行く。道祖神はヒヨウゲ神様で、オキンマラの様なものを喜ぶのだとい。また、昔、猿田彦大神がこの国へ来て女神といっしょに一生懸命に働いていた時、仕事が終った十六日に初めて氣を許して男根を大きくしたので、それに形どつて太いオキンマラを作るのだといふ話もある。道祖神焼きは、川原に道祖神小屋を作つて、おとな達が出て燃やすが、マイ玉はふつうの年には十二個、閏年には十三個焼いて、ムラ中の人が

取り替つこして食べたりする。道祖神焼きは虫やムカデを焼き払うのだといわれる。草所部落ではこの二年程やらない。白井部落では「花舞の尻まくら」といつて、花舞が来た年の道祖神焼きには、花舞が尻をまくつてその火で尻をあぶる風習があつた。須郷部落では、道祖神の所の道と谷をまたいで、こちら岸の山から向こう岸の山まで太く長いシメ繩を引つ張つた。このシメ繩は一月十四日に取り替えたままで一年中張つておき、厄病除けなので、もし繩が切れれば厄病が入るといわれている。

### 十五日

朝飯にお粥、又は小豆粥を作つて、ハラミ箸で食べる。子供衆の道祖神をする日、子供達がお篠の松を集めて来て、川原で燃やす。

### 十六日

お寺参りに行く日だが、食事は別にきまつてない。お芋を食べる家もあるし、御飯の家もある。

### 初山の神（十七日）

毎月十七日に山で働く人は山の神を祭る。正月十七日は年初めての山の神の祭り日で、山仕事をしている人を呼んで山持ちが御馳走を出したり、組の人気がヤドマイ（宿）に集まって酒を飲んだりする。

柄原部落ではサケマツリといつて、正月十七日と九月十七日の二回、部落の人が一合酒を持ち寄つて飲み合う。出席しない人も同じに、毎戸から酒一合分のお金を集め、ヤドマツリは三軒が組んで、酒の肴を用意する。肴は芋の煮ころがしとキンピラ位で、現在は少し買った物も入るようになつたが、汁はつかない。酒は茶碗で飲むが、最近は焼酎の方が安くてきくので、多く使われている。こういう時に、よそから新しく来て仲間入りする人が酒一升買って行つたりする。

この日は部落の申し合わせ（規約）を決めたりする。

### 馬頭観音（十八日）

戦前は乙父にある馬頭観音堂の祭り日で、馬を持っている人がお参り

に行き、お札を受けて来て馬小屋に貼って置いた。お堂の近くでは、子供達が籠つ葉を小さくしばった物を「馬のお土産」といって、一把二銭位で売っていて、お参りに来た馬主の尻を叩いて売りだつた。これは

子供達のホマチ（自分で勝手に使えるお金）になるものだつた。今は馬が少なくなりやらなくなつた。

中越部落でも、以前は馬を觸っている人がこの日に集まって、餅をつたり、酒を飲んだりしていた。

エビス様（二十日）

朝の茶ガシには、小正月の飾り物をイロリで燃やしてマユ玉をゆで、丸鉢に上げてシリコにして食べる。

朝飯は小豆飯で、お正月のお供え餅を取つて置いたのをエビス様に進ぜたり、お金を樹に入れて上げたりする。エビス様は大きい物が好きなので、御飯は山盛りにして進せる。

エビス様に上げたものは、子供が食べると縁遠くなるといわれる。

天神マチ（二十四日）

塩の沢部落では、一月二十四日、五日頃、または二月二十四、五日頃の土曜日の夜を選びて子供達が男女別にヤドに集まつて天神マチをする。年令によつて米の量を決めて持ち寄り、ヤドで五日飯や肉飯をたいて食べる。おかげでお婆子はヤドで出してくれる。御飯を盛つて机の上に進ぜて拌むが、天神様の掛け軸などは別になし。

部落には天神様を祭る神社はない。

堂所部落にも天神様の神社はないが、子供達がヤドに集まつて、五日飯を食べたりする。別に文字は書かない。

二 月

節 分

ヤツカカシ（ヤキカカシ） イワシの頭を焼いて家のカド口にさす。これを焼く時に「蛇ムカゼのロヤギリ」と唱える。

「豆まき」には大豆をいって「福は内、鬼は外」と唱えながらまく。この年に厄年の人には厄おろしをする。

八 日（別行事をしない）

初 午

巳ノ日マチ 初午の前の晩をミノヒマチ オシラマチという。お正月様のお松を少し取つて置いて、神様に上げてから、半分をジロ（イロリ）で燃やして煙を出し、残りのお松を臼に入れてついて音を立てる。オシラ様は、その煙に乗つて、臼の音のする所におりてくるのだとう。おシラ様に御飯や御酒を進せる。この晩は遅くまで起きている。初午にはマユ玉を作り、樹に入れて神棚に上げてオシラ様に供える。オシラ様は蚕神様で、網笠様ともいわる。

三 月

彼 岸

堂所部落では、薬師堂にオシチャ（花飾り）を作つて飾りたて、一週間のうち、部落の人が代わり番ごとに出て、お参りをする者にお茶をてくれる。家ではおハギ、すし等を作る。お団子を作り、お持仏や神棚に上げる。お墓参りには線香とお水やおサゴを持って行く。

四 月

花 見（二十日ごろ）

塩の沢部落では、桜の花の咲き揃つた頃を選んで、部落中總出で公民館に集まつて花見の宴を開いてドンチャン騒ぎをする。前には大きな家をヤドにしてやつたが盛大なもので楽しい行事になつてゐる。この日に草餅をついて食べる。

ヒナ節句（三日）

三月三日のヒナ節句を一月遅れです。おヒナ様を飾り、餅、赤飯、すし等を作る。

初節句には、嫁が実家や仲人の所へヒナ人形にカク飯、赤飯等を添えて持つて行く。また男の子が生まれた時には、五日の節句に鯉のぼりを持つていたが、最近は一緒にして三日のヒナ節句にしてしまう。

嫁が、仲人の所へ挨拶に行くのは、二、三年間で遠慮して行なかなくな

るが、実家へ帰るのは十年位続ける。

オヒナガユ 桜原、乙父、塙の沢部落では、ヒナ節句の時に、女の子が五、六人ずつの組を作つて、川原へ鍋を持って行つて、石でカマを焼いておカニを煮て食べる風習がある。その時は、ヒナ人形の中の天神様を持って行つて、できたおカニを進せてから、そこ川原で食事をしてくる。おカズは各自が持ちよって楽しく食べる。

神参り（旧四月八日）

旧四月八日は、浜平山の源助神社、熊野神社（トウゲ様と呼ばれ、このカラスの羽根は虫除けになる）、権名神社等へお参りする日で、お参りして山から藤の花を取つて来て、トボロに吊るしたり、竹シボにさしたりして、神棚や仏壇に上げて飾る。

藤の花を飾るわけは、昔、お祝いが悪者にさらわれた時に、たらしの様なものに容れられて拘がれて行つたので、山の中の藤づるがさがつてたのに吊るさがって逃げて助かったから、今でもトボロにさすのだといい伝えられている。だから藤は花が咲いていないのもよいといわれる。

火渡り（八日）

須郷部落だけには御歳祭が残つていて、今でも火渡りの行事をする。材料のオカド等の木を高さ五尺位も積んで、ナカザになつた人を中心にして拝みながら火を燃やす。火が燃えると、オカサが一尺位に積もつているが、その上をハシシになつて歩いて渡る。渡つてみると、夏の川原の石の上ほどにはあつくないという。

ナカザになる人は、なつかばかみたいに淳朴な人で、この人に神様が乗り移るといわれ、たとえ来ないうちに火を燃しつけても、呼びに行か

ないうちにたちまちとんで来るという。現在は仏松ジイという人がナカザをしている。

春祭り

乙母神社 四月三日

勝山神社 乙父神社 四月二十一日

いすれの神社も、春祭りだけで、秋祭りはしない。

五 月

五月の節句（五日）

塙の沢部落では新暦で五月の節句をやり、カシワの葉が出てからもう一度やる。カシワ餅は、うるち米をこねて皮にして、こしあんを入れカシワの葉に包んでふかして作る。

ヨイ節句（四日）には、カヤとヨモギを軒にさす。もしショウブが出でれば、ショウブ湯を立てる。昔、黒沢某氏のおバアが蛇の子を妊んだ時に、ショウブ酒を飲むところになつて、中越部落でもトロロ芋の汁を作つて食べたり、マメで富貴に暮らせるように、豆と蕗を煮て食べたりする。

また、ショウブ湯に入つて、ショウブの葉を腹にまいて、ビリビリと引張ると、腹の虫が切れるなどといわれる。

塙の沢部落では、キゴモリには中氣にならない様にトロロ芋を食べる。トロロ芋の汁を作つて食べたり、マメで富貴に暮らせるように、豆と蕗を煮て食べたりする。

トラマツリ

煙の麥の穗が出てから最初のトラの日と、二のトラの日（以前は三のトラもした）に、麦が大風で倒されないように神に祈つて大食会をする。

この日が近づくとヤドマイ（回わり番でヤドをする人）が、参加希望を取って、米四合ずつ集めて回る。大部分の家から一軒一人すつは参加するが、都合で出られない家では、神様に上げて貰うように少し米を出す。ヤドで小豆飯（うるち米）にいたした御飯を二合から三合位、お椀一杯に高盛りに盛り上げ、シャンパン水をつけて無理に疊り付けながら高くして、四合の御飯をお椀二杯に盛り付けて置いて食べる。これを四合飯といい、高盛りにした御飯は一本、二本と数え、一本分だけはヤドマイの家の大神宮様に上げておく。これがヤドマイの手数料となる。お葉は山の物、ウド、タラの芽、ウダイスのイグサのゴマよごし等と、豆腐汁位で、酒は使わない。

トマツリには歎取りをしてはいけない。何の烟にもサク場にも入ってはいけないと、として嚴禁されている。昔、大風がして、麦の穂をぶち落とした日がトマツリの日だったので、この日に御祝いして難をさけるよう祈るのだといわれている。（なお、五月になると不二穴には入れない。入ると大風が吹くといわれたが今では半風で入る。）

## 六 月

麦刈りの終わりには別に行事はない。

お盆のはき立て祝いには、昔はまんじゅうをふかして縁故先きへ持つていったが、今はそれもしない。六月は働きづくめの月である。半夏、ハゲン様にはネギ煙に入つてはいけないといわれる。

## 七 月

瓶の沢部落では、蚕休みといって、春蚕が上がつて繭を出したあとの一

十一、二日頃、まんじゅうをふかして仕事を休む。ムラ仕事としてミチ刈りなどをすると、フセギの札などは立てない。

## 八 月

正月と同じに決まっている村の休み日で、回覧板など回わざに村中が仕事を休んでゆっくり遊ぶ。赤飯やすしなど各家ごとに好きな物を作つて食べる。

ムラの会合なども、今まで忙しくてできなかつたのをこの時にする。

## 九 月

### 二百十日（一日）

川和瀬落では、二百十日には小豆飯をたいて、荒れないよう祈る。

### カマノクチアケ（一日）

お盆が近づいたので、先祖様が地獄のカマのフタに焼き餅をぶつけて、フタをぶつかいで出て来る日だといわれ、おまんじゅうを圓く焼いて作り、仏様に上げる。

### タナバタ（ナノカビ）（七日）

竹に色紙をきつて飾りつけ、家庭の庭や軒場に六日に立てて、七日の夕方に川へ流してしまう。

この日にキムツタ（キムの木）の葉で眼をこすると、眼の性が良くなると、いうので、キムツタの葉を前日に取つて来て川へはたへ立てて置き、七日の朝、川原で顔を洗いながらキムツタの葉でじ回マタをこするまねをして川に流してやる。（今では片端ですることが多い。）

タナバタはじまんじゅうを食べて、七回水を浴びる日だといわれる、ふかしまんじゅうを作つて食べる。

ナノカビに洗濯をすれば、汚れがよく落ちるといわれる。畠へ入つてはいけないという禁忌はない。



オシトギといふものを米の粉をこねて作り、わらのツココに入れて、持つて山の神様に供えてくる。幾人かでさそい合って、お神酒の二合も持つて行って、オヒルを食べてゆっくり遊んでくる。オシトギはオダフウ（御供物）だから、山の神様に一組上げたらち、半分下げる来て、家中でおフニに入れて食べるし、他の家にわけてやる場合もある。

中越部落では、米の粉とうもろこしの粉とで二箇のオシトギを作り一組にして、弁当といっしょにセーズカリ（ショイズカリ。網日の背負袋）に入れて、男衆が山の十日夜の神様（石宮、山の神らしい）の所へ進ぜにいく。オシトギはシャクシ葉の葉の上に乗せて石宮の前に進せる。並が当る様に併んでから、そここの木の枝を折って、蚕のマブシにするために持ってくる。（この枝は春蚕を上げる時にマブシの上に束せると蚕がよく当るといわれる。）その場所で弁当を食べて、半日ほど山遊びして帰る。

以前は、十日夜には浜平山のハヤツムジ様、岡原のタケ一、笠丸山等まで行つて、オシトギを上げて焼いて食べたりしながら、一晩中おこもりして夜ふかししたので、バクチがはやつたりした。笠丸山には清水が出てゐるが、山の神様の気にいらない人が行くと、その水が見付からぬといふので、水まで用意して行つたのだという。塙の沢部落では、甘楽郡との境にあるテング岩（標高一二二二メートル）の洞穴まで行つて、山の神様を祭つてオコモリする。そこは湯落から一里半程の道のりで、洞穴は広さ十二畳位あり、二三十人は泊れる。（中には清水も出ている）そこへ十日夜の前の晩に、「天狗様が出雲（または九州ともいう）にかけて留守になるので、留守番に行く」として、部落の男衆ばかりが、夕飯と翌日の朝飯との二食分に、酒とオシトギ等を持ってオコモリに行く。寒い頃なので、洞穴の中で一晩中火を燃して騒いで、天狗岩の上に石宮があり、そここのシトギ焼き場でオシトギを火にくべて焼いて食べている。残りは家へ持つて来て、オダフウとして、家の者に分けてやつたりする。

蚕のマブシにする枝も折つて来て、家の神棚に上げて置き、春のマブシに乗せる。天狗岩はちょうどいいキャンプ場なので、春秋の山が美しい時期には子供たちがよくキャンプに出かけるといい。調査の時にも農休みを利用して出かけていたという。

山の神様は作神様だといわれる。また、「十日夜は大根の年取りだ」といわれ、この日には大根を取らないことになっている。子供たちはめいめいワラデッボウを作つて、夕方になると集まつて、「十日夜十日夜、朝ソバカリの昼ダンゴ、夜飯食つたらぶつただけ」といって、各家の庭先を叩いて回わり、前にはお金をもらつたこともあつたという。

#### クワライ

十日夜までに麦つくりを終わす様に仕事を進める。麦まきの終った時には、川原で糞を洗つて、お神酒をかけて感謝する。家ではトロロ汁を作つて食べる。

#### エビス講（旧十月二十日）

茶ガシ（朝飯前の食事）にソバまんじゅうを宝珠の玉の形に作つて上げて食べる。朝飯には小豆飯をたき、お樹に山盛り高く盛つて、必ずサシマを付けて、豆腐つゆなどと共にエビス様に進せる。お金を持つて進せる家もある。

#### ツジユウ餅（旧十月二十九日）

農作業も一段落したあとで、穀物をハデーに掛けた時に落ちた穂や、脱穀の時にこぼれた実などを集めたもので、餅をつくって神様に供える。このいわれについては、昔弘法様が当地に来た時、ある家で「一つ餅をくれ」といわれたが、その家では餅をくれるのが嫌いで、「九日はきの

うでござった」(だから、もう餅はない)と言つてことわつてしまつたので、それから、この日にはどうしても餅をつかなければならなくなつたのだと語られている。

## 十二月

### 星敷神様

星敷神様は稻荷様が多いが、中越部落ではお祭りは全くしない。お正月に御幣束を上げるくらいである。

冬至 ユズ湯を立てて入ったり、カボチャを煮て食べることはよそと同様である。

### 大晦日

三十日が餅つきで、三十一日にはお飾りを作る。

大ミソカになると、平生のお勝手のジロ(イロリ)から、ザシキのジロへ生活の場所を移して、ザシキの回わりの梁へシメ縄を張り回わす。正月中はザシキのシメの中で暮らすことになる。コタツもザシキの西の方に別につくる。不幸のあった人が来た時には、上のジロには坐らせない。正月が終ると、もとのお勝手のジロに生活が移る。

大ミソカにはジロでうんと火を燃やす。火は陽気だから、家が繁昌する様にうんといふさなければならないもので、余り火を燃やさないと貧乏神が来るといわれる。

また、大ミソカの夜は家の外へはき物を出しておいてはいけない。厄神がすぐに判をおして行くからだといわれる。

### 歳末諸事

お松ハヤジ 二十日過ぎになると、家ごとによい日を選んで正月のお松を取ってくるのを、お松ハヤシと呼んでいる。

大掃除 中越部落では冬至か大掃除の日になつてゐる。

# 上野村南西部の民俗（二）

都九十九一

浜 平

十石峠の下の白井部落から約四キロメートル、坦々たる緩傾斜の林道が、神流川に沿って三岐まで続く。そこからまた約一キロ、営林署のトロッコ道を本谷に沿って登ると浜平に至る。浜平より奥約八キロの上流に営林署の作業場があり、中・小学校の本谷分校もある由。しかし普通

民家としては、浜平は、神流川流域の最奥の部落で、戸数は僅かに十五戸。鳩鳩や鹿が来て浴みしたのをみて聞いたという浜平駒場もあるので、訪れる人も稀ではないが、それでも多くは、この川の流域の人々である。

周囲みな山に囲まれていて、

一体どこに耕す土地があるの

かと、日を見はらせられるの

であるが、多くは農家であり、

また山仕事をしている。高橋

氏二軒、原氏三軒、黒沢氏三

軒が土着の家々で、武田信玄

の落人として来たと伝えてい

るが、詳しい伝承すら不明。

伝承ではすっと大昔に二十三

軒であったものが、凶年のため、六軒に減ってしまった。

それがまた現在まで増えた

のであるという。そうした事情は、恐らくたびたびあってそのために、土着事情やその他の伝承も稀薄になってしまったものであろう。

この伝承を裏書きする史料がある。鉱泉旅館主高橋真一氏方所蔵の、元禄拾年丁丑三月廿八日の『甘楽国上山郷浜平御検地野帳写』によると、屋敷二十四軒を数えることができる。その面積合計一反四畝一四歩、一戸平均一八歩余である。そしてこの檢地野帳所載の畠の種別は次表の通りである。

町 反 步 畠 合

中	下	桑	柏	切替	烟草	下々	山	中	一
七	一	一	一	一	一	一	一	一	一
(二、 五%)	(二、 五%)	(一、 二%)							

戸平均 一反四畝一四歩

- 106 -

この表で注目しなければならないことは、普通煙がほんの僅かであつて、耕地の大部分は柏煙、とくに切替煙が大部分を占めることである。柏煙が多いことは、この部落が、他の山中領地域と同様に、紙すきの盛んな土地であることを証明する。しかし紙すきは、農閑期に行なうものであるから、平素の生産活動は、全体の五八パーセントを占める切替煙の耕作に頼っていたものであろう。切替煙とは燒煙のことと思われる。

それをこの地方では、ナガリ、カツダシなどと称して、近代まで引きつづき行なわれて来たことについては、別項池田氏の報告もあるし、

また拙著「山村の風俗と暮らし」の中に詳述しておいた。

そしてこの上野村の中には、その経験者も、伝承も豊富に存在する。

それにして、一戸平均一反一畝の耕地は少なすぎて二十四戸を養うに足りない。もちろん人々は農耕のみに頼っていたのではない。この地

はまた山の幸には恵まれていた。狩獵や川狩りも行なつたであろう――

この点についても別項池田氏の報告がある。そして白井方面では浜平を

狩獵部落のように言っていた。また「山中猿過多」にあるように、

身の危険を侵して岩茸とりにも行なつたであろう。それから平均一反一畝

と言つても、こうした山中の切替畑は、そう簡単に調べ出せるものでは

ないから、検地洩れの非公式の隠田や臨時煙が多かつたことであろう。

しかし他にどのような利点があつたにしろ、この土地の生活がきびしく、苦しいものであることには変りがあるまい。一旦飢餓に襲われば、

たちまち飢餓に陥り、生活は瓦解して、人々の離散は免れ得なかつたこ

とであろう。

電気の入ったのは昭和二九年一〇月一日であった。

こうした浜平部落において調査し得たことは、民俗全般ではない。村

の方々が用意して下さった伝承者は、高橋きくさん（七八才）、原きんさん（七五才）という、浜平、中ノ沢生れの老婆であつて、採録は自然女

の関係する諸方面に限定されることになった。他に案内して頂いた同地

の高橋真一氏、同勝平氏、中ノ沢の仲井重春氏、白井の黒沢武尚氏、中

里村出身の小学校長高橋房一氏などの補助的な助言が多かつた。

里村出身の小学校長高橋房一氏などの補助的な助言が多かつた。

## 一 産 育

妊娠

妊娠でも、人にいよいよわかるまでは知らせないよう、かくせるだけかくしておいたものである。夫にすら三月か四月になるまではうちあ

けるものではなかつた。恥しから、また、子を産むことは、あまりあ

りがたがれなかつたから。帶祝いなどもなく、腹帯もしなかつた。

妊娠中、大火をみると子供にあざがができる。死人を見るときあざが

できる。兎を見るとみつくちになる。雉を食べると手の指がくついて

しまう。などと、守らなければならないことも多かつた。油・氣のもの

は食べないようにして、出産後は、お粥に鰐節みそぐらいのものを食べて

いた。

### 出 産

お産は「ヤ（別項）」です。だから「ヤ」のことをオサンベヤとも云う。

産をはがし、薬をしてふとんを折つて寄りかかつてました。その時に、

障子の日が見えるようでは、まだ生れないとも云われた。

お産の神は中里村魚尾にあるので、丈夫のうちにここに参詣した。

よいお産の時に、一番先に来るのはサイタイ様（産奉様＝勢多郡）で

あるが、重い時には、諦めなくてやるとよいと言つて、よくそうした。

特別な産婆とてなかつたから、もちろん素人のトリアゲババーがする。

話者の原きんさんなど、自分で子を生んでみなかつたけれど、部落の

ほとんどのお産には立ち合つてとり上げたとしきことである。トリアゲ

マゴに対しては、名づけ以後は、嫁、婿になるときに招かれる。平素は、

マゴの方からも、「一、二」と言って親しんでくる。

ノザンニエナは、きれいな紙に包んで、麻で結ぶ。子供が女なら、

針と糸に扇子を入れて、男なら筆と墨をそえて。これを大トボーのしき

いの下にヤスマル。百人の人にまたがれるとそれだけ知恵がつくと云われれる。

生児が犬のよう丈夫に育つようと言つて、額二・大と墨で書く

人もある。生れた当座はマクリをくれた。またホオヅキや熊の胃を網布

に包んでしゃぶらせたりして、すぐには母乳を与えたかった。ヘルソを

首にまいて出て来るのをケサガケといい、そうした子には要装といふ名

をつけた。

六月日に歯の生えたのをオニゴ、十月日に歯の生えたのをトウバと  
言つて、よくないものと言われた。

### 諸儀礼

オボメシ 子供が生れるとすぐ、一升の米を煮て、村中の女衆に集まつてもらって、にぎわしくたべた。

セツチンマイリ 家の人か、トリアゲババ一が、子供をつれて隣り近所三軒の便所に参り、オサゴをしんぜる。

ヒトヒチャ 小豆飯、赤飯などを炊き、近所の女衆にも食べてもらひ、オボの神にも上げる。オボの神には神廟にしんぜる。

ナヅケイワイ 名前は一七夜前後からウブアゲぐらいたつける。そして適当な日に赤飯などを祝う。親戚や近隣からアカイワイにツギ(布)を持って来るのもこのころである。オボギとして嫁の親は、初めの子だけには特にいねいにヅカケギモンをくれる。これには、その家の紋章をつける。

オボアケ 男女共二十一日目。それ以前に産婦が橋を渡ると乳が上がるといつて、橋を渡らぬことにしているが、この日には橋を渡って、氏神様に詣る。最近は詣らぬ人も多い。

クイズメ 男は一〇日目、女は一〇〇日目。トリアゲババ一にも来てもらつて、小豆のママでも炊いて、正式な膳をつくる。オヒラニニシメ、川原から拾つて来た小石を皿に入れて膳に載せ、これを生児の前に据えて、食べさせるまねをする。小石は御飯のかたの意味だそうである。オタンジヨウ 餅をついてアカイワイをもつた家に配る。誕生餅をもらった家では、イレモノゲーシとして、大豆一つみぐらいで返す。一方、家では、子供を冥の中に入れて、餅を入れた重箱を背負わせたりする。

初節句 男には鯉のぼりやお天神、女には雛をやつた。親が兄弟の近いかがオデイリサマをやつたが、これに対しては別におかえしはしなかつた。

### 仮 親

前掲のよう、トリアゲババ一、名付け親などがあるが、ほかに、父母いざれかが厄年に生れた子は、生れてまだ湯を使わせないうちに、三本辻に捨て、予めきめておいたタッシャな人に拾つてもらうこともある。その人に対して、拾つてもらった子は、生涯にわたって親として親しむ。オヤとも、バ一とも云うが、カーカーといふのがほんとうだと、バ一の家には、成長してからも、手伝いに行くなどして関係は一生つく。

### 七才前後

子供はヤタラノコトをして育てた。仕事をしなけりやあならなかつたから。イズミに入れて、ほとんどはおりっぱなしであつた。しかし、身体が弱かったりすると、百軒からいろいろのツギッキレを貰つて集めて、ヒヤクイロギモソをつくつて着せたりもした。

およそ七才までの子供は、ボンノクドのトトゲを伸ばす風が、大正十年ころまではあつた。転がつても、神様がひき起してくれるから。弱い者は十才くらいまでもトトゲを伸ばしてはいたといつて、また身体の弱い子は、七才になつてから、呑電様にオガシヨウをしで、男でも、女でも頭をすつた。これを「七つ坊主」「呑電坊主」または単にボウズと呼んでいた。また「弱い子は、男は呑電様のお庭の草をふませる、女の子は病氣の毛を呑電様に上げる。」などとも言つた。「七つ前の子は神様と同じ」とも言つて、神に供える前に供物なども、先に与え、ほかのことでも、その子のわがままがある程度認められた。

### 二 衣 服

セチギモン 婚姻を行つた場合だけ、正月などに晴れ着が出る。それをセチギモンといふ。

ヤマツキ 労働着、ヤマは畠のこと。  
モモヒキ 女もはいた。寒暑とも同じ形のものであった。

ハバキ 腹腔。

ヒヤメシ 草履。竹皮製。

ハナムスピ 足半草履。

ガズタテ 草履。どのようなのが不明。

ユテ かきは一切かぶらず、手拭いをかぶった。手拭いのうち風呂場

専用のものをユテと言つた。勞働の時も、作業のときも。

前掛け 女はいつもかけていた。労働の時も、作業のときも。フンドシ 婦人の腰巻き。十四、五才から嫁入り前は赤としまつた。嫁入り後はだんだん地味になる。

ユダフカケ 幼児にかけさせた。

コシアゲ・カタアゲ 嫁入り前はすることにきまつていて。

### 三 食 習

柄の実

柄の実は、山へ行けばいくらでも拾えた。秋彼岸ころ落ちるので、これを拾つて干しておき、春彼岸前に食べるが普通であった。うまいもので、今でもオゴリに食べられる。

干した実を杵でつぶして、カルース（唐臼）でついて、搗ぶるいでふるい、木綿製のニギノの袋に入れて、スの上に載せて、小瓶に持つて行く。さらず。二晩もさらしておくと、アツがぬける。これを、水をきつぎ、さらず。米は全然入れなくなる。結構うまいものである。餅にもつすぐ使う。米は完全に入れなくなる。餅にもつすぐ使う。餅のスイントンにする。ここにスイントンは、こねてカマボコ型にしたものを、うすく切つて汁を入れて煮たものをいり。

シダニ

柄の実をシダニといふ。やはり皮をとつて、いくらいもいかない。こぼして、小豆と一緒にして食べた。あんこの代用にもした。

栗

食物としては、栗よりも柄の方がよいといふ。栗は飯の中にカテとし

て入れると、こくがあつてよい。四年にはウリッパをよごしにしたりした。

### 四 住 居

左岡は浜平の高橋勝平氏方の略式の間取図である。四年前に新築し、これが同地の一般的な間取りの由である。ヨコザは主人の席。ヨリツキはちょととしたお客。女衆はキジリやオカツベの方にいるとのことである。

#### ジロバタの作法

むかしはもちろんヒイチ（火打石）でつけた。これはジイサン、バアサンの仕事であつて、嫁がこれをとくべつに管理することはなかつた。夜はジロの火をヤスマタ。ジロにはカギモツツア（かぎ竹）を下げる。これには魚の形の木片を、岩管で結えつけた。カギモツツアは力持ちだからゆすってはいけないとも言ひ、やたら手もふれさせなかつた。正月にはしめもつげた。

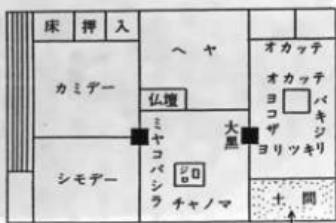
むかしは、一年中火はなるべくやさないようにしておいた。今でも火をたやすことはきらいた」など

という老人もある。今でも三三日中は火を絶やさないのが普通である。

ヒジロ（またはホド）にくべて悪いものは、朝膳夕膳、柚子等。藤は

オテントウ様が、藤に伝わつて登るので燃してはいけない。

御飯は鍋で煮た。鍋をカマ（へつ）にかけて煮る場合もあるし、カギモツツアマに下げる場合もある。



カマはへつたいを指す場合と、釜をさす場合とあり、発音上ほんの僅かの差がある。

正月十四日朝にメーダム（藤玉）をシバヨケだと言つて、ジロの四隅にノメル（埋める）。シバというのは、釜につく小さい虫で、飛んてきて、釜をさして害をする。

釜様には、麦の初穂を供える。御飯の中のノギがのどにささった時、これでさすとされるという。

## 五 拾 遣

木屋のこと

この辺に来たキャンボウには、大滝ビヨウ（埼玉県）飛弾ビヨウなどがあつた。大滝ビヨウは腕がよしなどと言つた。親方をショウヤと言い、大滝からは千鳥ショウヤ、飛弾のものに清水ショウヤがあった。この下にコジョウヤがあり、帳面つけなどをした。サナガシをするキャンボウはまた三種に区分された。

キバナダイニン

先頭に立つて流す人。  
ベダイン

まん中にいて流す人。

キジリダイニン

後について流す人。

うまく流れないところでは、材木をせきとめて流れよくする人

トをつくった。ミトにはテッボウという要所があつて、これを一つ外せば、一齊に、一気に水と材木が流れ出すような仕組になつていて。

むかしは「嫁にシャクシを渡す」などと言つていたが、今はこんなことは聞かれなくなった。

コナベダテ、檀那のいない時にうまいものをつくつて食べること。「オトコダテよりコナベダテ」ということわざもある。

一丁前

ワキキ（まき）ボヤ（たきぎ）どちらも一日二十五把つくるのが一丁

前。女はイザリバタで二日に一反。

雨乞い

ひでの年には、浜平、神行、中ノ沢で相談して、神流川で雨乞いを行なう。神流川の川原に小石を集めて四角形の壇を築き、中央に諏訪神社のお剣を立て、これを村中の人が集まって取りまき、太鼓にあわせて呪詞を唱えつつまわりを巡る。そしてお剣に水をかける。朝から夕刻まで。休んで続行し、雨が降るまで続けるという。

橋原と中越では、中正寺の坊さんが導師となつて、諏訪山の下のヤツ燃して、盛大にやるという。

雨乞い唄

浜平山のお諏訪様

中の沢では山の神

神行に越してはオシガタケ

白井村では飯綱様

（アーメ ターモウヨウニ  
ユドノ……白井）

（アーメ ターメ ユドノ……白井）  
柄原イ越しては天神様（また觀音よ）

神々様が集まつて

三日も四日もお正月

（アーメ ターモウヨウニ  
ユドノ……白井）

こつばのような餅くつて

油のような酒のんで

三日も四日もお正月

（アーメ ターメ ユドノ……白井）

女シも男シもお正月

子供も餅くつて大よろこび

（三岐にて）

虎王御前の伝説

むかし、この部落に、上流から三尺もある大きなわらじが流れ来た。そこで、この上流にも人が住んでいたいと、村人が、神流川を通りて行ってみると、オオカグラとうところに、老人夫妻が住んでいた。これをからむしの皮で、柏の木に縛りつけてしまった。じいさんは刀を、ばあさんは鉢を持っていた。

老夫妻が「殺さないでくれ」と想頭するのをついに殺してしまった。死ぬ時、老人は「この村から、棺とからむしを根絶やしにしてしまう」といつて、

棺たえろ、からむしたえろ

と唱えた。また「村に白い水流してやる」とも言つた。この村に棺もからむしも生えないのは、こうした理由があるのである。

その後村人は、この老人夫妻を神として祭った。これが大神虎玉御前神社である。虎王御前様には、木刀と鉢を供えるのである。私たちが行つた時には、木刀と鉢が供えてあった。またこの神社を、お詣訪様と村人は呼んでいる。

## 方言

ベットウ (蛙)

アカベットウ (赤蛙)

オヒキベットウ (ひき蛙)

エボベットウ (小さいひき蛙)

ベットコシヨ (蛙) 中里村魚尾

ダイサンボウ (蠍牛)

フノンダイロ (なめくじ) 中里村魚尾

ハダカダイサンボウ (なめくじ) 中里村魚尾

本地屋聞書(北沢)

昭和三四四年八月三日 上野村北沢、小椋仲次郎氏(五一才)及びその妻君よりの聞き書き。これはNHK前橋放送の録音テープによつて、再



本地屋の道具一式と自作の木鉢

撮影 都丸十九一



木鉢の底をさらっているところ

撮影 都丸十九一

生撰録。なお本村には、白井の下の坂下にも、小椋こめ氏があつて、その聞き書きは、都丸著「群馬の山村民俗」中に報告されている。この地方一帯は、最後まで、山中の漂泊民であった本地師の活躍した地域であり、その定着過程も明らかにできる地方である。本籍は埼玉県秩父郡両神村。そこには二軒の本地師があつたし、同じ郡の大瀬村には一軒きりなかった。

両神村で小学校六年まで学校に行つた。その間、父母は、山から山へと仕事に歩いていた。自分も学校を終ると、父母に従つて仕事を覚えた。一人前になってから歩いた山は、始め上野村の野菜に来て二年、そして秩父に帰つた。それから新潟県タコシ村に四年ばかりいた。つづいて山形県西置玉郡の山々を永年あちこち渡り歩いて住んだ。戦争前後のことである。戦争がすんでひとところよかつたが、その後金物が出廻つたので、間屋からの注文がぱたりなくなつたので、上野村に引きあげて来て、今では百姓をしながら、営林署の仕事をしている。

おおもとは、滋賀縣愛知郡小椋村から出たと云われてゐる。

むかし、小椋太政大臣実秀卿で盜賊に追わられて、愛知の深山に逃げて住んだ。その時山中で、納の実についているお椀の形をみて、お椎を考えついた。それを輪軸にかけてつくってみた。それを大きくなしたのが木鉢である。だから、同じく小椋太政大臣から別れた小椋の中でもお椀をつくる木鉢である。だら、木鉢屋の方が後である。私の家はお椀をつくる木鉢屋で、女房の家は木鉢屋であった。村では、それぞれ本地屋、木鉢屋の屋号で呼ばれていた。

またオガラの中にも、小椋、小倉、大倉の三つの系統がある。(これら

の区別についての伝承は聞き得なかつた。)

むかしは、本家の御論旨、御免状があつた。これを暗記している人

から聞いたのだが、それによると、山の七合目から上は、無料で伐つて

よいということになつていて、他は穿孔らしいことである。

木地屋の祭っている神社については知らない。また氏子狩りというこ

とも知らない。ただ実家には山の神の掛軸があつた。そこには、木の伐

り株に、斧を持って、立っている神様が描いてあつた。

木鉢つくり

材は柄の木。日本中どこの山にでも、柄のあるところなら出かけた。もちろん金を出して。村有地や個人の山、どういう所でも構わなかった。しまいには菅林署の木を払い下げてもうことが多かつた。山がきまる

と、そこにバラックのような仮小屋を建てて仕事場とした。これは單にコヤと云つた。

柄は大きければ大きいほどよかつた。下から十尺ぐらゐのところで、直径三尺以上あるのがよい。しかし、同じ大きさであつても、アカタ(赤味のある芯部)の少ないほどよい。アカタは乾燥するとはねたがるので、みんな捨ててしまつた。のこぎりを使うとひびが入りたがるというのでマサカリばかりで伐つて倒した。そこで大体の形をつくつてノドリと

いうコヤを持って來た。

造るのは木鉢であつて、大きいのは菓子屋、うどんや、塗屋などの使  
うコネバチ、フクバチなどから、小さいのは豆を入れるコゾロなど、さまざまであつた。

道具はマサキリ(またはヨキ)だけであるが、これにもさまざまあつた。ナガエ 伐採用、野取り用。

ナカキリ 家で使う。仕上げ用。それにも次のように種々あつた。

ミシカエ ハバビロとも云い、木鉢の外を丸めるもの。以下順次小型となる。

ハバウチ シラクチ ササガンナ ハタガケ フボウチ

ソトガケ 外を丸くするもの。

メントリ 様の角をとるもの。

野取りまでを主として男が、仕上げは主として女がすることに決まつていてから、道具もナカキリ以下女が主として使つた。仕上つたものは、関西方面に問屋があつて、そこへ出した。戦後一時需要が多かつたが、七八年前、わすか半年ばかりの間に、急に注文が絶えてしまった。もっとと継続してゆくつもりだったが、その時、転業した。その後またほつほつ注文があつたが、もうやろうとは思わなかつた。

休日、その他

一年のうちで休む日は、四月七、八、九の三日間、十一月の七、八、九の三日間であった。ふだん使つている道具を休め、道具の神の祭りであると云つてゐた。神棚はないから、コヤの中の適当なところに、掛け軸を下げる、一品か二品供え、お神酒も上げた。とくべつに仲間を招くこともしなかつた。

昔は普通の人とは縁組みをしなかった。

一人前になるには八年かかったと云うが、代々親たちに住込まれて来たのですぐ仕事はできた。

### 椎夫聞書（三岐）

昭和三四四年八月三日、上野村三岐分校において、同地の飯野重太郎（五二才）、笛本春吉（六七才）両氏よりの聞き書き。話は主として飯野氏の談話である。

一人前になるまで



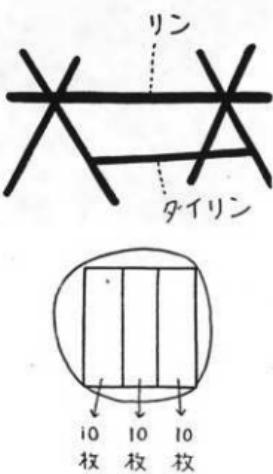
北沢への道（この様子一本に頼っている）

撮影 部九十九

飯野氏は十二才の年より木挽きになつた。親も木挽きだつたし、祖父もそう。曾祖父はもと武士で、鳥羽伏見の戦いに加わって、負けたので、信州に逃れ、北甘樂のチハラに来、飯野家に入り、スイフロムコに入った。それ以前は神谷姓であった。その子、すなわち祖父が木挽きに弟子入りして木挽きになつたのである。

本挽きとツマ（袖）は、仕事は違うが、同じ人間が、両方覚えなければならぬ。袖にも伐採とハツリ袖（または

削り袖とも云う）があり、伐採が一人前にできるようになると、ヒロバを持つて、枕木などを伐るようになる。そして木を挽く修業もするようになる。一人前になるには普通五年はかかる。飯野氏は二十一年まで親方に仕えたが、このくらいが普通である。  
弟子入りの時には、親方、弟子の杯をする。途中で仕事に耐えられなかつたりして、逃げ出しそうな場合もあるが、その時は、杯を起したのも同じであるので、木挽き仲間で仕事することはできなかつた。もし見付かると道具は取り上げられた。  
親方の弟子に対する態度はきびしかつた。第一に礼儀作法。箸の上げ下げから、口のきき方乃至するまで「一々文句を云われる。いくら寒くとも、仕事中は腹掛け一丁ぐらへ（もつとも親方もそうであつたが）、「寒い」とでも云おうもんなら「寒いで（あ、ホタ（丸太）にでもぶつける）などと云われるので、火にあたつたことはなかつた。次に仕事の点でも、一肴かし本は刃をこごめる。固い本はチヨンをかける（意味不明）」とか、磨ぐ時は、大きな角は三分づき、七分づき、など、「一々この通りにやらないと、ひどい叱責がとんだ」。  
このようにして、いよいよ一人前になると、一年間のお礼奉公をして、親方から、道具一切をもらつて職人となることができた。  
サイギョウブチ（西行打）をして働いた。西行打ちは一種の武者修業みたいなもので、腰のサシヤを腰にさし、やすりを二丁持つて歩いた。生活の質を得ると共に職人としての腕を磨くものである。だからこれにも厳格な作法と慣習があつた。  
訪ねて行った親方のリンバ（仕事場）の、ヒキヌカ（おがくす）が散らばつてゐるところへ着くと、履物をぬいで、四つんばいになつて進む。親方にはモトリソを介してうけつけを頼む。最初の挨拶は、オヒカエナサンシ、ウチノオヤカタサンデゴザンスカ、オヤカタサン、



と口上のあと、自分の生國、親方の名を名乗る。それからすぐ仕事にかかる。この様に仕事は正して行けば、たとえ仕事はなくともラジセンとして二日日当ぐらは与えられる。その上、名の知れた親方の弟子ならばハバもきき、酒の一本も余計に呑みされたものだと云う。さて西行の仕事には、その腕を試すオキナタマボタ（お客様）があつがわれた。お客様は、三四年も干した松の固い木で、これをひきこなすことは容易なことではない。だからこのお客様がひきおせないで、夜逃げをしてしまった西行もある。しかし安中のジンソウと云う人は、三八枚もひいたということである。普通の材木で普通の職人が三〇枚をもつて一人前としているのに、六尺板。ついでに、木挽きのリンバは次のとくである。リンまたはダイリン

に木を立てかけて、これを板に割って行くのである。先ず大割りにして、さらにこれを細板にする。例えば三〇枚となる時には図のようにして挽くのである。

木挽き歌に西行打ちの歌が多いのは、後に掲げる通りである。

怪異等  
山仕事をしては悪い日がある。この谷では毎月十七日であるが、越後

では十二日であった。その日は仕事を休む。十七日は山の神の日である。山に入つても、伐つては悪い木がある。この地方では「沢の窓木、峯の三本木」という。窓木は二段に分れた木がまた一しょになつて、窓みたいになっている木、三本木は一所から三本に発生している木である。また幹から直角に枝が出ていてカモイギ、枝張りが水平に近くなつて、天狗のコシカケ木も禁忌になつていて、

飯野氏が体験した山の怪異には次のようなものがある。

(一) タルウエで、十一月ごろ枕木を削つていたところが、えらい木を伐る音がした。そのうちにバターリ倒れ、つづいて岩がまくれる音がガラガラと聞えてきて、とても恐しかつた。山にいるところのよなことがよくある。

(二) ミミズタの谷で、弟や四五人の同僚と一緒に、夕方キンマチを作つていて、弟が突然「今ごろ木を伐つてゐる者がある」と云う。耳をすますと、よく切れる刃物でサクン、サクン、伐つてゐる。そのうちみんなも聞えるようになつた。「こりやあ、たしへんだ」と云うことになつて、酒を買って呑んだ。二升ほど呑んでいるうちに音は止んだ。(三) テングノオノウといふことがよくある。季節では秋がいちばん多い。笛、太鼓の音が、山の中でもとんでもきやかに聞える。昼までもよくあり。とても仕事どころではない。きびが悪くて、音の方向に行つても、音はだんだん遠のき、何もあつた風ではない。

(四) 十一才ぐらいの時、北沢の方から炭を背負つて下つて来た。あたりはもうす暗かった。道陸神の所まで来ると、ギャアギャアと聞えて、大入道が現われた。まくろい着物を着て胸に毛が一はい生えている。その毛をなでて、大入道に、同行の田中さんが石を投げつけたら、消え去つた。もう大丈夫と云うので、逃げて來たが、あんなに恐しかつたことはなかつた。

(五) 父が若いころ、もう新婚にはなかつたが、あまり重きをおかないころであった。山に行き、大きな木を玉ぎつて倒した。その時、下には炭

焼きじいさんの小屋があるので、何とかして煙の方に倒そらとしたが、いつもの調子に行かず、ついにじいさんの小屋を倒し、じいさんにけがをさせてしまった。その日は一月の十七日、山の神の日だつた。

山へ入らない日は、十七日のほか、アカ（赤ん坊）が出来て一週間のチブタ、死人のあつてひと七日のシヅクもそうである。

パンダイ餅など

パンダイ餅はウルゴメをつく。板の上にふかした米を載せ、それをキ

キ——と云つても、折れ曲った棒状の——で、向いあつてつき、山の神

に上げて食べる。

ゴハイモチはこれより簡単で、ボタモチをつくように鍋の中でついて、中にさし、これに砂糖味噌やナメリミソみたいなものをぬつて、火にあぶつて食べる。これは、必ず山小屋で行うべきもので、大工建ての家でしてはいけない。

年に一回の大師講には、親方が集まつて賃銀その他仲間のことをきめた。

だから親方相互間はよく知りあつていた。

山小屋の中でセルは忌み言葉になつてゐる。

○木挽きや山家の山にも住めど

○木の実椎の実食べやせぬ

○ことしはこうでも、また来年は

○西行打ち打ちミトの浜

○ことしはこうでも、また来年は

○ソンリョウブトンで柏餅

(柏餅は一けんのふとんにくるまつて寝るから。)

○木挽きやすれども、気は侍だ  
された女子には口はくれぬ

○きれてしまえばばら扇子  
風の頬りはないわたし

○元稀めは大黒だよ、お客様は恵比寿

まわるサイギヨさんが福の神

○どんど、どんどとなる瀬はどこだ

○それは深山の瀬の音

○西行打つならわたしもつれて

つれて行くから髪結いなおせ

○山は高山（陰）だし、木は大木だ

万事頼むぞ 山の神

○恵比寿大黒ばかりが神ではないぞ

おらもべへ（ベッヂ）すりや紙でふく

○日光街道の並木の下で

あらばちわられて千鳥足

## 上野村南西部の民俗（二）

池田秀夫

### 白井



白井部落 撮影

上野村役場から約八秆余ると、途中天然記念物に指定されている丸甲石の産地を経て、やがて右手に甘楽郡牧村の磐戸に通する坂の沢林道への分岐点になる。そこを真直ぐ大きくなり橋があり、それを渡って坂下部落に入る。これからが上山郷を越へ行きつまつた地形をいやが上にも強めている所である。この坂下から十石峠街道を上って、峠まで約十秆の白井部落になる。ここは樺原郵便局もあって、この奥の北の沢、神行、三岐、中の沢、浜平、本谷等の部落で、その入口になつていて、この奥の北の沢、神行、三岐、中の沢、浜平、本谷等の部落である。

の樺原は古尔良村と称して、山中領の最西端、上山郷といつた上野村の最も奥の部落である。

ここ神流川の奥、信州との国境には、白井関所が寛永八年大河原金兵衛所轄のとき設置されて明治四年に廃止されたのであるが、水田は殆どなく、十石峠を越えて南佐久郡の米穀地帯から運ばれる交易

様の石祠があり、今では一月二十五日に祭をしているが、書ては米穀の他紙、こんにやくなとの取引が路上で盛に行われたことを物語っている。

現在白井部落は三十四世帯で三十戸、これが上組、中組、下組に別れ夫々第一班、第二班、第三班、坂下部落が十四戸で第四班、サガリが十六戸で第五班、ヒカゲ戸が十戸で第六班とこの上野村第十区は六ヶ班に分かれている。この白井部落は樺原でも最も古いといわれ、明治以前は約六十戸あったという。坂下部落は明治三十七年にでき、吉本の事業関係は昭和四年頃、営林署は昭和九年頃まで、近代的な風情がこの山村には強く入ってきたと考えられる。

尚こ樺原には都丸調査員に同行し、白井では次の諸氏にお世話をなった。黒沢多仲、堀川房吉、藤田保太郎、藤田源三郎、黒沢信治、黒沢清吉氏、又上野村立西小学校長高橋房之氏と第十区々長黒沢武尚氏には最後まで絶大なお世話を受け、多大の助言を受けたことを厚く御礼申し上げる次第である。

嘗ての五人組時代のものを旧姓といい五戸を標準にして一つの組を構成していたが、今は新組といつていて、然し今でも分家した場合に組を離れると、旧の組と新しい組の両方にオッキアイをする。これらの組には明治初年頃までクビフリというのがいた。これは本来は旧家の人で、家柄、財産にかかわりなくものをよく知っていたが、やはり造者で活動的な年輩の人であった。いわば公職をもつた所謂えらいボスのような人で、読み書きも人並以上にできる人であった。そして村のもめごと、新らしく何かやろうということ、他部落とのものめごとなどの場合中心とな中に寛政十三年銘のある市神

で、自分の部落の人に対するいわいが、他部落の人かいう言葉として、政治的な人、カントーのある人などを、あの村の某はタビツリだと誰しもが認めて、いっているのである。

現在白井部落全体をまとめる人は当番ごちようで、一年交代につとめこれが村のタビツリ役をしている。

坂下には明治十五年から二十年頃まで宿屋が三戸、酒造屋が三戸、穀屋が五戸あった。そして白井にも一日百頭の馬が通り、午前十時頃になると通りは通れない程の中継所であった。米は信州から十石峠を越えて運ばれるのだが、馬に七斗積み譲原まで運んだ（馬の俵の中から八升づつ計一斗六升、これをカチダワラといい、これを背負わねば馬が転んで誰も手伝わなかった）。その他物資はここで中継して、信州は大日向まで、秋父は小鹿野の手前の三山まで運んだものである。

酒は信州から明治十五年頃より後来た。それまでは造酒家があった。その他醤、ワラジ、草履、味噌、塩、衣類、凍豆腐等は明治の終り頃まで来た。

白井から信州に出たものは、木炭、下駄、木鉢、紙、竹を割って六尺の樽にかけるようにしたタガ、藁草はユキワリ草の根（ロート）という明治末年が最も盛であった。ゲンノショウコなどで今はキワダを多く出している。

馬方には約四年前まで二三人一緒に十頭連れて行つた。ソリ（ここでは村に入る峠）まで来ると、村では「馬の湯でも沸かせ」といつて準備して迎えに出たものである。尚この地方で馬方の唄つたのは次のようにものであった。

一、民 調

馬十方 碓水峠で坂本見れば 女郎が化粧して客待ちる ホイホイ

二、農耕

三月 雪がとけ始まる。キウリ、ナタマメ、インゲン、馬鈴薯、ウグイスナ、センザイのトウモロコシなどを、彼岸から月末にかけて蒔く。

四月 煙、麦の手入れ、桑の手入れ（中耕、ウメイをする。）

五月 麦の手入れ、コンニャクの植込み、大豆蒔き。

六月 小豆をツグメンバ、ヤマカの花が咲いたから蒔く。一月頃モロコシを麦の間に蒔くがこれをサクライレともいう。麦入れは六月十五日頃で、カツラの葉が二つに割れる頃麦の色をみて行う。

七月 麦こなし、麦ハデにかける。養蚕の時期だからハデでかわかず、従つてこなしてから乾かさなければいけない。

その他コンニャクの除草、桑の手入れ。

八月 九月も七月と殆んど同様である。蚕は年二回で春蚕は五月二十五日頃、秋蚕（チユウコ）は八月五日頃始めてをする。糞、甘藷はコンニャクにとられて殆んど作らない。陸稻は場所もないしよくできないの

## 追分節

娘しまだにや 蝶々がとまる  
とまる筈だよ 花じやもの

泣いてくれるな なかいでさえも  
きれるかんなも きれかねる

信州信濃の あのそばよりも  
かわいいあなたの そばがよい  
うわき山吹 さくあだ花は  
花はよけれど 実はもたぬ

村では郵便局員、教員のはかは皆百姓になつた。  
一月 自家用の薪作り、炭焼、こんにゃくのカリシキ草の取込み。  
二月 君とネユキで仕事は出来ない。

三月 雪がとけ始まる。キウリ、ナタマメ、インゲン、馬鈴薯、ウグ

イスナ、センザイのトウモロコシなどを、彼岸から月末にかけて蒔く。

彼岸の中日にウグイスナを蒔くと虫がつかないという。

五月 雪がとけ始まる。キウリ、ナタマメ、インゲン、馬鈴薯、ウグ

イスナ、センザイのトウモロコシなどを、彼岸から月末にかけて蒔く。

六月 小豆をツグメンバ、ヤマカの花が咲いたから蒔く。一

月頃モロコシを麦の間に蒔くがこれをサクライレともいう。麦入れは六月

十五日頃で、カツラの葉が二つに割れる頃麦の色をみて行う。

七月 麦こなし、麦ハデにかける。養蚕の時期だからハデでかわかず、

従つてこなしてから乾かさなければいけない。

その他コンニャクの除草、桑の手入れ。

八月 九月も七月と殆んど同様である。蚕は年二回で春蚕は五月二十

五日頃、秋蚕（チユウコ）は八月五日頃始めてをする。糞、甘藷はコン

ニャクにとられて殆んど作らない。陸稻は場所もないしよくできないの

で作らない。作らぬ方がとくであるといふ。

九月 草刈り、カリシキは月末から十月初めにかけて行い、動物にくわせるのによいとされている。硬くなる前ではくさる。個人で草刈場をもっているのはヒカサバといつて。中旬に妻蒔きをやり、下旬から十一月にかけてコンニャク掘りをする。

十一月 初旬にコンニャク掘り、ヒカゲムギはどうしても三日までに薪かねばならないといふ。

十二月 前月から今月はコンニャクの荒粉作り、自家用野菜の収穫で一杯である。

### 三、労 勤

エーツコ（協同作業）

組むのは近所、親戚関係の気の合った人々で行う。これに対してもエーツコをせねばならない。屋根替のエーツコは屋根替で返すことになつていて、マガエリともいふ。ショイコト、ウナイコト、取込み、麦コナシは今でもやつていて、モヤイ。

一人でもできる仕事を早くせねばならぬ場合の共同作業。これは必ず同量返さねばならぬといふのではなく、一時間やつても平日やつてもよい。モヤツテヤルベーといふ。

オテンマ（努力奉仕）

道ぶしん、八月一日、村道は九月十日、四月十日

その他学校の仕事、嵐のあと修理工事等

十五町歩、今はい。

### 四、植 物・禁 忌

堀川氏

モロコシ

三岐の堀川氏 キビ、神行の本家でも作らぬ

北沢の久保田氏 四足のものをたべない

五月の麦の穂が出て最初の虎の日にタワをおさめる。タワを使うと嵐がくるといふ。

土用があけて四日目、九日目にはシナクナといつて葉大根の種を蒔かない。種が絶えるといふ。

旧の四月はシニゴボーといってゴボーは薪かない。

五月十二日ハゲンの日にはネギ煙に入らない。ハゲンという僧侶がネギ煙でこの日に死んだから。

七夕の日ウリ煙に行つてはならない。

### 五、狩 翳

獵は夜交代で獵、大鼓をたたいて番をし、秋の作物をたべるのを追つたが、捕えるのにはオツツ（主として、猪をとるため小屋を作りエサを入れておくワナ）を二軒作つて夜にカネ、太鼓をたたいて追いついたものである。十五年前から猪もいなくなつた。国有林が猪の遊び場だったのであるが。

狐は使所のウジをたべにきた。四、五年前までいたのである。狐は捕えたら腹を裂くなどいわれている。切ると筋が半値になるから。

ムジナはこちらが弱くでると強くなるといふ。

狼（山犬）は子供の頃、鳴声はきいたがみたことはない。

### 六、講

三峯講

山犬を両神様から盗難予防のため借りてくる。又八日見様からオイスサマを借りてくるときついてくるといふ。この両神講と八日見講は、三案講に括されてい。

峰講

碓氷峠の熊野神社の峠さんからカラスを借りてくる。これは烟の虫除けで、村の代表者（十人一講、二人づつで講に当った人）が峠に行く。これを代参といふ。

#### 権名謡

畠が當るよう、又畠が荒れないようにと魔除けでもある。

その他二三年前まで一の宮から畠のお札、戸隱様からツバガユの結果を送ってきたり、碓氷郡東横野村宮の宮から畠をたべるヨモノ（ねずみ）除けの札などが送られてきた。

#### 七、神 祭

##### オシヨウジン

コブガハラ様を祀る。十二月十二日夜番を始め、三月十二日夜番が終る。

##### 虎の日ショーンジン（虎祭）

五月末の虎の日、村を三班に分けてのお祭りだが、この日夜集つて米三合づつ出し合ひ、オシヨウジン酒をのむ。残った米は宿の謝礼となる。最近二三年タワを使って祭をするようになった。

##### 山の神様

##### 毎月の十七日

##### ロクヤサマ

毎月二十六日 お月様の上るまで御馳走をしてたべる。女だけの祭。

##### 戦争中に行つた。

##### サンヤサマ

毎月二十三日で、今ではロクヤサマかサンヤサマ何れかを行つてゐる。十日夜

旧の十月十日、菜、大根の年取りという。旧九月二十九日のオクンチ（ハックンチ）から十日たつと十日夜（ナカノクンチ）、それから十日たつてお恵比須講（シマイのオクンチ）となる。最後の二十九日を〇〇〇〇〇〇

〇〇タンチといふ。二十九日のオクンチは川和と白井のみで、他部落は十九日がオクンチである。

#### お七夜

春秋彼岸の一週間間觀音堂に集り、絵の上手な人が燈籠を作り、組を決め茶番をして、お参りに来た人に飲ませる。これが朝から夕方まで行われ、お参りに来る人は燈明料をあける。又興友会（註1）の役員が出て、オサゴで最終日（アキタチ）の夜ダンゴを作つて皆でたべる。

（註1）明治の末から小学校を卒業すると入つた。入つてみるとオチニマにも一人前とみられた。大体十五才から四十才までの男で終ると記念品を贈つた。これは青年会とは別で、青年会は十五才から二十五才まで、兵隊

になると終つたものである。その他興友会は団体作業として災害時の出動、村に不審な人が来たときの巡視などをやつたが、終戦でなくなつた。

一月二日のウタイゾメの日に、その年に御祝儀のあった家の、入会する人が酒一升買つてもって行きお祝をしたが、しまいには酒に代つて金となつた。

#### 道祖神

松飾りを十四日に外し、ドンドン焼をするとき、村の興友会の人が出て神社の松の木を切つてオキンマラを作る。これを村中引廻して十四日夜車を二つつけ、長さ二米四五十匁、径六十匁位のもので、真中に穴を開けオシメを立てたもので、明治の終り頃までは、それからドンドン焼したものである。昔は道祖神祠の上で焼いたが、今は村下の井戸の下にもつて行き村一同集つて焼いている。それは小屋を作り（背はハネ竹も入れた）、松、麦藁を入れ、（小屋の中に入れるのをアンコといふ）青年が火をつけた。オツカドでワキザシを作つたのを持って行き火の中に入れて先をこがしてお互に交換した。この交換方法は「どうだ、おらがよかんべ、いくらぶつ」お前高いからおらがいいぞ。おれがぶつ〇〇万両」「よし」といつて話し合いが成立すると交換する。ワキザシには火をつけ

て家に持帰り、その火でタバコを吸うと風邪をひかないといい、火をイロリの火と一緒にしてはいけないという。消したのを使所を持って行つて立てる家と（便所には刀を持つて行かぬからいざ）というとき勘定差しを使うといふ。門口に置く家とある。又このドンド焼のときマユダマを交換する。

## 八、葬 制

### 死の前兆

鳥が川で水を浴びるときは、上に何か不幸があるかなあという。又山仕事に行くとき鳥の鳴声が悪いから注意しろと家人がいう。お勝手の障子があいたと思ったのに何もない、その時死人が来たのだろうともいいう。山の小鳥が家の飛込んだときなど、人の死の知らせとか、おちいが鳥になつて来たのだろうともいいうが、死人のある家の人々には鳥の鳴声は聞えないといつている。

二十五年前お産で死んだとき屋根に上つて、身内の人人が呼び返したことがあつた。

### 葬儀

危篤のとき枕許に皆が集り、息を引取るのをみて死を確認すると村の当番伍長に「某が今晚死んだ、明日何時に仁義に来てもらいたい」と告げる。普通死人のあつたときは同一班の人人が主として葬儀を行ひ、詳細は世話役に委せる。

死ぬとニツカシムをするのですが、そのとき寝床の所で薬のカゴを、女は皮を上向きに男は下向きにかぶせて、その四隅を石臼を縫にして、女の場合は下で男の場合は上でつく。そして死体を棺に入れ、棺の下に米俵を敷きそれから床の間に置く。ニツカシムのあと浴衣を着て、カズカラを一二把持つてハダシで川に行き、カズカラを焼き手足身体を洗つてくる。又このとき死人の着ていたものフットン皮や綿も川で洗う。そして二人で棒にかけて持帰り、洗つたものは陽にあててはならぬとされ、蔵干しにする。

ことになっている。

仁義（おくやみ）は普通女人に先に来てもらい届けてから男の人に来てもらう。そのときの挨拶は「長い間お世話をすつたが、かいかなくおしまいになります、おちからおとしでござんす」これに対して家人は「色々お世話をしますがよろしくお願ひします」という。村中集つたところで、組以外の深く交際している人々は抜いてもらいたいと施主はいい、それ以外の人は穴振りとツゲに出でもらう。

ツゲはお念仏道具の箱にある点数表の占数の少ない人の順に出でもらう。点数は上の村中は一点、村外は二点というようになつていて。但しこのとき近親の人は抜ける。ツゲに行くときワラジ銭（昔は一銭、今は五十円、百円の人もある）をもらい、キナコに塩の入ったのをついた振り飯二ヶもつて出る。一所に二人で行くことは他所と同様で、行つた先に何日何時に出棺と伝える。ツゲがくるとキヨメの酒を出すのが通例で、行つてきた報告をして仕事は終る。

残りの人で穴振りをするのだが、葬儀当日朝村中を呼んで一飯たべたそのあとでかけた。このときには仁義をして鏡頭などもらつてきた。そして握る所の真中にジワレ鉢といつて一鉢置きそれから握る。握っているところに「穴振り酒」を一升サカナと共に持つて行き、飲みながら握つた。握る道具はその家の道具を使用するが、一週間位してから一般には使用することになつている。

葬儀が始まり僧侶がお説をあけている間にデワ（重箱に白飯を入れたもの）を会葬者の間に廻してはさむ。又竹に白い紙を巻いて首にはさむ（金剛杖といふ）。このとき女には麻を細く裂いて渡しこれで髪の毛を結ぶ。タビといつて足袋の型の白紙を一枚づつ渡しこれは履物と一緒におく。

又この間に「イロヌギをいただきたい」といって廻り、金銭を集めめる。これは会葬者が自分の名前を紙に書いて、その中に十円包んで出すのである。この金銭は全部僧侶に渡すことになつていて。

詫びが終って野送りとなる。この時持参するものは日當たべていたものハコゼン一切、水、とがない米を茶碗に一杯そのまま煮て（表庭に株で三本足を立てて鍋をつるし棺を作った材木の屑で煮る）茶碗に入れ、箸二本を立てるもの。飯盛も棺を作った残りの板で年寄衆の人が作る。

米を石臼で一合ひして作ったマクラダンゴを表庭でゆでて、棺を作った板で重箱を作つて入れたもの等。棺をかつぐ人は穴掘りをした人々で、従つて近親者はかつがない。穴の中に棺を北向きに入れ、刃物で施主が棺のひもを切り、重石を入れて土をかける。このとき金剛杖、シカバナ等を入れる。タビは棺の中に入れる。このあと近親者は「お願いします」と参列の人たち、参列者は皆一揃みづつ土をかける。

野送りして帰ると縁側の上り口に、半紙に白の紙を書いてはりつけておき、その正面に水の入つてしないタライを置き、足を洗う真似をし、人口に居た人が塙を撒いて潔め、次いで座敷につく。次いで僧侶が詫びを語り、三日のさしきをするのが、終ると「お客様おきよめを差し上げます」といって酒を出す。この酒は二度はつながない。このとき遺物（カタニ）を渡し終つて念仏となる。

尚親が死ぬと子供達は全部スケイの金錢を出す。金額は仲人も立会い葬しに応じていくらと決めるのだが、それは野送りをすませて帰つて三日のさしきを和尚が行つてから返し、位牌、遺物を渡すことになる。

念仏は施主が「念仏をあげてもらいたい」というと、組内の念仏で生きる女衆に集つてもらう。施主によつて茶葉の他ボタモチを出すが、昔は念仏の途中小豆のお粥を出したものである。施主が「もう結構ですか」とおしまひなすつて」というと終る。

#### ダブルライ

葬式の翌日祭壇を下ることで、昔は一週間後であったのでナノカともい、概ねお屋によんでたべてもらうことであった。七日間は昼休みに女人の人々に語つてもらつた。このとき葬式当日庭先に、家に向けて立

てたモンベヤ（僧侶が金剛杖、旗などのかきものをするとき仏の戒名を書いた高さ約一米、幅約十五厘米の、上に広く下に細い位牌で、女の場合は台になる竹の皮を裏（内）男の場合は皮を表（外）にして、坑に結つけ坑四本の下に米俵を敷いて立てる。）を墓場にもつていく。

#### 忌日

一七日、二七日、三七日と三十五日に四十九日をしてしまい、偶数のアンコモチを組中に配る。もらった人は墓に詰る。この餅をつく白の音をきいて仏様は寺に行くのであって、それまでは仏様は屋根裏に居るという。この四十九日の済むまで神様詣りはしない。又一年に二度も葬式のあった場合は、この餅をつくキキの小さいのを作つて埋める。

#### アラボン 九月十三日

アラボンの家は明るくとも提灯をもつて、始る時明しをもとしている。アラボンの家に行くときは、「こんばんわ、ごふそくのお盆様でおさびしゆうござんさん」「こんばんわ、にいほんさまでおさびしゆうござんす」と挨拶する。組内の人は新盆の家はさびしきからツレに行くといってウドンを持って行き、施主の方は酒、さかなを出す。迎え火は門口で燃す。位牌の新しいのを前の座敷に出し、墓にも寺にも行かない。

#### 九、雨乞

男でも女でも一戸一人出る。神流川の瀬の中に一米位の石を積み上げ、四角に葉のついたままの竹を立てて、その間にシメを張り、石の上に浜平のお説教様の剣を借りてきて立て、太鼓、钲をつるし「ドンドンジャニヤンドンジャニヤン」とたたきつつ「雨降らして下されば、三日も四日も正月で、村の子供が嬉しくなる。雨ためゆーど」と歌いながら円陣を作つて廻り、オケンに水をかけたり、丘に上つたりして雨が降るまでやる。降るとお札（二百円位）を包んで御剣を返す。



中　の　沢  
夫　秀　部　田　沢　池

白井部落からゆるやかな  
傾斜の道を約四軒のぼると三

岐部落に入り、そこから常林

署のトロッコ林道を、通称中  
の沢川に沿って約二軒上って

中の沢部落に入る。ここは昔

川中島の戦のあと武田勢の一  
部が来て落着いて生れた部落

と伝えられ、約百三十年前に  
は三十八戸あつたといわれて

いるが、現在は十二戸（仲沢  
氏五、相馬氏三、原、松坂、神戸、佐藤氏各一）で構成されており、木  
材、木炭、薪などによる林業を主として営み、田は全然なく煙が全部

で一町五反、ここに大麦、こんにゃく、大小豆を栽培して生活している。

この部落も長いランプ生活を経て、八年にわたる運動の結果四年前に  
電燈がともされ、今では自動車、次で本年中には電話も入るというよう  
にここ数年間の発展は驚くべきものがあった。従ってそれまでは他村か  
ら嫁に入る人も殆んどなく、部落内での結婚が多かつたが、これからは  
山に咲く高山植物が生花用として次第に業者の手により移出されるよう  
に、他村との美しい交流が活潑となることを期待する明るい表情になっ  
ているのである。

### 一、婚　姻

子供が結婚適令期になると、親が何家の娘というように先ず目をつけ  
る。そのとき特にチスジを考えて、家柄次で財産を考慮して選び、ナリ  
ンボー、〇〇〇〇〇〇〇〇、オサキモチ等は避ける。本人同志の選択や恋

愛は認められず、ヨベイなどは不良の悪戯であるとされている。若しか  
くれて交際し妊娠でもすれば仕方ないとするが、そのときはモライオヤ  
を立て、それにやるとしてから一括になる。これは所謂クツツキであり、  
娘が行つたのはオシイレヨメゴという。これも三年乃至五年たつ  
ともとにかくえつて普通の場合と同様に考えられる。

尚結婚相手を得るためにイモリのクロヤキをせんじてのむと、思つて  
いる人と一緒になれるといい、これをホレグスリといい、娘の頭にふり  
かけるとその娘がほれるともいう。

以前は近親結婚が多かつたが今は嫌われており、部落外婚も概ね一里  
以内が多い。こうした場合普通先ず仲人が立つまでのハシワタシ即ち世  
話人、下相談する人、タイコブチをたのむことから始まるのだが、それ  
も親戚の人が多い。その人が仲人として適當な人でない場合は他人に仲  
人を頼む。仲人はモライナカダチ、クレナカダチと双方に立ち、どちら  
かといふとクレナカダチを尊重するが、問題が起きたと両仲人が話をす  
る。

正式の婚約は、質う方が祝酒を買って仲人が持つてクレガタの仲人の  
所に行き、一緒にクレガタの家に行く。これをイッショウザケ又は博入  
れといふが、祝酒の量は一升と限らず、概ね二升位クレガタに損のない  
ようにする。この場合モライナカダチの父親と仲人のみが行き——クレガタは  
一族、組内の者を集めておいてお祝をする。博入ればもらうことを契約  
したのであって、そこで結納、式の日取など一切を決めるのである。

式の当日先ずモライカタは朝ホンセンで一座敷する。そしてクレガタ  
に行く客（仲人とチゲンモラウ人の親、兄弟、近親の重要ボストに  
ある人）はクレガタの仲人の家にお土産（モラウ人普通の場合は婿の手  
土産、手拭の上に千円（酒二升分位）程度）をもって行き、クレガタの  
仲人はタレカタに迎えていく。カミヂーから入り、最初にモライカタが  
もらひに来たと挨拶して紹介する。これをオチカヅキといふ。次でクレ  
ガタが親、兄弟を紹介して、持つて行った手土産、祝の品物（目録のつ

ているもの）を渡し、次いで一座敷が始まりますから、皆様座におつきなすって」とい。尚モライカタの手土産は、行つた人々の名前を書いて仲人とクレカタに渡す。もちろん人の手土産は半分かえってくる。

着席すると瞬間に第一番にお吸物（ハヨニツ、豆腐、ネギ等が入つて）のみが出る。ザハイの人が「相末なおつゆでござりますがお手をおかけになすつて」とい、汁だけ吸つて中味をふたにのせ、おわんを横紙でふくと酒が出る。このとき「これいしゆで申し上げるべきですが、この土地の習慣として、オセチャイ（わんとふた）でおあかり願います」とい、オショウバン（これになるのは殆んどクビフリである）が「私がおかんをうかがいまして、某さん（先方の仲人）に申し上げます。（酒を差し上げること）から」と云い、次で「どうぞ左右にお聞きなすつて」と云い、仲人、左右の順に酒をついで廻る。女性は益ついでもらうが男はそのことは許されない。こうして座にある人全部に一まわりまわつて一人といふが、それが三こん、五こん、七こんと寄数回行われる。二こん廻ると嫁を座敷に出すようにクレカタの仲人に要求し、仲人の奥さへ連れてくる。そして仲人にも嫁にも二こん往ぐ。普通は三こんが廻るとモライテが料理番の人にお祝を出す。すると「大へんにお土産をちよだしました」とお勝手から一こん出る。一こん全部注ぎ終るに一時間位かかるから從つてこの間全部で三、四時間かかり、オシャタは最少限二人で普通四人、六人。一こん廻るたびにサカナが次々と新らしく出る。丁寧なのは汁も出る。この間、年輩の人なら馬子明、若い人は現在の歌をうたい、謡曲などは出ない。

引物が出ると帰るわけであるが、嫁が家を出るときは先祖にお線香を立て、両親、組の人に挨拶して出る。これからモライカタの家に行くのである。

嫁の一行がモライカタの家近くに来ると街道まで出て部落の入口、地形の関係で坂となつてゐるが、ここまで出る。ゴザ、祝樽、みつがさね、さかなをもつて、代表三、五人（オショウバンになる人）がそこにゴザ

を敷きトリムスピをする。これをサカム力工という。正式にはここで相互に紹介して三三九度をするのであるが、最近はクレカタの仲人が「略式にお願いします」という。そこからモライカタの家に行き、嫁は一人で勝手口に向いて、ここで姑になる人に手をとつてもらい、トボを一足またいで姑が半分のんお茶をもらつて飲み、姑は手をとつてオクノデーに入る。ここで嫁は送つてきたオイチゲンの人と一緒になる。次でクレカタの家で行つたと同様のことをするわけである。即ち嫁の手土産（婚の手土産の半分）を仲人がモライカタの仲人に渡し、モライカタの「仲人のところに行くべきであるがこの座敷を借りて略さしていただきたい」とい、宴が始まる。この嫁のくる座敷がホンザであるが、座敷がとりこんでいる場合（モライカタの近親が多くて入れない場合など）仲人の家を借りる。これをチユウヤドというが、こうしたこともある。

さてサカムカエで略したのでこのホンザで三三九度をやるわけだが、普通はやらないで「とりむすびをやらせてもらいます」と口上を述べるのみである。このモライカタの座敷で三こん廻つたところで嫁をかりて、髪をホンダ（丸まげ）に直し、着物も祝着を脱いで着かえる。

尚ホンザのとき嫁がくると若衆がノゾツコミに来る。それは指につばをつけて障子に穴を開けるのであり、モライカタはその数の多いのを喜ぶ。これに對して酒を出して飲ませた。これをノゾツコミザケという。一面ではワカイシリタツにボウズリタツといつて両者の理窟は通してやつたのである。

昔は仲人は婿と嫁が寝るのを見届けてから帰るといつたものだが、今は床にも案内しない。

翌日組合の女人を集めて力ネツケをする。終つて嫁がオシャタするのだが、普通は前日の余り物を利用して御馳走し、嫁、婿でオシャタする。三日或いは五日又は七日目に里帰りをして、夫婦で嫁の家に行き必ず一泊する。嫁の家では赤飯を煮て酒でお祝をする。そしてこのときトモ



(8) カワボシ 流れの二方のうち一つを止めて乾してとる。【禁】  
(9) ブタイ 潟るとき、土川に向ってこれで獲る。

スイメンを用い、ヤスで突く。

(10) フリヤマ、イワナを釣る。エサはカワムシ（カワムシといつてもカメノコ、セムシ、カジカムシ、スナムシなどがある）。濁りが澄むときはダメズ、トウゴロウ（イタドリの根についている）。ハチノコなどを用いる。ケバリは各人が作るが、六月初めから一ヶ月位用いる。それはこの頃川の水面近くをカワムシの羽根の生えたウキムシが飛び、これを魚が一尺位の所から飛んでとろうとする。これに擬してケバリを使うとよくとれる。

(11) 冬には水に穴を開けて、下の魚をヤスで突いてとるが、三岐から下流ではこの方法でハヨをとっている。

### 三、イ、ワタケ

沼田の奥、片品まで昔はとりに行つたものである。それは梅雨の晴間に薪の端が一寸はねた頃手でむしりとる。即ち繩を腰に巻き、岩に伝わって降りつとて腰の入物を入れる。繩の一端は崖上の大木などに結えておくのであるが、馴れるまでは真青になつて震える程恐ろしいものであるといふ。尚繩はシナの木の皮をアクを入れた湯で煮て、藁と混せて作る。麻繩では降るにつれて手が熱くなるし、この繩は二三尺伸びて弾力があり下に降つても危険が少ない。又この繩は馬の首にも下げて用いる。昭和三十一年にはイワタケは一貫日八〇〇円まで相場が上つた。

中国に輸出して中國料理に用いるのだといふ。ミニギノコ、キクタケともい、ケヤキ、ニワトコの木に生える。イワタケと一寸似ている。

四、狩 猪  
主として猪、熊、カモシカ、ホンジカ（メジカ—無角はいけないとさ

れ、一本角はソロという。）ムジナ、テンマル、バンドリ、山鳥、キジ、猿、狐などを獲る。猪はマタタビ、スズ、ナラの実が近年なくなつたので、甲州に逃げたといわれ、十五年前から姿をみせなくなつたが。それ以前は交代で番をして鳴物をならしてシシオイをやつたものである。熊はよくナシ、カキ、モモ、クリ、ナラの実をたべ荒している。イタチ、兎はハコオツツで捕え、ムジナ、テンマルはトラバサミで捕えた。

狩猟にでるときは、柄、タルミ、ツガの皮を煮てそれに白衣を漫して煮染めた赤パンテンを着たりして偽装したものである。無犬（ここ上野村特産の十石犬）にはあらかじめハラワタをたへさせて訓練しておくのが、犬によつては鹿、テン、猪など嫌いなものもいて、それには足跡の臭をかがせておく。こうして勢づけておいて放した。それも山によつて猪の通る道が異なるので夫々タッパを定めてタツマチをし、時間を打合せておいて放つのである。銃は火薬、次でカンウチ今は村田銃を用いている。

猟になると三人乃至十人位で組をつくり、親方中心に勢子と鉄砲打ちを兼ねた仕事に分れて山を廻り、高所で落ち合つて打合せする。獲物みつけると丸九のケースを吹く。（例えはヒューッと長く二つ吹くと入った。三つ吹くと出た。了解すると回吹くなど。又救いを求めるときはヒューッヒューと三回連呼する。）次で射止めた場合はヨビデッボ！（弾力を抜いた穴砲）を穴に向つてタッパで打つ。

第一発をショヤ、第二発をニノヤ次でサンノヤ、トドメといつているが、射止めた獲物は腹をかき心臓の頭（心室）を十字形に四つ割りに切つて「テングヤマノカミニアゲマス」といしながら差し上げて礼拝する。心室をヤマモウスとい、狩をした人だけ燒いてたべ、女や子供にはやらない。

獲物の分配については、猪の場合はその場に転がしてトドメをさした人は、ブチホウビといつて頭をもらえる。鹿は最初の傷を負わせた人即ちシヨヤガシラに頭をやる。残りは公平に分配し犬には獲物をやつた

鹿やキジをとるときはシカブエやキジブエを吹いて呼びよせる。前者は鹿の角を引割って三角形にして、鹿のハラゴ（はらんだ鶴の腹の中の子）の皮又はオヒキベットウの皮を張り込んで作り、後者は鹿の角を厚さ一分ぐらいに削て引割って、砥石でよく磨き形は種々に作り、長さ約三種、巾約二種位のものである。これらを吹くと友を呼ぶ鳴声が出て、

り血をのませる。又五匹の大が働いた場合は、その中最も働いた犬に一人前の分配をするが、これらの狩猟法はトモガリといふのであって、一人で捕えても残りの協力者に平等に分配するのである。

狩人の間ではサンミヨウと云ふことをいう。それは妊娠している妻及びその妻をもつてゐる夫のこと、それにアタリザンミヨウとチガイザンミヨウがある。前者にはその妊娠中はいつでも獲物がよく当るし、後者の場合はいつも違ってしまい、例えその人の撃つたのが一度転んでも逃げ出すという。而も今度の妊娠がアタリザンミヨウでも、次の妊娠のときにはチガイザンミヨウになることがあり決つてはいないといわれ



シカブエを吹く  
池田秀夫撮影



キジブエ(右)とシカブエ(左)  
池田秀夫撮影

それで寄せておいて散弾を撃つのである。鹿笛などはやはり秋の交尾期にこれを利用している。

### 獣の胃と肉

猪、熊の胃にはアツケによくさく、又猪の胃はチカラ（赤ん坊を生んだ後）がたべるとよくないといふ。ムジナ、テンマルの胃は子供のムシにきく、猿の胃はお産をする人がたべると安産する。猪の肉は山鶏といい煮えている中からとつたべても熱くないし、鹿の肉はうまくないが女にはよいといふ。馬と鹿には胃がないから馬鹿といふのだとう。

### バンドリーブチ

バンショウウチともいふ。但しこパンはとつても無駄なのでとらない。これは木の頂において月夜のときよく見える。バンドリと同じ形の鳥で本ズミ位の大きさである。バンドリは大きいので三〇〇匁位ある。月夜の八日頃から二十日頃まで特によいのは十日から十六日にかけて、月明りを利用する。ウスグモ（カララグ）その出たときが最もよく、晴れていると光つてそれらしい木の枝がみえない。輪郭がボーッと見える程度がとりやすいのである。十一月から二月にかけて特に二月はフケてキリキリ或はギヤギヤともなくして、見当がはつきりつかなくともスカネ（銃口）ダメで撃つ。弾丸は一号乃至三号、ザクダマ（散弾）を用いる。弾丸が当らぬときは、なると同時に落ち羽根を広げてのしていくが、当ると羽根を抜けのびたりちぢんだりして落ちる。

バンドリの肉はたべるが十一月が一番美味しい。昔は皮をのして中国に輸出した。オーバーの裏に張るのだ相である。

### その他

モモンガは木に止まっているときは尾を背中にしょっているので見分けがつく。

ヤマドリは鬼をとるワナでもとれる。朝夕のみ出る。

ボヤドリは寄生木の実をくいに来るのを、月夜の夜、日暮時に撃つ。ツガ、クロキ、モミなどで煙のそばに小屋を作り、大豆、小豆をくい、

に出了たところとるのを、コヤブチといつて。これは別にエサは撒かない。

## 五、炭 焼

昔は白炭を焼いていて、黒炭は三十年前から焼き始めた。五つに折込んだ。カヤで編んだオリコミダラに五貫二百匁入れ、三ヶ所では三尺外側に十文字の縄をかけた。製品は馬で甘藷穀の磐戸から下仁田へ、或は十石峠から信州の南佐久へ、又は運送で鬼石へと出した。約七〇年程前鬼石の茂木某が繩の登録をとり(赤色が楕のカタ炭、青色が難炭だ)た。長さ二尺二寸に決めて作った。又大正の初期三波川の飯塚清氏が木炭の同業組合を作ったことがある。その後黒炭は長さ二尺二寸から三尺五寸に変わった。それもカマの構造が変わったからである。

カマをこしらえて仕上げると手伝つた人々に酒を出してお祝いする。焼き終えると石カマにふたをし、その後は不淨のことをしてはいけないとされている。こうした炭焼きや木出しには遠方から来たものである。他所人をキャンボーといい、勢多郡黒保根村から、又飛弾からきたのはヒダビヨ、秩父からは大滝ヒヨが来た。

## 六、副 葉

畑には、粟、稗を多く作り、田は皆無。陸稲も全然作らなかつた。冬作に麦は作つたから、常食はそれ等のものであった。そこで、農閑期には山から材木を伐り出して、副業を行なつた。おもに箸やオケゴ、フロカゴを作つた。これはカワグミ(沢胡桃)から材料をとつた。

材木の方言

みすめ  
ハグサミキバリ

あすさ、あすさみねばり  
ホンミネバリ

これは材質が固く、重いので箸の材料としては好適である。今は深川に出される。

バラモミ  
フジキ

黒松

トネリコ

今はバットやテニスのラケットとして珍重される。

トウヒ

シラビ

アクダラ

材質が柔い  
せん

七、木 や り 咽

木やりには信州木やりと甲州木やりがあり、ここのは信州木やりの系統に属する。

(木やり) ホーラン サイタゾ サイタゾー

(うけ方) サイタゾ サイタゾー

ヨシノノ サクラガ一

ヨシノノ サクラガ一

サイタゾ サイタゾー

サイタゾ サイタゾー (サイテコイ サイテコイ)

ホーラン コイヨー

ホーラン コイヨー (サイテコイ サイテコイ)

サナガシ唄

サナガシに来たのは飛弾と大滌からであつて、それぞれ飛弾ヒヨウ、大滌ヒヨウと言つた。他からも来たが、なんと言つても、この両者でなければできないような技術を持つていた。一組がたいてい二十五人前後であつて、その上にシャツ、下にハキを履き、その上にカルサンみたいのものをみんな着ていた。親方を大ショウヤ、それを助ける人に小ショウヤがあり、その下にキバナナクニン、ノベヤクニン、キジリヤクニンがあつた。

キバナヤクニンの仕事はシラをかけて水をとめる仕事であつた。これは谷合の適当な地形を見たてて、そこに丸太を縱横格子に組み、そこに

アオキ(常緑樹)をあて、さらにもむしろをあてて水が洩らぬようとする。このシラにはテッボウと称する重要な仕掛けがあり、これが他のキャンボウにはできなかつたのである。テッボウは、それを外せば一瞬にして、シラ全体が崩壊して水が一概に流れ出るようにならんのである。倒らでは危険だから、長い丸太に駆け、遠くにして操作できるようにしてある。ノベタニンは、途中でうまく流してやる人たち。竹の柄で、七尺ぐらいたるテドリといふをかついで、木から木へ乗り移つて、

上手に流して行くのはたいへん勇敢であった。最後にキジリヤクニンが材木を始末して行った。材木は鬼石まで流したといふ。このキャンボウに頼んで、村の人たちはマキを流してもらつた。マキの長さは二尺五寸。万場や鬼石に出てキチヤードに売つたと言うことである。

### 八、ナツガリ(焼烟)等

時期は七月末から八月初めにかけて、天気が続いたら上方から火を燃しつける。わじわ燃るので四、五日かかる。荒いものを片附けて、その年はソバ(或は粟、大根)を、土地をマンダワでそぞうにうなつてから蒔く。昔は不要だったが今では火入許可書を警察に出してからやる。次年の春は丁寧にうなつて粟、ひえを蒔き、一部大根、カブも蒔く。豆や小豆はもつたいない。第一年のナツガリといふが第二年目は初めて煙にする意味でアラタという。無肥料で五、六年はとれるものである。アラタをあけて六、七年たつと何ともなるので捨てて新らしく又作る。四、五年頃から豆、小豆を蒔く。最近は肥料もあるし、ナシガリする場所もなくなつたので、継続して作るようになつてゐる。

### 切替畠

明治19年の役場台帳で原野森林となつてゐた場所を、ナツガリして烟にする。調査が入つて現在烟となつてゐるで種目変更になつた所を切替畠といふ。

地番について  
元からの畠には地番があるが、明治19年の台帳で元からの山林原野を甲、ナツガリしたものを見つかる。

### カツクダシ

秋刈って春燒いて烟にしたのをいう。

### 九、山の神

山の神は大山祇命といふ。女ともお天狗さんともいふ。祭日は毎月十七日で、木鉢屋は十二講といつて十二日に祀り、炭焼き、ソマ、コビキは十七日に祀る。この日は仕事を休み山に入つてはいけないとされる。神酒を神様にあげて飲み、氣の合つた人達同志で出し合つて祭る。十二講は十二日のオヒマチにお祭して火に注意する。特に十一月と十二月である。

山の神は中の沢の大山祇神(お姿は粘土で作った玩具の馬のすくんだ形、ハトブエに似てゐる)が最もあらかたである。あちこちを向き、向いた方に悪い事が起るといふ。けがれた人がみると見えない。又近親者に葬式のあるとき、妻が月のものでよごれている時はお詣りしない。

この御神体は、北の沢の奥が中の沢と同じ地域だったので、中越の人々が盗んでいたことがあるが(飛び舞つてきたと中越ではいっている)、中の沢に明治十七年とり返してきたといわれてゐる。

### 山の神の使者

山オーサキが山の神様のお使いである。ネズミ位の大きさで耳は人間の耳の如く、尾はリスの如く平たい。これが出てくると誰も構わない大事にする。若し殺すと山を負傷する。魚とりに行つたとき出でてきて知らないでヤヌで突いて持つて来たら仲間があとを追つてきた。途中でこれが山オーサキだと聞いてあわてて捨てたことがある。某の家にオサキがいるというのを聞いたが、山オーサキはオサキより小さい。家や人につくのは一尺位で山オーサキは六寸位である。木の根元などに居る。山

オーサキは人を馬鹿にしないし、石をくぐるのが上手で額を一寸出し入れするが、人にはつかない。山オーサキはつまりオージョである。

家や人につくオーサキ

塩の沢でのこと。家の井戸の石垣の所にして、婆さんの仕事を額を出し入れしてみていた。婆さんが「火箸をつとおすからじつとしていろ」といって穴をこざした。そうしたあとでオーサキが「婆さんをかまつてやろうと思ったらとばしてつこくられた」と人間（オーサキにつけられた人）に云つたという。

南牧村塩沢の大黒屋がまゆ買いて、値を決めるときまゆのカンブクロに飛込んだ。口をしめて家に持ち帰り、そのオーサキが捨れても人にとつづいてひどいめにあつたという。

商売をしている人が大屋になるときは、ばかりの皿の方に、貧乏になるとときは、ばかりの玉の方についたという。

#### 山の怪異

山の神様の日は毎月十七日で、この日は山の木を切りらないことになっている。某がこの日山に入つてタルウエ（地名）で枕木を削っていると近くで木を切る音が聞える。バサリ倒れ、岩がころころなる。そこで山の神様の怒りだと思って御神酒をあげた。又ミミヅクという谷にいたら、夕方弟が高い所で頃木を切っている音がするという。そのうちに同行の五人が皆聞えるようになつた。そこでこれは山の神様が腹立てただろうと御神酒をあげ、營林署の役人にも話したことがある。

#### 禁忌

マド木は山の神様の休む木、遊ぶ所だから切ってはいけない。ウデ木も切ってはいけない。

#### せみの方言

ミームシ みんみん  
ジーヤキ じーじーぜみ（みんみんの小さい形）

カナカナ ひぐらし  
中里村魚尾では

ジーヤキ あぶらゼミ

シーヤキ あぶらゼミの小型のもの

芸

能

編



20年前の納原の女の子  
(昭和16年12月第1回の探訪旅行のとき)

## 民謡と民俗芸能

萩原進

### I・はしがき

上野村の民謡および民俗芸能は、その立地条件として他の群馬県地域と異なる特異性をもつてゐることが指摘される。それは、民俗の伝播経路を支配する交通史上における地位である。(→神流川渓谷に現在のよう)に河川の沿岸沿いの道路が開通したのは明治初期からで、それまでは山中領は旧多野郡美原村で行き詰まり、確かにV字台の内頬筋地の中腹か尾根を通ずる道路によって結ばれたに過ぎなかつた。(→には、甘楽郡からV字谷の山脈を超えて神流川の流向に対して直角に入る道があつたが、これとても幹線にはほど遠い不便な通路であつた。しかし、この谷に直角に入る道はかなりの数があつたから、上州の平坦部の文化が流入したこと、別に記した舞子舞によつても明らかである(→には、なんといつても、山中領の支配的通路は、嶺づき一つ向うの秩父地方との接触であり、さらに信州に伸びる関東平野と中山道につながる最短路が通じていたことである。特に主要交通路であつて、むしろ中世に免達した鍵倉—武藏—秩父—信濃—京都を結ぶコースとして栄えたことは、明治四十三年編の「上野村誌」に記録されている金石文や諸記録銘文などの写しによつても明らかである。

筆者は、上野村の調査は、つねに関東平野と信濃を結ぶ古道の通過地帯として注目してきたのである。そのため、郷土芸能に秩父と信濃の接触或いは融合を前提として、本調査以前にもすでに何回か探訪の旅をしてきた。今回の調査でも、この前提のもとにあつた。その結果、兩乞

い明、オヒナゲー（お難粥）、地方歌舞伎、伝説などに多くの収穫があつた。平将門の伝説が秩父に濃厚に分布してゐるよう、山中領にも伝説のテーマをなすほどに多かつたのも興味深い事例の一つといえよう。とにかく、山中領の最奥部に位置する上野村は、群馬県でありながら、近世までは最も非群馬的な文化圏に属する地帯だつた。

さらに、しま一つの立地上の特性は、隔離された非群馬的であつただけに、群馬県の他の地区ですでに消滅したものが、この地方に遺されてゐるという想定であつた。塩之沢の舞子舞の唄の中に、民謡の「嫁いじめ」が挿入されてゐることも一つの事例であつたし、明治時代まで他の地方にもあつた清音の「カンカンシノ」が、現に歌われ踊られている事実の如きもこの例であろう。とにかく、上野村の調査で想定した岡式どうりに結果が出たとはいえないが、少くも関係的位置にある予測はなし得る程度には資料が得られたよう思う。

次ぎに、筆者の分担の範囲が、民謡や民俗芸能といつた特殊な限定にあるために、ある特定の大字（部落）にとどまらなかつたこと、記述の内容が、他の分野と交錯することもあり、その限りでは非常に難然としたものになり終つたが、このことは同時に、同一の芸能においても実際に見ることのできなかつたものもあることと共に本稿の不備の面であることをお断りしておきたい。舞子舞も、時期的に炎暑の候であつたために、塩之沢一か所にとどまり、野樂沢、川和、黒川、橋原の舞子舞はついに調査洩れとなつてしまつたのもその一例である。このことは、まさに遺憾であるが、今後の調査に俟つ以外にないのであって、遺憾乍ら諒解を得たいと思う。行事や一定日時の定まつた郷土芸能は、年一回し

が実演されない、  
ものが多いたい、  
う絶対の条件で、  
はいかに聞き書  
きが十分であつ  
ても、なお実際  
に見ることの後  
利には及ばない、

ための民謡—作業唄—はほとんど採集できなかつた。唄われなくなつた  
消滅の事実もなかつたから、おそらく、ムギ打ち唄、田植え唄のような  
ものではなかつたのではないか。山に生きる人生であつたから、木挽  
制約されることが  
はいかに聞き書  
きが十分であつ  
ても、なお実際  
に見ることの後  
利には及ばない、

これは、別の調査によつて、木挽き職人が「渡世人」である  
ことをしめす。上野村地方の木挽きが、渡つてきた時の仁義は、やく  
さの撫である「仁義を切る」のと全く同じで、「おひけえナンセ」「どう  
ぞそちらからおひけえナンセ」から始まる住所、氏名の接頭にはじまる  
のは、かつて、木挽きといらの人が、背ひとつを背にして、山から山の  
職場を流れていったことを思わせる。現に、上野村のすぐ山かけには渡  
りの木挽きがいたことが、明治十四年の新聞記事に出ているのでここに  
引用しておく。

北上郡青森村大石といふ所に木挽を業とする福田小三郎といふ者あ  
り。十年前に信州より此地に来り、妻のおさん（二十歳）の所へ入婿し



雪の十石峠越え

昭和16年12月27日信州側から峠を越え、自転車で上野村へ降りた時の様子のひとこまである。撮影 登丸秀男

## II・民謡

### 一、作業唄

純山村としての長い歴史を経てきたために、平担部のような農作業の

といつて、実見したもののみについて記すとしても、民謡の採譜、芸能の  
振り付けなどを国示しないのでは三分の一の報告にもなつていい。ま  
ことに遺憾であると思うが、現在としてはこれ以上に筆者の力のないこ  
とを併せて御含みをねがいたいと思う。



祭の日（4月5日乙父にて）

撮影 三沢義信



仙境の若人たち  
橋の上にせせ時雨をきながら新しい時代  
の息吹きを吸う若ものたち。山中領は変わ  
りつつある。撮影 萩原進

て子供の二人ある中なるが。(下略) (上毛新聞 明治十四年六月十六日)

と、信州よりの渡り職人であることを示して居るが、こういうように、木挽きは、カシラ(頭)があつて集団あるいは組んで渡るというよりも、

単独で山から山へ労らく場所を求めて転々としていたらしいことがわかる。このことは、木挽き唄が意外に共通性を持つ一つの原因だつたので

はなかろうか。上野村の木挽き唄も、県内の片品村、水上町などと似ており、遠く秋田県や、福島県あたりとも同じである。山の職人が、狩猟

のマタギのように、或いは曲物細工の本師屋のように、仕事場を求めて移動したらしいことを思われる。乙父部落での採集では

ハアーハアー、山は高山木は大木で  
元縮め繁盛とひきくずせ、ズイコン、ズイコン

ハアー山は高山(こうざん)木は大木で

元縮め繁盛でシャッキン、シャッキン、カリコメ カリコメ

ハアー親方金貸せちょと廻(めぐ)り、ちょいと金がなければお  
かかかせよオ、ズッコンズッコン

ハアー、木挽さんならよ、アーアーあのもりんさまよ、もとで出なさ  
きやヨ、アーラで出すよ、ズイコン、ズイコン  
以上は宮沢佐吉翁(六三)が歌つてくれたものを示めた。ほかに、

ハアーハアー、木挽さんかい山には住めど、  
木の実草の実食べはせぬ、ズイコン、ズイコン

ハアーハアー、元縮め金貸せ、また歯か欠けた  
それがいやならかかを貸せ、ズイコン、ズイコン

といったもので、これと似たものを他の地方の木挽き唄から比較してみると、  
木挽きヤさんかの山にも住むが  
木の実かやの実ヤ食べはせぬズイコン、ズイコン

(利根郡片品村地方)

ハアー、木挽や山窓の山には住めど  
木の実カヤの根はたべやせぬ、ア、ザラコン、ザラコン  
(利根郡水上町地方)

ハアー、木挽や山窓の山には住めど  
木の実カヤの実食べやせぬ、イヤコリヤサノサット

ハアー、山は高山、ハ一樹は大木よエー

ハアー、親方繁昌とホンニ鳴り響くヨー、ハ一シメコイシメコイ  
(岩手県南浦木挽唄)

ハアー、山は高山、ハ一樹は大木よエー  
と、ちょっと挙げただけでも、こういうように似た結果が出てる。た  
だ最後の合の手が、ズイコン、ザラコンといったように、擬音の箇所が

違うところに地方色がある。

小(さ)流し唄 山中領は近世における幕府の直轄地(天領)であり、  
森林は御林とよばれる御料林であった。しかも、県内まれに見る重要な  
御林地帯であつたらしく、上・中・下三郷(現在の上野村中里村万場町)  
の名主が扶持米給付の御林守として、森林の育成と管理に当つてきた地  
帯である。上野村柄原の黒沢家の文書によると、江戸の寛永寺の工事や  
両国橋用材なども、この山中領から伐り出されたらしいから、材木の本  
出し作業はかなり古くから行なわれていたと見られる。勿論用材は、神  
流川を利用しての小流しと筏流しがあったはずである。

木屋は宿かえ材木ア下もへ、ヨー  
あとにのこるはきれわらじ、ヨイヨイヨイヤサ

という唄が、柄原の滝上仙吉(七二)、相馬藤作(八〇)の両古老によつ  
て歌われたが、この唄も片品村や水上町のものと非常によく似ている。  
茂師も特殊な職人であつただけにかなり広範囲に移動している。この連  
中が同時に各地に小流しや筏乗り唄を伝えていたのである。しかし、  
上野村ではすでに滅びようとしており、それだけ片品村より早くに小流  
しが行なわれなくなつたことを考えさせる。

地曳き唄　木材地曳唄ともいっていたが、伐り出した材木を音度とりの音頭で引く張る時の唄である。前の句を音頭が歌い、「ハアーよ」と「なー」を唱和するものである。

ハアー、みなさま元気で頬みます、ハアー、ヨイトナ

ハアー、引く手もてこボーも揃つて、ハアー、ヨイトナ

ハアー、音頭と人張りあげてヨ、ハアー、ヨイトナ

といった歌詞である。曲節は平調でのびのあるものである。「てこボー」

というのは、ゴロ（丸太）を並べてその上をころがす時に使う梃子棒のことであろうか。これも乙父での採集であった。

木遣り　これといたものに木遣りがある。村では「十二人木遣り」と称していた。

ハアー、ヨイと綱締め、

わたしゃ野に咲くアラヨヨイ

タンボボの花、アラミヨミワイ

人にも踏まれて、ヨイタレワイ

花が咲く、ソリヤヨイヨイヨイ

アラヨイヨイ、ドスンドスン

いわゆる地形唄の作業唄である。十二人の木遣りといえばかなり大きなものである。これも音頭形式で唄われるものである。同じ唄で、

めでたいことには高砂の

尾上の松を曰として

その枝々を杵として

爺さま婆さまの餅つきだ

という祝い唄、舟唄もある。能の高砂からの替え唄であるのも、家の昔話が、千年万年続くようにという願いと祝意がこめられているからである。

地掘き唄　村では「石据え唄」とか「地居掘き」ともいっていた。乙父部落での採集である。建築の土台石を掘きこむ時の唄で、音頭がいてその音頭につれて一同唱和するものである。

（音頭）

ハアー、めでたい当家の石据えだよーん

（唱和）

ハー、エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ

（音） ハアー、皆さん元気に張り上げてよーん

（唱） ハアー、エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ

ハアー、明きの方から福の神だよーん

ハアー、エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ

ハアー、四方固めのすま（隅）柱よーん

ハアー、これが大事の大黒だよーん

ハアー、エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ エンヤラサ

これも寿ぎ唄である。なお「二つ拍子」という次のような地掘き唄もある。

（音頭） これは表のすみ柱

（二回） この石ホンマにすわるなら

（音頭） エンヤラアレワイサノエ

（音頭） あがるはあがるはようあがる

（二回） 春空ごめんと突き上げる

（二回） エンヤラアレワイサノエ

二、諸國民謡

上野村地方では、他の地方に発生して、この地に痕跡として遺された諸國の民謡も少なくない。宮沢元三（六六）翁の歌ってくれた「伊勢音頭」も、哀愁のある古いしらべが、今もなお耳底について離れない。

お伊勢ナ、参りで

この子が、できて、ヨイトナ

お名を、つけましょ伊勢松と

ホラ、アリヤリヤンアリヤリヤン

シテコメヤートコセ、ヨンヤナ

コレワノノセー

このなんでもセー

といったものもあった。このはか始屋が船を充りながら歌った「船の中

から……」もかなりよく遺っていたし、阿呆院羅群の祭文系統も生きて

いる。其句では、角力甚九のことをここでは馬方節とよんで、

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井用

などが歌われている。

端唄系統もかなりまだ歌われ、酒宴などにはやられてるらしい。採

集したものの中に

お前百までわしや九十九まで

ともに白髪の生えるまで

お前そうかよそうならよいが

そうでないかと気がもめる

とか

わがものと、思えば軽い笠の雪

昔からなる落し差し

といったものもある。馬子唄は一名「十石馬子唄」ともよばれているが、

追分節の系統であることには変わりがない。

小説出て見ろ浅間の山に

今朝も三筋の種が立つ

碓氷峠で坂本見ればア、ヨー

瓜やなすびの花ざかり。

(合の手) ホイホイ、百に三升の麦はか食やがつて、糞はかしりやがつて、ホイホイ。

かわいい男に馬方させて

よ、食う時や、いつしおだが寝る時ア別だよ。

もその中の一つである。祭文系統の「口説き」も、白井権八、鈴木主水

などがよく歌われたそらである。

三、カンカン節と踊

こんどの上野村の調査で意外な収穫の一つは、カンカン踊り、カンカ

ン節とよばれる清楽のことである。清楽(しんがく)は、大陸の清国から渡ってきた音楽のことである。肥前平戸の文化大名として知られる松浦静山

の「甲子復活」によると、江戸の浅草にあった太郎細荷が流行したあと、叶福助といふ頭デッカチで体の小さい人形が流行し、寒ごとに買ひ求め

たがそれもさびれ、去年(文政三年か)ころから「かんかん踊」が都下

に大流行し、小供達がみんな踊り狂い、その様と歌の文句が充りひろめられたことを記している。すなわち

〔甲子復活〕(巻九)去年(文政三年?)ころよりかんかん踊と云て、

小兒の戲舞するありて下に周遍。その章唐音を伝へたりと云ふこ

となり。切間版刻して充張む。今その図並びに歌謡を左に載す。(註、

歌詞の前半は次に掲載、図は略す)然に壬午(文政五年)の春二月、市長停

止の事を闇部に触る。自是して止む。その文に曰く

一、唐人歌之儀度嚴敷停止仰付られ候に付、子供に至る迄かんか

んおどり歌等決て申間敷候。且つ辻商人船充老枚掛絵草子等にも右

唐人并うた等持流行候者これ有らば其所留置町所間札し早々訴出づ

右之通仰渡られ候町内限り相触べく候。以上

後に聞けば、長崎にては古くありし事の山。その辞意は雅發を極めたことなりとぞ。近頃長崎の賤民罪ありてその地を放逐せられしもの、浪華に抵り活計に苦しみ、唐人のかんかん踊と云ふことをして、一時に人の笑楽となりしとか。然れども、左まで流行と云ふほどのことは無りしが、いかなることにや、東都に伝へて人々その趣意をも弁へず、歌りもてはやし盛んに流行し、遂に禁ぜらるるに至れり。

と記している。この甲子夜話と同じ頃に刊行された（序は文化十一年）、萩敬順の「遊歴雜記」（西中の三七）には、文政四年頃の江戸の流行りのものと御開帳や富士講のことなどを記したあと、かんかん踊りにふれて又香具類の見せもの数々ある中に、表門の外に小屋しつらひ、カシカン踊りといふものありて、殊の外に群集し、一円に評判高く、諸人争ひて見物し山をなせり。これは当二月芦屋町の河岸に於いて興行せし後、成田の開帳に依て爰へ引たるものなり。このカシカン踊りといふは伝えいふ、肥前の因長崎福清寺とかいやふ寺にて、盆中長崎に逗留する唐人ども、又はオランダ人の徒店廻に来り、酒宴の上醉に乗じて唱歌を発し、詠々踊りて己々が國元の亡靈を志して亡魂へ手向て回向し、また両親及び兄弟ども無事なるは、生身魂を悦び祝ひて躍る事しばらくなり。これをホサマツリと称す。全くこれははさまつりの羅の振にならひ、又一転して可笑しくわからざる唱歌を作意し、何切りて揚下の声あやどり、長短の曲節をつけ、離子方四人躍る者三人、色々の手拍子今様に似ざる身振し、おののおの手には何も持たで躍れり。その様珍らしくおかしみありて、一興たり。但し離子方といふものは床机に毛氈敷て腰をかけ、彼琉球人の下官の服に以たるものをして、頭には鞋革国人の着る如きの頭巾をかかり、蛇皮線、錦、鞞弓、摺絵の四色にて離し、唱歌をば大勢の声して座席にて一同に譲ふ。又躍る者三人同じ服の色替を着し頭を各々手足の拍子おかしみある身振し、躍りの間、拍子の面白く珍しさ賞すべきか。

と、かんかん踊の云能的な特長を具体的に記している点で注目される、さらに、萩敬順は

右の唱歌江戸に流行りて見輩みなよく見て諷ひ歩き。殊更夏より月見越る頃まで、八、九才より十一、の見輩裸身に腹当つになり、納涼かてら巷々に躍りて遊べり。後に病氣見舞勞々太田南畝（註蜀山人）

へ訪ひ清談の序かんかん踊の事を尋しかば、蜀山人の答に、「その以前長崎の地に罷りし頃現にこれを見たり。これは唐船悉なく長崎の港へ着岸すると、その假舟に祭り設し舟玉を持出し、陸にござりて一同唱歌を免し、この躍りをせり。これ無事を祝し舟玉へ神樂の心なり」と、南畝のいえりき。左あれば源解なきにもあるべからず。それを一転して伝え來りて、かんかん躍りと号しやらん。一興なる躍りの様なり。彼の醉に乘じて酔み遊ぶ、南瓜躍りの今一際面白きものならんかし。と述べ、武井躍春というものの歌詞の翻訳を記している。さらに、江戸での大流行のさまを記し、子供の皆え事ができたり、酒宴の席に踊られたり、猫も杓子も歌つたとし、茶屋や女郎屋にまで流行した現状を報告している。さらには、加藤曳尾庵の「我が衣」（巻十五）に、かんかん踊を紹介して

去年（文政三年）のころより唐人踊流行、蛇を以て踊る所もあり。所謂胡弓三絃太鼓笛すり鉢入りにて三四人立って踊る。九環連を歌ふ。謡拍子程間違ひて間にたらざるがなり。されど世上一統にカシカンノウノウとて子供までうたひ歩く。又この節小兒の風邪流行、一人も不残病臥す。大人はからからカシカン風邪といふ。それ故に手習ふ子供は病みて不來となり。前にいふ唐人踊大いに流行して江戸は言ふに不及、近頃近在津々浦々まで或ひは一枚絵となし、又は船うり様の者唐人の形容に扮し多く見ゆ。かの九連環の詞に、カシカンノウキウライスと唱ふ。その唄をも少年等よく覚えていたはざるものなし。とこの間の江戸における流行の模様、諸国へ伝播していく様子などを記していく貴重である。喜多村信節の「きのまにまに」（嘉永六年刊）と

いう隨筆にも、

文政四年春より菖屋町河岸に唐人踊看せ物出づ。カンカンノウといふ事を唄ふ故、カンカン踊りともいへり。蛇皮線に合わす。又銅鼓ホラを鳴して大蛇を使ふ「西俗紀聞」の絵の如し、大いに流行す。後に内國橋広小路又深川富が岡にも出づ。小兒等多く学びて踊れり。その頃浜町山伏井戸辺に太田波之丞と云う御家人有り、この踊を好みて拍子踊る音絶えず、余りなる歎なりといひしが、その屋敷長屋に先女を抱置事四五人なり、忽焉顯して改易となる。

という記事もあり、その他片山賢の「寝ぬ夜のすさび」(巻一)にはなぜ幕府がかんかん踊りを禁止したかについてこんな風に記している。

歌舞伎はいふにおよばず、幼童たりともこれを吟ぜば罪にいたされんと、そのゆへを聞くに、ことし三月のころオランダ人江府に下り謁することあり。しかるにかの踊のうたは、蘭語にてことごとく淫蕩のこと葉なりといふ。もし蘭人来るとき道にこのうたを聞かば、我を嘲るなど怒りを發する事もあらんかとの遠慮にてかくとくめられしといふ沙汰なりと。

この歌が外国の歌であるが、淫蕩のことを歌つたものとする見解は「百戲述略」(第二集)といふ明治初年刊行の斎藤月岑の著書にもある。文久

二年刊の「雪錦隨筆」(曉鐘成著)には文政三年辰の春浪花堀江荒木の芝居に於て看々踊と号し、清朝の扮装

にて異様なる踊を興行せり。その囃子の鳴もの踊の形勢いと珍しとて數々流行し、前後に双なき大当りなりし(その後時々他所にて興行なせども初のことにとくならず)今も猶その風色のこりて謳ひはやせり。看々踊ひは鉄鼓踊ともいへり。鉄鼓は南蛮鉄を以て作るといふ。鼓弓を竹にて括など皆外来の風俗なるべし。太鼓は通例の器にして異なる事なし。

と幕末頃の流行情況を書き留めている。この中に挿絵があり、唐人風俗をして、太鼓、胡弓、蛇皮線、鉄鼓で囃している図がある。鉄鼓は今の交

響楽に使うトライアングルのようなものであるが、上野村の太鼓と笛に

なる以前は大体こういう樂器を使つたものであろう。

この清美はいわゆる唐人が上陸して同地方に行われ出し、文化三年の頃には大阪の歌舞伎芝居などで踊られたことを浜村秋田の「摂陽奇觀」(巻四六)に記している。すぐ間もなく江戸に伝つて、一時は燎原の火のごとく流行した。エキゾチックな囃子、蛇皮線、胡弓、太鼓などの音にあわせて、わけのわからない文句を歌つて、手ぶり面白く歌い踊るあたり好みの江戸っ子が大いに流行させたものらしく、時代も文化・文政の江戸文化爛熟時代であったから、大したものだつたらし。筠庭軒の「さきのまにまに」には、文政四年の春に、江戸菖屋町河岸に唐人の踊という見世物が出て、「カンカンノウ」と云つたが、蛇皮線に合わせ、銅鼓・法螺を鳴らして大蛇を使うのが珍らしくて大流行し、後に両国広小路や深川八幡で行はれて、子供たちが真似して踊るようになったという。(『講座日本風俗史』第二巻、西山松之助「江戸の流行物」に據る)甲子夜話には、當時の異風俗をして踊っている絵が収載されている。當時伝えたられた歌詞は、

かんかんのふきうれんす。  
きうはきうれんすきうはきうれんれん、

さんちよならへ、  
さアいほう、

にいくわんさん、  
いんひんたいたい、

やんあアろ、  
めんこんがほうて、

しんかんさんもへもんとはい、  
ひいはうはう。

てつこうにいくはんさん、  
きんちうめいしいなア、

ちうらい、

ひやうつふはうしいらさんば、  
ちいさいさんばんひいわいさ、  
もへもんとはい、  
ひいはうひいはう。

とある。上野村のは前段の部分であり、当時はほとんど第一節が歌われたものである。「遊歴雜記」に掲載した歌は最も上野村のものに近い。すなわち、カンカンノウ、キウレンス、キユワキニデス、サンジョナラエ、サイホウニイカソサン、イビビンタイタイ、ヤアンロ、カンコガ、ヲハウデ、シンカンサン、ハアハア、モエモントワエ、ヒイハウヒイハウとある。甲子夜話のものと僕分ちがつていいようであるが、どちらが正しいかはよくわからない。この歌が江戸市中を風靡したことは、引用した資料で明らかであり、児童の替え歌まで生まれたことを述べたが、その一例として、この歌がいかに流行したかは、当時（文政十二年）江戸の大火灾があったときに、童謡として、カンカンノウの替え歌ができて歌われたことでもわかる。（横山青蘋著「日本童謡十講」）その歌は、

西風逃げさんせ、  
一家大懶焼けたんべ、  
めんくが想うて心配さ、  
もえようとは火災灰々、

と、うまくもじつて歌い踊りまったくものである。ところがこれほど流

行したカンカンノウも、流行のつねで何時の間にか滅び去ってしまったのである。まことに記憶に留まるのはよい方で、わずかに落語の中に出でてくる程度である。まして、現在も昔ながらに、歌い踊れるとは夢にも考えられない。にもかかわらず、上野村乙父の人々は、酒宴や祭礼のときは、常の踊りとして実演され、あきらかに村人の生活の中に生きていたのである。ただ歌詞が、口承であるために、文化・文政時代よりも大分変わっていることがこんど採集で明らかとなつたのも、民謡そのものの本質が、伝播しているうちに変化していく例と相似たコースを取ることを証してくれた。乙父での採集によると、

かんかんのう、

きゆので（り）す、

きはき（きう）です、

さんしようならえ、

さあいほおい、

半鐘なるベエ、

みいかんさん、（みいかんす）

いっぴんだいざ（だ）い、

やははんろ、

ちんびがからくて、

すいかんさん（す）

トテツラ、シャンシヤン、

トテツラ、シャンシヤン、

（オヤステツルシャンシャン）



かんかん踊り  
乙父公民館にて実演のもの  
(今井伊賀次氏)  
撮影 萩原 道

## 四、雨乞い唄

これを、化政時代のものと比較すると、最後の部分が消えているかわりに、トテラシオン・サンの離子詞が入っている。踊りは行列式であつて、赤い襦袢に三尺をしめ、頭にシモンスの草色の鉢巻をして、手踊り形式で踊る。单调な手ぶりであるが、足もよく使う。離子方は音頭取りがいて、太鼓と笛でにぎやかにやる。祭りの前とかお用下げの神事のあとと休止の時とか、花火でもあげるときは棒を組んでにぎやかにやるそである。

土地に発生した古い民謡ではないが、かつて流行したもののが滅びずに

この地に遺っていることは、上野村地方の歴史全体に反映するものとして十分注目する必要がある。現在のところ県内では片品村で星野野美氏がこの歌を知っていたので、伝承経路をきいたところ、上野村から後流しの人夫に来た者から習ったことであつたから、古い時代に上野村にどうい経路かで土着したものであり、その媒介はおそらく江戸文化を保存した秋田文化圏からであろうと推定される。もともと、清業が縣内に流行したのは明治時代までで、明治二十年の新聞記事に、

松井田駅には清業を学ぶ者少なく、僅に一人のみなりしが、先頃当所の清業師藤村清月氏が

参られて合奏をなせりより追々に志さすもの多くなり。(群馬日報「明治二十年三月十五日」とあるが、これはカシカシノウではなく、胡りを主とする奏楽のことらしい)しかし、清業の生命は日清戦争(明治二十一年)頃までは、異国の樂として珍らしかられていましたらしいことはわかる。上野村のカシカシノウは、昭和二十五年十二月十三日、NHK主催の群馬県民芸能大会で出演して大いに好評を博したが、化政時代の百四十年前のものが、群馬県の一角に生命を保つていたことはいろいろの意味で、たとえば群馬県民謡資料としての重要な存在価値を占めているといつてもよいであろう。

旱天がつづくと「雨乞い」行事をして雨を降らせる民俗行事が日本ばかりでなく、広く世界各地にも見られるが、その方法として共通することは、西欧や中国地方も日本とおなじように「電神」に祈りをささげる型式である。西欧では電をドラゴンとよび、ドラゴンが昇天して雨を降らせるものと信じられ、中国でもまた日本でも電あるいは電王が雨乞いの信仰対象とされた。鎌倉時代の有名な歌人であり将軍であった源実朝の作に

時により過ぐれば民のなげきなり

八大電王雨やめ玉へ (金鏡集)

というのがある。詞書に「建暦元年七月洪水漫大臣愁懲せむことを思ひて一人奉向本尊御祈念」とあり、霖雨と大豪雨で民が困るからと天火祭りの祈願をした時の歌である。これからみても、雨は八大電王が降らせるものという信仰の存在が認められる。俳人正岡子規が、実朝のこの歌に対して、

大山の阿夫利の神を叱りけむ將軍の歌を読みはかしこし  
という作をのこしているが、神奈川県の大山の阿夫利神社は、雨乞いの神として知られていて、八大電王とか九頭龍稚現とかいうのは仏教的な名であり、ミズチ(蛇)オカミノカミ(社神)タカオカミノカミ(高麗神)は神道的な名である。しかも、ミズチは水蛇で、オカミはオオチ(大蛇)のオヘビを意味するし、オカミは雷と通するから、電と雷神が同じものと考えたことが推定される。現に、群馬県に特に多い雷電神社の祭神に、ミズチの神があることは一層この間のいきさつを裏付けるものといえよう。女神ではミズハノメ(閼槃女)の神とよばれ、水を主宰する神で雨乞の時の神とされている。上野村はV字谷で畠舎地であるため、早天にはすぐ被害を出すことは事実であるから、今もなお雨乞いは真剣に行われている。父沢では、材木をタマギリ(輪切り)にして、川の淵に

投げこむというが、これも水神、川の主である亀の眠をさますためで、

驚いた亀が昇天して雨を降らせるものと信じていたのであろうし、乙父の貫前神社の御神体（これは從来神官氏子縦代以外は見せなかつた）を

こんどの調査ではじめて写真撮影したのであるが、各地に見られる秩父青石系の男根であった。また、おなじく神体視して公開されなかつた能

の式三番に使う黒式尉と白式尉の面を見ることができたが、これを神聖視しているのは、かつて雨乞いに、翁の舞を演じたことがあり、雨乞いの時だけ表に出るものとされたのである。現に、この神体あるいは

準神体を見ると、かならず雨が降り、なぐさみに公開すると祟りがあると伝えている。余談になるが、この調査のあと、例の伊勢湾台風が襲来し、竣工したばかりの神社のそばの公民館に、社木が折れて突きさきり、

せつかくの建物を被災苦茶にしてしまった。村人は一様に、御神体を汚したためだということになり、無理の願いをした筆者の責任ということにまでなつたそうである。これは、当地方の雨乞い神事がかなり古い形でのこされて、つの現われと見られるのであって、上野村の雨乞い

巫の背景として見のがすことができない。

山中領一帯に雨乞いはかなり古い形式で行なわれており、乙父では、各

一・人ずつ村人が集つて神社で三日間ぐらいいのこもりをし、そのあと太鼓と笛で囃しながら、雨乞い唄を歌い、亀王に祈願をする。この

歌詞は別に記すような内容で、音頭取りが独唱し、そのあと一同で「雨たまえ亀王な」と唱和する。これを乙父の民間で実演してもらつたが、まことに古代の原始宗教を思わせる雰囲気であった。その歌詞というのは非常に長いものであつて、

神寄の雨乞、

乙父沢泣き晴れ、  
雨を三粒たもうぞ。

（昭和）雨ためえ亀王ナ。  
神寄の明神橋、

乙父沢山源訪さま、

乙父神社に集まり、  
亀王権現さまと相談して、  
雨も降らせ給うれ。

（昭和）雨ためえ亀王ナ。  
おしめり十分あつたなら、  
乙父村の百姓は、

コッパのような餅ついて、  
油のよう酒呑んで、

三日も四日も正月だ。  
(昭和)雨ためえ亀王ナ。

それでもおしめりしないならば、  
神宮耕地のおくま（熊野）さん、  
祐平耕地の神明さま、

乙父耕地の源訪さま、  
森戸耕地の明神さま、

遠西耕地の源訪さま、  
中村耕地の源訪さま、

小春耕地の源訪さま、  
田平耕地の源訪さま、

右神耕地の源訪さま、  
祐平耕地のおくまさん、

乙父耕地の源訪さま、  
乙父神社に集まつて、

雨をふらすこ相談、  
雨をためえ亀王ナ。

それでもおしめりしないならば、  
乙父郷の百姓は、

豆の葉もゴソゴソ、  
アズキの葉もゴソゴソ、  
なにひとつとれないぞ。

猿名神社へ早飛脚、

猿名のお池のお水をば、

ハス葉に包んで乙父郷へ撒いたなら、  
なんにもかんにも農作で、  
乙父さまは大よろこび。

(昭和)雨ためえ庵王ナ。

いまの調子はよい調子、  
いまの調子で渡すぞ。

(こういって音頭取りを次ぎの者に代わってもらう。すると、受け継いだ者が)

いまの調子で受け取った。

といって、前のように雨乞い唄をくりかえす。歌詞全体を見ると、庵主

に雨を給えと祈るのに、各部落にある神社の神が協議して降らすように

してくれといふことになってる。その次に、目的の雨が降つたら、村

人は正月のよう、御馳走を食べて祝う。もしもしめりがないときは、

近所辺の神さまの名を呼びあげて集会してきめてもらう。それでも降

がないときは、乙父郷の百姓は「メモアズキも葉が千からびて何一つと  
れない。そうなつては大変であるから、村の神さまには見切りをつけて、

有名な雨乞い神さまである猿名神社に頼む。するととかならず降らせてくれる」ということを歌にしてある。産土神に頼み、おどかし、あるいは要

めるなど、あの手この手で雨乞いをすることがわかると同時に、この歌

詞の中から、昔は産土神に一切の運命を托したときさつも流れ、その

産土神を不信任することもできた事情も察せられて非常に興味深いもの

がある。いわゆる「神頼み」が古い形式のままこの詞の中に遺されてい

る。

野栗の雨乞いは、各戸一人づつ出て、神社(野栗神社)に三日ぐらい「お

こもり」をし、錆と太鼓を叩いて神社の社殿をまわりながら、離し立て  
る。その時の歌は、  
雨降らせ給うれ

猿名山の池の水

それをば天に巻きあげて

と庵神が昇天して俄かに雨を降らせる信仰そのままの歌となっている。

それでも雨が降らないときは、神輿を川に下げる川のまん中に台を据えて安座し、神坐を設けてその周囲をまわりながら前と同じ歌をくりかえし、てんてこ水をかけっこする。このほか、「タケノコシチ」という山に代表が登つてそこにある祠に祈願をすると雨が降るという。もし降るとき参りにゆく。

野栗の奥野栗沢では、諏訪山に代表が登山し、神体の鏡を借りてきて

まつる。

乙父詫には、「ハヤツムジ神社」という神社があり、その下に淵がよど

んでる。その淵に石を投げこんだり、木を伐りたおしたりはうり込んだりする。すると「童蛇」が怒つて天に昇り雨を降らせるという。

鴨村中里村では、浜平の御剣を借りてきて部落ごとに川の淵に「神座」を設けて拝む。そのめぐりを廻つて水をかけることは野栗と同じ。雨が降るまでそのままにしておく。浜平は川上のみなので非常に利頭あらたかだといふ。また、淵へ入つて「ヨタをする」(水泳などすること)と降るともいっしる。

とにかく、上野村の雨乞い唄は音楽そのものとして見るよりも、古い姿をこした民俗行事の付帯的なものとして興味があるもので、曲節の如きも、歌うといつよりも、歌じ上げるといった単調なもので、「叫び」「折り」の詞だともいえよう。

秩父地方の雨乞い唄を採集したものに拠ると(「日本民謡大観」関東篇)、次ぎのようになっている。これはあきらかに、上野村と同じ系統と

見て差支えないもので、両地方の文化交流をも説明しているのである。

武甲の神の大前に、

雨だんべ竜王なあ、

長の日照りのそのため、

五穀の種子も尽きる故、

武甲山の神々へ、

氐子が集まりお願ひ。

(秩父郡横瀬村地方)

歌曲も非常によくており、雨乞い唄としては同一系統のものである。

う。

### 五、そ の 他

このほか、かぞえ歌とかわらべ歌も数多く遺っているが、それらを一々採集することは不可能であったことは遺憾である。これはいずれ後日を期して調査してみたいと思っている。採集した中から一二あげてみると、

かぞえ歌

一つとせ一 一つ名古屋のシヤリベ殿、四国をまわりて舍利となる舍利となる

二つとせ一 二般大根離れても、私とお前は離れりやせぬ離れりやせぬ

三つとせ一 みかんは食いたし錢は無し、銭箱叩いてどやされたとやされた

四つとせ一 夜櫻のボボから火事が出て、折助ヘノコが丸焼けだ丸焼けだ

五つとせ一 何時来て見てもこの長屋、どこからどこまで御多福だ御多福だ

六つとせ一 むくれたオマラでけつをされ、おまけにだいようが通じ

ます通じます  
七つとせ一 なんば名主の娘でも、新鉢や他人の手にかかる手にかかる  
八つとせ一 ヤレかか持ちやげりや子ができる、も一つもちゃやげりや  
子ができる子ができる

九つとせ一 ここで会わなきやどこであう、大阪天満のまん中でまん中で

十とせ一 殿様えんがわで糞たれて、黒金棒でどやされたとやされた卑猥きわまるもので、掲載することはどうかと思ったが、実は大衆の民謡の中には、こうして聴くに堪えない替え歌がかなり多く、それが伝統の一つの力となって支えてきている事実を見のがすことができないのを敢てあげたものである。他の地方においても同じで、こうしたものは次々と歌いつがれて、節まわしなども保ってている事実が少くないことは注目されなければならない。子守唄は関東地方のものと似てゐるのであるが、野樂で採集したもの

をあげておく。  
ねんねろねんねろねんねろや、  
ねんねがお子守やどこへした、  
あの山越えてこの山越えて里にいた、  
里のおみやになにもろた、  
でんでん太鼓に笙の笛、  
その笛吹いたらねんねしな、  
ホラヨイホラヨイホラヨイヨ

ねんねんねろねろねんねろよ、  
ねんねんねこのけつへがにがはいこんだ、  
ひきすり出してひきすり出しても、  
またはいこんだ、

ねんねろねんねろねんねろや。  
といったものである。

なお、民謡の伝承者としては、乙父の岩田屋の主人今井郡重氏、乙父の今井伊賀次氏の二老があげられる。この二人によつて大部分の民謡は採集することができた。

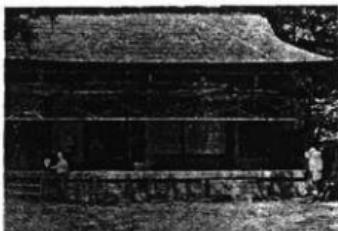
### III・民俗芸能

#### 一、地芝居

地芝居は、群馬県下各地でさかんであつたようにこの地方も最近まで熱心に行われていた。上野村では昭和十三、四年頃まで地芝居があつたそうである。(新羽での聞き方調査)系統は秩父で、振り付けは全部秩父のものによって教えられ、衣裳(綿羅)もしたがつて秩父から借りてきただそうである。師匠は坂東彦五郎という役者の弟子で音藏といふものだつた。坂東竹太郎という役者も来て教えている。この坂東彦五郎一座について「秩父郡誌」に、

坂東彦五郎 小鹿野の人本名根岸勇三郎といふ。幼より演劇を好み其の技に妙を得、下吉田村出身の俳優坂東彦五郎の門生となり、やがて其の名を襲ぐ。時々も幕末演劇流行の際なりしかば同鑑門弟を絆合し其の座頭として武藏、上野、下野地方に名を顯はしたり。

ある。一座の音吉については秩父方面の明治以降の歌舞伎役者を調べたがわからぬ。坂東竹太郎は中村竹太郎の芸名ではないかと思う。中村竹太郎は群馬県藤岡市牛田の出身で秩父の大和座の座頭として活躍した役者である。昭和のはじめまで秩父歌舞伎の生命を保つた人物である。(秩父郡史報)第一巻、浅見清一郎「秩父地芝居の探訪」新羽の古老の記憶によると、上野村に来た秩父地芝居は、秩父座からはじまり、大和座、片岡みどり、松本錦枝(群馬県農用)という順であった。片岡みどりは秩



乙父の舞台 (正面) 萩原 進撮影



乙父の舞台の小屋組み  
中央の突き出した角柱の部分に天保13年の接札を代用した記名がある。  
萩原 進撮影

父郡太田村の出身らしい。秩父の田舎芝居が上野村へ来て興行したことはめずらしくなかつたことが、「秩父郡史報」(第一巻)の中に記されている。三枝増産という古老の話で、明治四十年頃万場町の万世座でやっているし、上野村で、ジウラ(難観興行)をやつたときと立元から御馳走され酒を沢山出された時大いに飲んだ想い出を伝えている。今でも、上野村には義太夫が語られ、少々の踊りはできる古老が多い。義太夫愛好者のグループである前橋の十日会は、この奥地まで訪れるそつである。舞台は新羽ではその都度架設する掛け舞台で二日間ぐらいでできた。練習は大体一月ぐらいはやつた。時には新派をやつたこともあつた。そうである。(瀧上聖一、茂木井太郎著)

勝山の地芝居はこれもまた盛んであって、昔はちゃんとした舞台があり、さかんに行われたが火災のために焼失してしまつた。同じ頃隣村の中里村神が原でも地芝居をさかんにやつていた。黒沢正巳といふ熱心の人がいた。ついに乙父であるが、ここには名主で黒沢勝右衛門という者がいて、

芝居熱心であつて自分もやれたほどの技があつたという。橋羅は自分の金にあかして貰い込み、立派な衣食倉をもつていて、地芝居に必要な衣裳は大勝勝右衛門のところで借りてやつたそらであるが、明治三十年代に全部売り払ってしまった。矢張り秩父から指導されてやつたというこである。

乙父の貫前神社の境内には立派な常設舞台がある。現在は神社の拝殿のようになり改造されているが、東面で間口六間奥行三間の大きなもので、床の高さもかなりある。床下が楽屋になつておらず、回り舞台でない通常の平舞台である。観客席は北側にちゃんと自然の地形を利用した棧敷用の石垣で積み上げた高地を備え、傾斜もかなりよく造っている。ほとんどの村人はこれが舞台だと気がつかない位であるが、前虹梁の柱なしの日本なども見事である。梁の束柱に、建立した時の棧札代わりの墨書きがある。多分棧上げ式の時に記したものであろうが、墨下の数多くの舞台ではほとんど棧札や建立年時の墨書きがないために研究上其だ遺憾であるが、乙父の舞台は立派にそれを記していることは貴重である。

抽方 同 田邑代吉  
同 田邑藤藏  
田邑雄之丞

天保十二年

丑二月吉祥日

郷中安全

大工

黒沢倉蔵

落合喜四郎

小須田周兵衛

藤巻仙太郎

この天保十二年といふのは、有名な天保の改革で水野越前守忠邦が断行した強硬的な風俗取締りの政策で、地方の歌舞伎舞台は全部取り潰しを命ぜられた時である。現に吾妻郡六合村赤岩の湯本家記録によると、



乙父の舞台

いまは祭の機柱の格納所になっているが、棧敷をかけるために設けられた所である。

撮影 萩原 道

天保十三年に舞台を取り壊しているし、郷中安全では、その命令を実行しないために叱責された記録がある。その時に乙父では新築したのであるから驚く。最も前記録にもわかるように、舞台ということではなく、表向きは「抜跡宮の拝殿」ということにしてしまったのである。なかなか味のある方法を執ったものである。これが舞台でないことは、隅の四柱や前虹梁、あるいは舞台の前に花道をつけるホゾ穴のあることからもわかる。ただ、筋だけは通して役人の日をかすめるためだったのである。西南上州には舞台の現存するものが少いだけに、この舞台は保存しなくてはならないものの一つである。

## 二、橋原の人形芝居

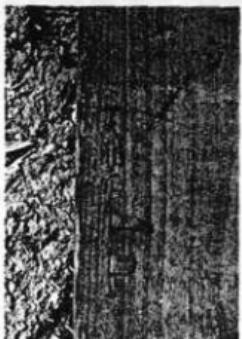
わたくしが上野村の調査に赴いたのは昭和十六年であった。十二月の学校の休みを利用して、上毛民俗研究会の名で共同調査をした時に始まる。上毛新聞社の後援ということで、暮も押し詰めた十二月の末に、ともあろうに、小海線の羽黒下駅まで自転車を送り、体はそこで下車して十石峠に向ってひたすら自転車を押し上げ、夜になってしまったので峠の上の炭焼き小屋に泊めて貰らい、シラミを十度に重複し、雪の十石峠を自転車越えをした。まことに冒険旅行であった。こうして、上野村の白井にたどりつき、調査行に入ったのであった。この時の一行は、高



天狗久作女形カシラ  
撮影 萩原 進



天狗久作女形カシラ(内面)



柄原人形の箱書

天明元年の紀年は、群馬縣の  
人形史資料として貴重なもの  
である。撮影 萩原 進



中正寺の人形調査  
撮影 萩原 進



柄原人形の一式

こんどの調査ではこのようにすっかり傷ん  
でしまっていた。惜しまれるものの一つで  
ある。撮影 萩原 進

- 一、男頭武拾五 女拾頭内子妻頭共  
一、外ニ破損四頭

一、鼓式個 箱入

- 一、着物  
一、ケン台老婆瓶  
一、袖物  
一、金地類八つ、上下四つ、片衣五つ

振袖綱 金地類八つ、新調木綿類共拾枚

- 小タタ着物三つ、ホロノ方六つ、襦袢式つ

- 持三つ、袖三つ、外ボロ老婆

- と見え、明治三十七年現在の人形一式の員数がわかる。

橋勝次、都丸十九、前沢義雄、登丸秀男、関茂の諸氏と小生の六名で  
あった。この時に、柄原の中正寺で人形芝居の一式を発見した。この時  
はただひと通りの調査であったが、当時はまだ保存もなく、立派なもの  
であったが、終戦後に再調査した時は、一時小学校の仮校舎となつたた  
めに、学童が玩具にしてしまつて、ついでこんどの第三回に行ってみると、全落  
外に出て雨ざらし同様となつておらず、腐つ

から、柄原人形は一セット分は十分あつたことがわかる。  
人形芝居のカシラは、三十二ぐらいあれば大体一セットとされている  
ために、学童が玩具にしてしまつて、ついでこんどの第三回に行ってみると、全落  
外に出て雨ざらし同様となつておらず、腐つ

たりつけたりして、どうにもならなくなつて、いた。人形のカシラの如きも、  
胡粉はげ、顔面と後頭部の接着も分離してしまつ、ほとんど廢物同前  
になつて、いた。まことに今となつては惜しまれてならない。以下今回の  
調査結果をもととして報告的に記してみることにする。

人形箱 キリ箱で、墨書銘によると、「天明元年」とあり、この人形の  
年代が傍証されたことは思わず取扱いであつた。その後の追加墨書で、  
明治三十七年四月九日現在分

多い。三人使ひのカシラである。材はキリ材がほとんど。カラクリは、クジラの骨をバネとした眼球の回転、眉毛の上下、下唇の可動のものである。大体江戸系のカシラであるが、全部無銘といつてよいがただ一つ、女形のカシラの中に、有名な阿波國の名人天狗久の作品がある。内面に墨書きで、

阿州和田村 天狗屋久義作

明治三十年十二月吉日

と記されている。天狗屋久吉は、本姓吉岡、久吉は「ヒサヨシ」と読むのが正しい。ところが、このカシラは明らかに天狗屋久吉のものであるが、久義はあるのは不可解であるが、ある時期に呼び名からヨシの吉を久義とも記したのではないか。群馬県下で天狗久の作品は、勢多郡城南村泉沢で、昭和三十年に筆者によつて発見された中に多數ある。徳島県名東郡和田村の人で安政五年生まれ、明治時代の阿波人形師として知られた。現在は三代目天狗久が技術を繼承している。人形の研究家の間でも、天狗久の作品は特に愛好されているだけに、柄原の人形カシラ

の中にたとえ一個にせよ、天狗久の作品があることは軽視できない。おそらく江戸時代からのものに明治に入り補充したものであり、明治時代にはかなり盛んに新じられたことを思われる。一体に彫りは深く、均勢のとれたカシラが多い。

衣裳 大部分は織んで役立たないが、金糸銀糸の縫いとりのある高価な衣裳も少くない。使えそうなものは、カシラとともに、県立博物館に依託してある。

由来微証 もともと柄原人形は、柄原、中越、小春の三部落共有のものであった。伝えによると、飛彈國の絆師屋今井兼助という者が来て振り方を教えた。(滝上惣一老談)それが滝上老の十六、七才の頃だった。これが中興で人形はそれ以前からあった。兼助の以前は、相馬幸吉(明治二十八年頃四十六才死ぬ)が中興した。兼助は幸吉のあとを承け、さらにそのあとを乙母の加藤代助という者がやりはじめたが駄目だつたそうである。しかし、実演は小春の人々でやられ、終戦後までやつたそうである。現在はもう使える人は一人か二人になつてしまつた。義太夫の方は、明治時代は甘樂郡方面から師匠が来ていた。みんなこの師匠について、一ヵ月ぐらいたしのものである。多分甘樂町の君川の政一といふ首の義太夫語りも村に来て教えたことがあるという。高崎の政衛といふ義太夫師匠も来たことがある。おもな演じものは、嫌倉三代記、朝顔日記、日蓮上人、一谷歎軍記、太閤記十段目などであった。甘樂・多野の南毛地方の人形芝居は現在

柄原人形の箱書  
「三村入形」の三村とは、柄原・  
中越・柄原をさしている  
撮影 萩原 進

舞子舞の寄せ太鼓  
撮影 萩原 進

舞い始めの一歩原撮影 萩原 進

の筆者の調査では、富岡市小野、南牧村星尾、下仁町本宿、甘利町白食などに人形を遺しているが、いずれも上演はできなくなっている。勿論柄原の人形もそれと同じ運命をたどったのである。

### 三、獅子舞

上野村には、野栗沢、川和、塩之沢、黒川、須郷と、全部で五組も獅子組がある。そのうち、こんど見られたのは塩之沢の獅子である。野栗沢の獅子は聞き書きによると、從来は十月一日に新羽八幡神社でやつていたものを今は十月二日に行うそうである。勿論上野村の獅子は一人立

ちである。一日の舞しも新羽へはゆかないで地元だけでやるそうである。

三四の獅子のはかに、ツケビト（付け人）が一人素面手拭い、かぶりで加わ

る。獅子はカツコ（小太鼓）をつけ、笛で囃し歌も入るそうである。

黒川の獅子は非常に荒くて、ことに剣の舞はあやまると他の者に負傷

させはしないかと心配されるほどだというが、こんどは見られなかった。

五つともに全部違っているらしく、系統的に別のものであろうと想像

される。こんど調査した塩之沢の獅子舞についてやくわしく記してお

くことにする。一人立ちで、甘美郎の大仁田から伝ったといふ。保管は

翁が順番に定められている。毎年九月二十日に行われ、宿から出発し、

お宮の庭で舞ってから神社の社殿のまわりを三まわりする。お森（神社の舞子場）は二ヵ所あり、一つは山の神のある場所である。お宮がすむと公民館へ戻り、午後中舞う。

いまこれを日別に区分してみると、

二十六日 この日を「ヅツゾロエ」（準備の意）とよび準備をし、一庭

（曲日一つのこと）だけやる。これは新人入りの者がやる。

二十七日 新入り三名が宿で一庭ふって神社へゆく。神社の前で五庭舞し、氏子と獅子と一緒にになって社殿を三まわりする。終つて二

庭舞い、全部で七庭とする。この時の曲日は、「森のひら」「銀ぎやく」の二つである。すむと公民館にゆき、のこった数の曲日全部を演じ、

午後になつても夕方まで舞う。

二十八日 前日と同じことをするが、新人旧人全部やり宴会をする。

この日は村中全部集まることになっている。

二十九日 後始末の整理をする。

曲目 もとはいぶん多くの曲目を持っていたようであるが、現在は

次ぎの九庭しかやれない。

(1) ヒラ (2) 森にてヒラ (3) ツクバ獅子（四方固め）  
(4) 篠がかり (5) カラバツ（雄獅子がくし） (6) 花がかり

(7) 女獅子がかり (8) 天狗拍子 (9) 銀ぎやく

となつていて。これは祭りの多くの獅子と共に演じるものが多い。(8) 天狗拍子(9)の銀ぎやくはめずらしい名称で、(9)は刀で斬り合うツルギの舞いである。(5)のカラバツと(7)の女獅子がかりは、他の獅子組の雄獅子懸しと橋掛りに相当する。

獅子頭 雄獅子一、雄獅子二の計三。雄獅子カシラは地は朱塗りで、眼珠と歯が金色、鼻の先が黒色、高さ二〇センチ、キヤマブ型口閉塞式、耳一本式、鳥毛飾りである。雄獅子カシラも朱色で高さは三〇センチはある。地は雌獅子と同じである。（因参考）

その他 付け人一、笛六穴三人ぐら。獅子組の人は忌服の者は四十九日がすむまでは加わることができない。

獅子唄 この獅子組にはたくさんの歌詞がこつていて、現在それを全部歌わないようであるが、内容はどこの獅子舞の歌詞にも見られるものが多いため、また別の系統のものもあって注目される。娘と娘の対立を民話にしたもののが歌の内容となつていて、それは娘が娘に対して難題を吹かけた民話である。すじは、「岩を持て難い」という難題である。すると娘が、「矮いましょくから小砂を糸にして下さい」と返答したという話が、娘の唄の中に入れているのである。これはおそらく他の獅子唄にはそうないものであろう。（佐藤厚一氏教示による）

廻れ廻れ水車。おそらく廻りてせきのと廻るな。『京からくだるからえのびょうぶ、ひとえにさらりと引きやまわした』。『七つ子がことし初めてささらする、よくはなけれどお日にかけそろ。』『太鼓打ち太鼓

ふく打ち人かきく、他のお人のお日が恥かし。

ツクバ獅子

わが国の植えて育てた廻小松、枝をたおめて羽を休めろ。『十七のたけの姿に日がくれて、今のささらの切りをちかえた』

ツクバ初め

男殿いかに嫁御がにくいと、岩をはかまに縫えと出しゃれよ。

二度目

岩がはかまにたちぬなば、川の小砂を糸にたもれよ。

三度目

川の小砂が糸ならば、空の浮き雲ひだにたもれよ。

四回目

伊勢佐京のなるに驚いて、はぶしをそろえてはつと立ちそろ。

トヲヒナル

此のお茶は宇治か小萩か小はの茶か、ささらづかれでのみや忘れた。

ヒキバ

十五夜の月は西にとおをひきやる、あれを見まねにひけや小ささら。

銀ぎやく

廻れ廻れ水車、おそらく廻りてせきのと廻るな。

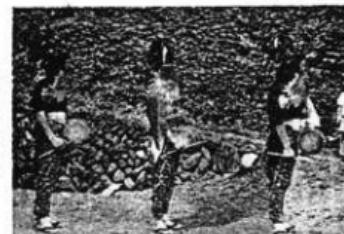
『京から下るから絵の屏風、ひとえにさらりと引きやまわした』。七つ子が今年初めてささらする、よくはなけれどお日にかけそろ。『かまくらの御所の見こしに雪降りて、雪をこかげにたつがまい』。『おもしもよらぬ朝霧が下りてそこで女



森のヒラ（庭の舞）



銀ぎやく（剣の舞）



塩之沢獅子の道ゆき  
撮影 萩原 道



塩之沢獅子カシラの装着(I)  
撮影 萩原 道  
塩之沢獅子カシラの装着(II)



ツクバ初め



として見おとすことのできない重大な価値を物語っている。

## 五、囃しの曲

上野村には独立した囃しがかなり正しい姿で遺されている。太鼓と笛を主としたものである。太鼓のバチは太くて両端がやや細まり中央が太い円形のバチである。これを使って、太鼓の面、角に当たるながら音の変化を出す。祭礼のおねり（道ゆき）の時や、行事の前後に演じられる。現在の曲目はつぎの九種目である。

- (1) シャ切り（道ゆきの笛）
- (2) かじや囃子
- (3) かんかんの
- (4) 寄せ太鼓（人集めの時）
- (5) ひととせ
- (6) 馬鹿囃子（神田囃子のようなもの）
- (7) 大宮囃子



翁の面（白式劇）  
撮影 萩原進



乙 父 囃  
撮影 萩原進

## (8) ねり出し

### [9] 兩国

このうち、「かんかんの」はすでにその項で紹介したとおりである。<sup>(6)</sup> (7) は非常にきやかなものであり、(5)の「ひととせ」はさわやかな曲である。これをちやんと使い分けるあたりは熟練の極致をしめしている。

## 六、神樂

神楽はあきらかに秩父系統で、現在野栗神社と乙母の八幡神社に所属するものの二座がある。野栗の神楽は毎年十月一日に演じられたが、最近はやらなくなり、道具一式は中里村にあるという。楽器は太鼓、小太鼓、笛で、曲目は二十一座ある。典型的な神代神楽である。<sup>(1)</sup> いま野栗神社の曲目をあけると次ぎのようである。括弧内は囃しの曲を示す。

- (1) 先庭 児屋根命（下り葉、祝詞） (2) 国固 麻舞（かまくら） (3) 天麻之舞（大宮かぐら） (4) 我の舞（三ヶ拍子） (5) 前後神樂（下り葉） (6) 天氣舞（大宮かぐら） みすま返 麻の舞 (7) 速の舞（かまくら） 扇の舞 (8) 岩戸闇（かまくら、本間かまくら、大宮神樂） (9) 神子（かまくら） 扇の舞 (10) 鈎鰐、あかめ、もどき、東代主命 (11) 大山祇命 (12) 大蛇退治（大宮かぐら） (13) 神子の舞（かまくら） ささの舞 (14) 雷退治 (15) 猿田彦（三ヶ拍子、大宮かぐら） (16) 種まき場、もとき (17) 鬼神 (18) 飯なげ (19) 神楽舞

この構成のうち分かれて二十一座になるという。麻の舞と扇の舞は、大きい曲目の中に入り入れられている。里神楽のような興舞形式ではなく、式舞形式がほとんどあるから明らかに神代神楽系統の里神楽ということができる。実証は見られなかつたのでくわしい報告はできない。

乙母の神楽は道具を明治三十九年九月新調したもので、秋父の吉田村から人を頼んできて買ったといわれる。神代神楽系の里神楽である点は野栗の場合と同じである。

## IV・芸能を伴う行事

本項においては、いわゆる年中行事とは別の角度から「芸能を伴う行事」として、特殊な神事、行事を報告することにした。他の分野と重複する点もあるかと思うが、その点は諒恕されたい。

お川降り神事 明治四十三年の「上野村誌」に記されているお川降（かわおり）の神事は、神流川上流に位置するV字谷において、必然的に川あるいは水と結びついた神事の発生によって解説されるものとしてよい。最初野栗神社のお川降を調査予定にしたのであるが、あいにく神輿の鳥居から二十間ばかり進み、大幣の左右の者が「オー」と唱え、昔お堂のあった位置にゆき、さらに道路に戻って川瀬へ下りてゆく。川瀬には石を積み上げ、四、五尺の高さにした台座をつくり、その上にチガヤで編んだむしろを置く。これをミダイシヨ（御台所）とよぶ。この御台所の上に神輿を据えるのであるが、その前に御台所を三回廻る行事がある。これがすむと神官の祝詞が表上される。祭場は、タケでシメを張つた所をつくる。神官の行事が終ると祭は終る。すると神輿を川上へ向け、



(1) 乙父のお川降り  
賀前神社を出ておねりにうつるところ



(2) 乙父のお川降り  
川原につき御台所につこうとする



(3) 乙父のお川降り  
神輿を木えて神官祝詞の奏上

撮影 三沢義信

施の時の写真撮影をしてもらったのがあるので併せてここに記しておきたいと思う。（口絵参照）幸い本調査前に野栗神社の聞き取り調査をしたものがあるので、当時のノートからここに抜き書きしておくことにする。

野栗神社の大祭は八月一日である。昔は六月二十八日であった。供えるのはコムギ餅、生魚、酒である。御神幸をして川瀬に降りてゆく神事であるが、先づ神官を先頭にし大幣を持つ者が神輿とともにまず神社の鳥居から二十間ばかり進み、大幣の左右の者が「オー」と唱え、昔お堂のあった位置にゆき、さらに道路に戻って川瀬へ下りてゆく。川瀬には石を積み上げ、四、五尺の高さにした台座をつくり、その上にチガヤで編んだむしろを置く。これをミダイシヨ（御台所）とよぶ。この御台所の上に神輿を据えるのであるが、その前に御台所を三回廻る行事がある。これがすむと神官の祝詞が表上される。祭場は、タケでシメを張つた所をつくる。神官の行事が終ると祭は終る。すると神輿を川上へ向け、

(4) 乙父のお川降り

離し方が休みの間を利用してにぎやかな曲を披露する



信武三撮影



勝山の火あげ

進原萩撮影

小友のカラを用ひて流して、使つたものすべてを川に流す。昔は、装束をつけ覆面をして、川渡した。曲は三通あり、なかなかにぎやかだった。踊り者はサカキの枝に垂れをついたものを持つて参加したそうである。また以前は空砲を打ったそうである。九月廿九日は、「神がえしの神事」とい、川瀬から神が本社に戻るものとされたそうである。が今はやらない。

ところが乙父の貫前神社の御川降の神事は四月三日にとり行われるが、この方は昔の野栗神社の儀式そのままがちゃんと遺されているのは興味深い。神社から川瀬までの行列の順序は、

大幣→三宜（獻饌のもの）→囃子方（笛、太鼓、大祓、太祓）→猿田彦、忠比好・ヒヨトコ→御幣→神官→神輿→氏子総代→村人多勢

という順序で、神社を出て村の通りをゆき、川原へ降りて、流れのまん中につくられた御台所に神輿をすえて神事にかかる。この途中に、囃子方は、シャクリ、かじやはし、ひととせ、大宮はやし、両国、馬鹿囃子といつた曲を次ぎ次ぎとはやしく立ててにぎやかに道ゆきをするのである。軽快なしかも明かるいこの囃子が、早春の山映に昔ながらの情調をただよわして進んでゆくのであるが、この川降りの神事は、川とともに生きてきたこの村の古い民俗を遺す神祭として、他の地方には少いものであろう。大なり小なりの違いはあるが、旧山中領のほかの村々の祭でおおお川降りの神事は、「お川さけの神事」ともよばれる。

勝山の火上げ 八月一日夕方からの勝山の「火あけ」については他の者の報告があるのでここに略すが、鶴川、神流川の谷に一般的に多い火祭りの変化したものである。新羽から勝山に渡る橋の上から、当夜の闇夜の中に、子供たちの手によつて執り行われるのを見た。おそらく、この行事は、當岡市高瀬の大島の迎え火としての發行がからきたものや、同市神農原の百八燈、南牧村星尾や下仁田町青倉のものや神流川渓谷の万場の「火とぼし」とも通するものであろう。野菜でも以前は火あげが行われていた。勝山の火あげは、川原にムギリラによる百八燈と、山の中腹に設けられた鳥居型にしたものにムギリラをつけたものに点火し夜空にあかあかと焚きあがれるものである。最初は川原でV字型のムギリラ塔に次ぎ次ぎ点火されて、川原へはいに火の祭典がくりひろげられる。この時、子供たちの手で、橋の上から、ドンドンと太鼓を打ちならして躍り立てる。一方川原の点火と同時に、石油球（だま）といつくりの間に火種を移した上級生が、ジグザグの坂道を山の頂上へ頂上へ進むのが、美しく点々と見える。やがて、高い山腹の鳥居に一せいに点火され、夜空にタフキリと鳥居が浮かび出る姿は壯麗ともい

うことのできない風物詩である。このように、火祭りに鳥居型の文字を焼きあげる例は、長野県、山梨県地方に見られるから、これからも上野村は交通史上関東平野から信州と甲州への経過地であつた事実から考へるべきものであろう。この火あげは、太鼓でなく、本格的な囃子が行われたのではないかと思うが、今となっては明らかでない。

## V・終わりに

本調査では主として民謡、郷土芸能を主として調査したので報告もその範囲に限定したが、この以前に納原の黒沢馨家文書をはじめ、川和、乙母などの文書調査もしており、山中領全体としての立場から万場町の黒沢勇七氏宅で山中領古絵図や文書なども調査を予えていた。白井の関所関係、交通史関係、明治十七年の秩父暴動などについても資料の収集をしたままになつてあるが、いずれまたの機会に譲ることにした。本報告書が民俗関係に限つたためであるから、できることならば、総合的な上野村の報告書がぜひ企てられてほしいという希望を持つものである。勿論民俗は独立しての意味もあるが、記録や資料の介入を一切を許さないとする立場とともに、遂に記録資料による絶対年代なしには芸能の面などは十分でないからである。

なお、今回の調査にも一方ならぬ御世話になった三沢義信氏はじめ村の人々にあらためて感謝の意を述べて結びとする。(昭和三十六年二月十日  
稿)

「調査・執筆者一覧表」

155—156頁は

個人情報が含まれるため非公開

## 「上野村の民俗」再刊にあたつて

群馬県教育委員会主催の民俗調査は、昭和三十三年度の片品村の調査以来第十六回目を迎えている。

上野村の民俗調査は第二年目の調査であり、上野村教育委員会と共催して昭和三十四年八月一日から四日までの四日間にわたり全部落を対象に調査した。当時は、調査結果の報告書を発行する予算の目算がたたず、漸くのこととて一年分の報告書予算がついたのは昭和三十五年度のことである。このとき既に第三年次の調査である六合村の計画も進めていたので、一年間に二冊の報告書を印刷する予算はとつてい望めなかつた。丁度その頃、みやま文庫は、第一巻の「赤城山」を発行したが、年間五冊という目標で計画していたから、第二巻以後の原稿が急には集まらないので、上野村の民俗調査の原稿を文庫のなかに入れて進行しないかと申入れがあつた。その結果調査委員とはかり、みやま文庫の第二巻、第三巻として発行することになった。今にして思えば、みやま文庫は限られた会員であり、広く民俗の研究者や地元民に配布することは不可能であり、また、本の規格が全く異なるので、その後に発行した群馬県民俗調査報告書には体裁があわず、再刊の声も各地で聞くことが多くなつてゐた。たまたま、今回群馬県文化事業振興会会長石川憲氏より、他の報告書と同じ版で復刊したい旨申入れがあり、調査にあたつた方々の了解を得て、ここに群馬県民俗調査報告書第二集として刊行することになったのである。

再刊となると、写真等も古いものを探してみたが、とうてい揃えきれず、今回は本文中の写真は文庫本よりとらざるを得なくなり。口絵写真だけは全面的に改めた。口絵は、最近都九十九一氏が現地で撮影した多くの貴重写真を提供していただいたので面目を一新したと思う。

最後に、本書が再び旧版を改めて世に出していくだけたことは、担当者として永年苦にしていた肩の重荷がおりた感があり、関係者に感謝し、再刊の弁とする次第である。

昭和四十八年九月三十日

近藤義雄

群馬県民俗調査報告書第一集

上野村の民俗

昭和四十八年十一月二十八日印刷

(非売品)

昭和四十八年十一月三十日発行

編集兼発行者 群馬県教育委員会

前橋市紅葉町三丁目ノ一五(石川薫方)

発行所 群馬県文化事業振興会

前橋市元松坂町六七

印刷所 朝日印刷工業株式会社

電話④四三六七